

---

# 籠の鳥、雲を慕う

七月 優

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

籠の鳥、雲を慕う

### 【Nコード】

N4888I

### 【作者名】

七月 優

### 【あらすじ】

過去に経験した哀しい事件。その事件から人生を大きく変えられた二人の少年と少女。

少年は空賊に、少女は使用人として暮らしていた。少年は過去の傷が完全に癒えぬまま、あの忌まわしい事件が起こった祖国に帰国する。対する少女は、その国で籠の鳥のような日々を送っていた。そんな二人が、出会い、そして事件の真相が明らかになる。

N o . 1 帰郷（前書き）

第一部

## No.1 帰郷

どこまでも、青い空が広がっていた。見渡す限りの青い青い空。

その空を一羽の鳥が気持ちよさそうに飛んでいた。鳥は、純白の大きな体を持ち、立派な長い尾を持っていた。羽を翻すたび、きらきらと光る粉のようなものが鳥から零れ落ちた。鳥自身、陽の光を浴びてうっすらと青みを帯びた光を放っている。ルビーのような瞳はせわしなく動き、綺麗な高い鳴き声が辺りに響き渡っていた。

その鳥をある高い峰から見守る一人の少年がいた。年は十代後半といったところ。セミロングほどの黒髪が風と踊っていた。こげ茶色の瞳は細められながらも、その鳥を一身に追っている。

少年の傍らには、小船に鳥の翼のようなものを中央の左右につけた乗り物があった。片方の先端には、ハンドルのようなものなどが取り付けられていた。

少年が軽く指笛を吹くと、それに答えるように鳥が鳴いた。鳥は何かの合図のようにぐるぐると回り続ける。少年はそれを見て微笑

み、小船の操縦席に乗った。そして、ゴーグルをかけハンドル右近くにあった鍵がさしっぱなしの鍵穴の鍵を回した。低いうなり声のようなエンジン音が響く。

そして、少年はハンドルを思いっきり手前へ引いた。気がつけば小船はあつという間に羽を羽ばたかせ空中へ身を乗り出していた。

少年は鳥の近くに来るとスピードを緩めながら

「じゃあなっ！」

そう大声をかけた。

鳥は今度は宙を何度か回り一声鳴いた。

それを確認した少年は、満足そうに猛スピードでその場を去っていった。

少年はしばらくして、宙に浮かび立派な帆を張った木造の大船の甲板に器用に小船を着地させた。ゴーグルを外し小船を降りて、ゴーグルを自分が座っていたところに軽く投げる。

「どこ行ってたんだよ」

そんな声が飛んできて少年は声のした方を向き

「そこらへん飛んでただけだよ、ドレット」

にっこり笑った。ドレットと呼ばれた少年というよりは青年とい

すべき者は

「小一時間もねえ……」

半ば呆れて、半ば胡散臭そうに言った。黒いバンドナから出ている浅縹色の前髪が甲板を通る風で少し揺れ、黒い瞳が船の船首先を見つめていた。

「もう半日もかからないな、アガパンサス国へは」

腕組みをしながらドレットが言って

「早いもんだな」

少年が感慨深そうに言った。

「やっぱり故郷は懐かしいか？ リュファス」

「何年前にいたと思ってたんだよ。懐かしいとも思えねえーよ。そんな住んでたわけじゃねえし」

リュファスと呼ばれた少年は苦笑いする。ドレットはそんな少年を横目で見ながら口を開きかけたとき

「なーにサボってたんだいっ」

どこからともなく高い女の声が聞こえた。しかし甲板には、リュファスとドレットしかない。

「ドレットは仕事の続きしなっ、リュファスも長々と休憩取ってるんじゃないよっ」

はきはきとしたその声に

「分かってますよっお頭！」

姿はないもののドレットがしっかりと返答し

「にしても毎回どこから見ってた、お頭は？」

リュファスが小さく呟いた。

その日、日が落ち始め、空がオレンジ色に変わった頃

「おいっ、見えてきたぞっ」

船員の一人が言っつて、みな仕事をいったん止め、そろそろと甲板に上がってきた。その中に、リュファスもいた。

「本当に、戻ってきたんだな……」

リュファスは見えてきた国をじっと見つめたまま、消え入りそうな声で言った。

徐々に徐々に、船は国へ近づいていくのであった。

アガパンサス国のそれはとても立派なとある領主の家の窓を拭きながら、使用人の格好をした少女は茜色の空を見上げた。背はさほど高くなく、脚立を使って上の窓まで丁寧に拭いていた。少女は、脚立の一番上にちよこんと座り、茜色の空から次々とやってくる様々な空を飛ぶ乗り物、空船くうせんを眺めていた。

「もうお祭りの季節か……」

少女はポツリと呟いた。そして

「まあ、私には関係ないけど」

ふさぎこむようにうつむく。ココア色の肩まであるストレートの髪がさらさらと揺れた。

少女は、窓を閉めていても聞こえてくる空船のエンジン音にゆっくりと顔を上げた。空船は空をどんどん進み、国や個人の船庫に向かうのだろう。少女は、ただただ空船ときれいすぎる茜空をしばらく見つめるのであった。



## No.1 帰郷（後書き）

読んでくださった方、目を通してくださった方、

本当にありがとうございます。

未熟な部分が多々ありますが、気がむいたときでも良ければ読んでくださるとうれしいです。

また、パソコンのほうで読みやすいような空白を作って投稿している？

つもりです。

機会がありましたら、拝見してもらいたいと思います。

改めて、ありがとうございます。

## No. 2 消せない傷

アガパンサス国の一年の中でも大きな祭りである、戦争解放記念日が二日後に迫っていた。四年前のアガパンサス国と隣国のラナンキュラス国の大戦の終了を祝い、大戦で命を奪われた人の冥福を祈り、大戦を忘れないために設けた日なのだが、何故かこの日だけ国外の人を普段よりも招けるようにし、盛大に楽しむという考えが強くなってしまった。戦争を知らないもしくはよく分かっていたいなかった子どもたちにとっては尚更である。勿論、先の大戦についての催しはやるが、年々その催しも影が薄くなっている。

祭りが二日後に迫る夜、窓のレースカーテンから少しもれていた月夜の光で目が覚めた。ベッドの上から上半身を起こすと身震いしてしまう。案の定自分は何も身に着けておらず、生まれたままの姿だった。窓を見ると少し開いていて、ひんやりとした空気が部屋に入ってきている。初夏とはいえ、やはり夜は冷え込む。

ちらりと隣を見た。すやすやと無防備な姿で寝る、一人の少年がいつものように眠っていた。自分の幼い主であるイノセンシオ。自分より二つ年下で、弟のように思えた。

あんなことがおこるまでは……。

イノセンシオが自分に対する態度が変わったのは、去年の春先のことだった。

「ねえ、セラは将来何になるの？」

教授方から出された宿題に目を通しながら、その傍らで紅茶を入れている自分にイノセンシオは何気なく言った。

「まだ、分かりません。でも、やりたいことならあります」

自分は正直にそう答えた。

「やりたいこと？」

「はい、世界中を旅してみたいんです。ほんの少しでもいい、いろいろな場所を訪れているいろいろなものをこの目に焼き付けたいんです」  
「恥ずかしながらそう言うと、イノセンシオは万年筆を机に置き

「使用人をつけながら、難しいんじゃない？」

「正直に言った。私は多分困った顔で

「イノセンシオ様、私めはずっと使用人として働くつもりはないんです。今は、ひとり立ちできる、つまりこの国で仕事に就ける年齢

の十六になるまでこの屋敷にイノセンシオ様のご両親であるブランカフォルトご夫妻のご好意に甘えてお使えさせてもらっている身で、十六になったらこのお屋敷を出て行くつもりなのです」

自分がそうだった途端、イノセンシオは血相を変えて

「そんなの聞いてないっ」

自分を睨みつけて言った。

「すみません、ご存知かと思っていましたので……」

私が申し訳なさそうに言うと

「じゃあ、セラはこの家を出て行って誰かと結婚して、僕以外の人に力を使うの？ 僕のものじゃなくなっちゃうの？」

まるでお気に入りのおもちゃをとられそうな子どものように言った。

「そうなりますね、イノセンシオ様がベナサール様と結婚してお幸せになるように、私も出来れば結婚するでしょうね」

なだめるようにいった私の言葉に

「ずっと、ずっと僕に仕えてくれるんだと思ってた」

遠くを見るような目でイノセンシオはぼそりといった。

「私よりずっと優秀な者なんてごまんといいます。イノセンシオ様は本来そうだった者がお側にいる身で、私なんて本当はお使えもできないような方なのですよ」

おだてたつもりで自分は確かにそういった。現に事実なのだが。

「………になれればいい」

イノセンシオは私の腕をつかんで何かつぶやいた。よく聞こえなかったので

「えっ？」

私がそう聞き返すと

「愛人になれればいい」

イノセンシオは今度ははっきりとそういった。

「今、なんておっしゃったの、です、か」

背筋が凍る思いで、私は声を絞り出しながら訊ねた。嘘だと思い

たかった。夢か、悪い冗談だと思った。

「愛人に、妾になればいい。そうすれば、ずっと一緒にいられるだろ?」

はつきりといったその言葉に

「ご自分が何をおっしゃられているか本当に分かっているのですか?」

私は驚きと恐怖でややヒステリック気味に聞いた。

「分かっているさ、セラを愛人にしてしまえばベナサールと結婚してもセラと別れることはない。セラは他の男と結婚しなくてすむだろ?」

嬉しそうに言う彼に私は

「ベナサール様のお気持ちはお考えにならないのですか?」  
本気で憤慨していった。

「ベナサールだって、他に男を作ればいいだけの話でしょ? どうせ愛のない政略結婚なんだし」

「なっ?」

私は本当にひっぱたいてやろうかと思った。どうして彼は彼女の気持ちにいくら経っても気づいてやらないのだろうか? あれほど、この少年を一心に思っているものはないというのに。

「じゃあ、決まり。早速父上に言ってこよーっと」

そう言うと、掴んでいた私の腕を放し、立ち上がる。

「お、お待ちください。そんなこと何もお伝えしなくても」

「そんなことじゃないよ、それに父上たちはセラを追い出す気なんだろ。早めにこういうことは言わないと」

「でも、今はお勉強の時間です」

私が必死にそう引き止めると

「分かったよ」

しぶしぶと座りなおし、イノセンシオは黙々と勉強に取り掛かった。

私はこっそり胸を撫で下ろした。

どうせ、もう少しで十三になる子どもだ。愛人の本当の意味も分かっていない、すぐ忘れるだろう、本当に私はそう思っていた。

しかし、彼はもう立派な男になっていて、愛人にすることも生半可な決意でなかったことを、この身を持って思い知ることになる。

それから、後悔と辛い日々を送ることになり、今に至る。

私は溜め息をつくとき、自分の左手、ベッドの下に投げ捨てられた自分が着ていた衣服を取った。着替え終わり、何一つ悩みのなさそうな少年の寝顔をベット近くで立ちながら見つめた。上半身裸で、腰辺りまで薄い毛布をかけ眠っている。多分、イノセンシオも裸だろう。風邪をひいては大変なので毛布を肩くらいまでかけてやる。

イノセンシオはやるだけやったら疲れてすぐ寝てしまう。私もやられるだけやられたら、その苦痛と疲労ですぐ寝入ってしまう。脱がされた服をそのままにして……。

イノセンシオはほぼいつも全裸なのだが、いつも毛布にくるまっているためなかなか風邪を引かない。しかし、私はくるまうべきものがとられているためしょっちゅう風邪を引いた。風邪をひいてからは、イノセンシオがこれからはちゃんと僕が服を着せるからと言いつつ、あの悪魔のような行為が終わると服を着せてくれるようになった、はずだった。しかし、やはり今日のように自分の快感に酔いしれ、私なんてそっちのけで睡魔の誘いを断れないわけだ。

私は、イノセンシオの左手のベッドの方に周り、イノセンシオが脱ぎ捨てた服を綺麗にたたみ、私が寝ていたところにおいた。そして、少しあいている窓を閉めに行った。

窓に近づくとこうこうとした満月に思わず見入ってしまった。満

月と星たちが暗い世界を何より美しいものにしていた。

いつまでこの景色をこの窓から眺めることになるのだろう。本当に一生なのだろうか？ 彼が私を手放そうとしない限り、私は彼が婚約者と結婚した後も愛人としてこの屋敷で本当に暮らすのだろうか？ もしかしたら好きでもない彼の子を産むことになるのだろうか？ そう思うと、またいつものように涙が出た。

空はただ月がきれいに浮かんでいた。

リュファスは、船の狭い自室のベッドで仰向けになっていた。

「もう、四年も経つのか……」  
ぼそり天井を見ながら独り言を言う。

この国に行くとは分かってから、たびたび四年前のあの事件のことを思い出してしまう。

列車から放り出された自分、その直後に起こった爆発。本当に一瞬のことだった。地面に直撃した痛みを耐えながら、瞬く間になくなったいくつかの車両がこの目に焼きついて離れない。炎、煙、人々の叫び声や泣き声。まだ鮮明に残っていた。



### No.3 よくない出会い

今日は嬉しいことがあった。それは、こうして久々の休暇をもらえたこと。なぜなら、

明日のお祭りのためにベナサール様ご一家が館に泊まりに来たからだ。婚約者が来たのに、

イノセンシオは相手をしないわけにはいかない。こんなことなら、もうずっと館に

いらっしやってほしい。流石に、彼女が近くにいるときは彼も私と夜を過ごすのを控えている。

城下はもうお祭りで彩られていた。どの家も花や色彩豊かな布を飾り、どの商店街も

人でにぎわっている。

「店内全部二十五パーセントオフ！ お祭りまでですよー、ぜひいらっしやって

ください」

可愛いエプロン姿の仕事着の女性がケーキ屋の前で、客引きをしていた。思わず、

シヨーウィンドウをちらりと見る。目に入るのは、見た目もおいしそうな様々なケーキ達。

ふう。思わず溜め息をついた。食べたいとは思っが、流石に一人で店内に入りいくつかの

ケーキを一人で食べる勇氣はない。買って帰ればいいのだが、帰って一人だけ食べるのも

気が引ける。かと言って、皆に買っていくと高くつく。

こういうとき、本当に友達がほしいと思う。イノセンシオと關係を持ってから、

使用人たちも距離を置くようになった。ただでさえ、広い人間關係ではなかったのに、

余計に狭くなったというわけだ。いいとばかりである。

ここは諦めて、雑貨や服でも見よう。私がケーキ屋を後にしようとした、まさに

そのときだった。

「待ったぞ、妹よ。ほらこっちだ」

突然左肩に手をおかれ、話しかけられた。

「お客さん困りますよ、無銭飲食はっ！」

体格のいい初老の男性が冷たく言った。

「いや、だから、もうすぐ家から誰かが来ますから」

そんな苦しい嘘をつく。それもこれも、俺から財布をクスねこの場から逃げた仲間の

せいである。財布をすられること自体、ホントは空賊としてされるべきでない、

かつこ悪いことなのだが………。あー、くそつ。帰ったら夕  
ダじゃおかねえ。

ああ、このままじゃ本当に食い逃げしねえといかねえじゃねえか。

そう思ったときだった。

隣のケーキ屋のショーウィンドウを見つめる、少女が目映った。  
少し変わった色の

肩ほどのストレートの茶髪に、大きな赤目。背は低く小柄で、色白  
の頬はうっすら桜色を

していた。服装からして、この国のものようだ。この国ならではの  
草花の刺しゆうが

ところどころ施された、シンプルなワンピースを着ていた。

別に誰でもよかったし、彼女が自分が払えない金額ほどの金を持  
っているか

分からなかったが、とりあえずターゲットに決めた。

女を脅すのは気が引けたが、俺はもう

「来たよ、あれ妹」

俺はあいつを指差すと、もうあいつに向かって歩き出していた。  
そして、

「待ったぞ、妹よ。ほらこっちだ」

肩に手を置き、引き止めると、俺はそのこの右手を取り歩き出した。抵抗されるかと

思ったが、やけにおとなしい。急いでいるので表情はよく分からなかったが、おとなしすぎる。

まあ、いいや。抵抗されれば、おとなしく言うことを聞かせるだけだ。俺は、

とりあえず、さっき食事をした店長が訝しげににらみつける店へさっそうと少女を連れて

歩いていった。

私たちの  
初めての出会いだった。  
それが、  
俺たちの

えっと、私多分兄弟いませんんですけど。

私は、見知らぬ彼に手を引かれながらそう何度も心の中でつぶやいていた。この国には珍しいセミロングほどの髪の長さの少年。背や見た目からして年上だろう。さらさらと流れる黒髪、こげ茶の瞳。かつて住んでいた故郷の近くには黒髪、茶色の瞳は多かった。完璧なこの国の言葉を使っているが、他国から来たことはすぐ分かる。

頭二個分ほど上の高さの身長に、細すぎずたくますぎないその背をただ見つめた。

少年はこの国の料理を振舞う一般的な飲食店のカウンターに連れて来ると、さっと私の裏に回り

「さ、早く払って家帰ろうぜ」

明るい口調でそう言った。

「えっ？」

私が訳が分からずそう言うと、背中に硬い鋭利なものが当たった。

そして、ようやくはめられたのだと気づいた。

「ずいぶん似ていらっしやらない、ご兄弟ですね」

店長が勘鋭くそう言うが

「よく言われます、それで、お支払いはいくらですか？」

にっこりとおくろった笑顔に

「あ、ああ。一万三千六百ユルだ」

私は肩掛けかばんからすぐに財布を取り出し、支払いを済ませると「どうも兄がすみませんでした」軽く一礼し、その店を出た。

少年はすぐに逃げるだろうと思われたが、しばらく後ろからついてきて

「何だよ？」

訳が分からないというような声が飛んできて

「何がです？」

私は振り向いた。

そこでようやく少年の顔をちゃんと見ることができた。整った顔立ち、でも瞳は鋭いかつい目と言えるような目をしていた。健康的な色の肌に、旅行者ではなさそうなモノクロのシンプルな格好。

「普通少しは抵抗するもんだろ？ 何でそんな平然としてられんだよ？」

少年は右手を額に置き、目をつぶり嘆息をもらした。

「なんで、何でしょうね？」

私は苦笑いで逆に聞き返してしまった。

「お前、ほんつと変な奴」

「人を脅しておごられるような人に言われたくないです」私はそれは冷たく言った。

しんとなった空気の中、少年は

「悪かったな、でも俺だって好きでこんなことしたんじゃないんだ

「よ」

「じゃあ、なんでです?」

首を傾げる私に

「それは、その、一緒に食べてた友達に財布貸して、そのままそいつらが食事代支払うのは俺なのにそれ持ってどっかいったって言うか」

しどろもどろ言う彼に

「それは災難でしたな」

「ああ、まっただ」

彼は溜め息一つ。

「脅して悪かったな。でも助かった、この礼はするから」

「そういつて、お祭り終わったらこの国出ていくんですよね?」

私のその率直な質問に

「なんで他国から来たって分かった?」

彼は少し驚く。

「確かに言葉は少し訛りあるくらいで完璧なんですけど、この国でそんな髪長くしてる人いないですもん」

「なるほどなあ、てかお前も少し訛りあるじゃん」

彼の指摘に

「あなたと話してるからですかね、ちゃんと標準語も話せますよ」

私が完璧な標準語で返すと

「……リユファスだ」

彼は、ぼそりといった。

「はい?」

私がつい聞き返してしまうと

「だーからー、俺の名前はリユファスだ。お前は?」

頭をかきながら言う彼に

「それ、本名ですか?」

失礼だと思ったが、聞き返してしまった。



彼もそれには、カチンと来たのか

「正真正銘の本名だっつもの。信用できないだろうけどさ、この礼は出国前に必ずするから、お前も……、本名じゃなくていいからなんか呼び名言えっ！」

一気に言った彼に

「え、つと、セラファイナです」

その迫力に負けうつかり本名を言ってしまった。

「で、住所か連絡先教えて。金返しに行くからさ」

あちゃー。それは流石に無理だつて。個人上つてか、職務上。どうしよう……。

「別になんも悪いことしねえから。んな怪しむなって」

「そ、そうじゃなくて……。私、その」

い、一体どうすれば……。そう思つて横を向いた。目に入るのはさっきの、ケーキ屋

さん。そうだつ！ 私の中でこの考えが頭にひらめいた。

「お金は返さなくていいですから、そこのケーキ屋付き合ってくださいー！」

私はケーキ屋を指差していた。

店内は、案の定女ばかりだった。しかし、カップル連れも多く、それを見てほつと胸を撫で下ろした。

それにしても………。俺はどのケーキを食べようと目を輝かせている、確かセラフィーナ

とか言う少女を横目でちらりと見た。本当に変わっている。いきなり脅されて金払わされた

つてのに、そんなやつと今からお茶しませんかなんていうやつこいつぐらいだと思っ。

ほんとに変なやつ。でも、………まあいつか。

「お客様、ご注文はお決まりになりましたか？」

店員があいつにそう聞くと

「ユファスさんは、どうします？」

あいつが俺に振り向いていった。

「えっ、いや俺は………」

頼まないんですかと、子犬のような目で見られ、俺は仕方なくざつとショーケースを見渡し

「じゃあ俺は、ザッハトルテで」

「あと、ピンク芋のモンブランとミスキーナッツのロールケーキとチヨコレートシフォンを

お願いします」

女って………。俺は甘いものは嫌いじゃないが、こういう甘党の女は本当にある意味

すごいと思っ。

「店内でお召し上がりになりますか？」

「はい」

「お飲み物はいかがいたしましょう？」

「私は紅茶で、ユファスさんはどうしますか？」

「あー、俺も紅茶でいいや」

「茶葉はどうなさいますか？」

茶葉まで聞くのかよ。めんどくせえな。

「ダージリンでお願いします」

「俺も」

聞かれる前に俺が言って、店員にテーブル番号を言われ、席に着いた。運良く店の奥の端の

テーブルで、俺は奥の店内を見渡せる椅子に座る。そしてあいつも座り、店員がまだ来ないことを

確認して

「あのさ、俺の名前覚えてる？」

いきなり訊ねた。さっきから突っ込もうとは思っていたのだが、本人のために言えずにいたこと。

「ユフアスさんですよね？」

そう、それなんだよ。

「お前、リユとユ区別できないんだな」

笑いを必死にこらえながら言っ

「えー、言ってますよ、り、ゆ、ユって」

あいつは本当に困りながら言う。それがあまりにもおかしくて、

「いや、言えてないから」

俺はにっこり言っ

しかし、そう言っ

あちゃー、からかいすぎた。

そんなところにあいつが楽しみにしていたケーキがやってきた。

「ごゆっくりどうぞ」

店員が去ったのを見計らい

「ま、まあ、この国には多いんだって」

そう俺がでたらめを言っ

「確かに、言語学的にもそうらしいですけど、それがいざ自分だと恥ずかしいですよ。自分が

田舎からの出だっ

少し頬を紅潮させていうあいつに

「勉強してんだ、学校楽しい？」

言語学と聞いてそういつた俺に

「いえ、学校行ってないんですよ。しゅじ、知り合いから聞いたんです」

「へえ、そういや首都出身じゃないって、出身どこなの？」

何気なく聞いた一言に、あいつは少し黙り、紅茶に砂糖を入れかき混ぜながら

「シテー又地方です」

ゆったりとした口調で言った。その言葉に俺は目を見開き

「俺はジユレだ……」

つい口から言葉がこぼれた。無意識に口から出てしまった言葉に、思わず口をふさいだ。

仲間にも、ドレットにすら言わなかったのに。

「そうなんですか、だからですかね。その髪と目の色、なんか懐かしくて。そうか、ジユレ。」

お隣に住んでたんですか」

身近なつながりに驚きつつ、目を細めながらあいつは言った。俺は何とか平生を取り戻そうと

「お前の髪色は、あっちじゃ珍しい、よな」

「はい、そうですね。……あの、食べないんですか？ もしかして、甘いもの

嫌いでした？」

全くケーキに手をつけずにいた俺に、心配そうにあいつが言って「あ、いや、レモンティーにしようか、ミルクティーにしようか迷

つてて。甘いものは別に

嫌いじゃない」

「そっか、よかったー」

ほっとするあいつ。それを見て

「おまえさー」

「あの、そのお前ってどうにかなりませんか？」

俺の言葉を遮ってあいつが言う。

「えっと、セラファイナ。なんか、いいづらいな……」

「セラでいいですよ、みんなそう呼んでますから」

「じゃあ、俺はユファな。さん付けなしで」

「でも、ユファスさん、年上だし……」

「ユ・ファ！ そっぴやお前、12、3ぐらい？」

「……15です、今年16」

ふてくされたようにセラは言った。

「いいじゃん、女は若く見られたほうが、まあ俺も似たようなもんだけど」

「何歳なんですか？」

「今年18」

「確かに、18には見えませんね」

目を丸くするセラに、

「ま、お互い童顔同士、将来損はしないだろ」

俺が笑って言うのと、あいつもつられて笑った。やっぱり、こいつ、言いそびれたけど、

結構笑うと可愛いじゃん。周りから見たら、俺らもある意味カップルみたいに見えるのかね。

そう思いながら、レモンティーを一口すすった。

## No.5 ものじち

「てか、よくそんな甘いもの食えんな」

俺が呆れて言う

「まあ甘党ですし、それにお昼まだだったんで」

セラは私服の笑みを浮かべそう返す。

俺はとつくにケーキを食べ終え二杯目の、今度はミルクティーにした紅茶を味わっていた。目の前の彼女のミルクティーも二杯目突入中。そして最後の濃いピンク色のモンブランを食べようとしていた。俺はちらりと店員が置いていったテーブル端に置いてある、裏返しのレシートを手に取り、金額を確認すると

「お前、ほんとに俺の分までおごっていいの？」

少し心配になって聞いてしまった。

「付き合わせてるのは私ですし、ここのケーキすごい食べたくて今こうしてあなたのおかげで食べれて本当に嬉しいんです、だから気にしないでください。それに、私ひとりで食べてるの変じゃないですか」

さらりと言われ

「いや、てか、元々悪いのは俺なんだけど」

罪悪感がちくりと痛む。続けて

「そっぴゃお前って、金持ちなの？」

俺のその一言に

「まさか、ただの庶民ですよ」

セラは目を丸くした。

「でも、財布結構分厚かったじゃん」

「なかなか、お金使う機会がなくて」

苦笑いをする彼女に

「ふーん、友達と遊びとか行けばいいのに。もしかして友だちいないとか？」

何気なく言ったその言葉に

「・・・・・・・・」

彼女は黙りこくってしまった。地雷踏んじやったかな・・・・・・・・

？ 彼女の顔色を伺っていると

「そう、ですね。いろいろ、あったもので」

困った顔をしながら言う。

「大変なんだなあ、で、学校行ってないってことはもう働いてんの？」

「えっと・・・・・・・・」

急なその質問に彼女は戸惑っているように見え

「別に無理に言えとはいわないけど」

「・・・・・・・・詳しくは言えませんが、これでも使用人として働いてるんです」

「へえ、何でまた使用人？」

確かに言われないと本当に使用人のようには見えない。

「数年前、事故で両親が死んでしまって、そのとき偶然知り合った方が住み込みで働かせてくださってるんですよ」

スウネンマエ、ジコデ、リヨウシンガシнда・・・・・・・・？

反射的にあの記憶がよみがえる。

まさかな・・・・・・・・。ありえない、考えすぎだ。

「別に気にしなくていいですよ、そのおかげでお財布は分厚いですしね」

俺が黙ってしまったので、明るくいうセラに

「そっか、なるほどね、だから分厚かったのね」

そりゃそんな境遇じゃ友達少ないかもな・・・・・・・・。

「そうです、私じゃなくて仕えてるところがお金持ちなんです」

「そうです、私じゃなくて仕えてるところがお金持ちなんです」  
「言ってからしまったと心の中で思った。本来こういうことは言わないほうがいいのだ。万が一、お屋敷に何かあつたら自分の責任にもなりかねる。」

「そ、そういえば、あの凶器なんだったんですか？」  
いきなり話題を変えた私に

「えっ？ ああ、これだよ」  
彼はそつとテーブルの中央にそれを置いた。

「これって、石ですか？」  
思わずそう訊ねてしまった。それは、真つ黒な光沢のあるひし形を、少し伸ばしたような形の鉱物のようだった。先が尖っていて、確かに後ろからではナイフか何かに思えたのかもしれないがなかった。

「さあ？ 鳥とまたちがくれたんだ」

「へえ、珍しい鉱物なんでしょうか？」

私がじっくり見ていると

「欲しかったらやるよ」

彼は何を思ったのかそういった。

「いいですよ、お友達からのもらい物なんでしょう？ もらえませ  
ん」

「律儀なやつ、じゃあさ、俺がお前に金返すまでものじちにしとけ

よ」

「ものじち？」

首を傾げる私に



「そ、人質ならぬ物質？ ならいいだろ？」

「それなら、分かりました」

実は、少しいいなって思ってたんだ。よく見るとラメみたいになりきらしたものが混じってるし。借りるくらいはいいかな、なんて結局折れちゃった。そうだよ、こういう貸し借りなんてもう、きつと・・・・・・・・ないのだろうから・・・・・・・・。。。

一時貸した石を嬉しそうに手に取るセラを、俺はまじまじと見ていた。セラはおそらくこの石の価値を知らないだろう。この石、ある時あいつがどこからかとってきてくれたのだが、何でも売れば最低でも十万ユルはすると鑑定屋がいつていた。仲間たちにもこのことは告げていない。冗談でよく行く飲み屋で働く女の子たちにあげるといったこともあったが、きらびやかに美しく飾ることに夢中な彼女たちにこんな地味な石はいるはずもなく、ほしいのほの字すら言われたことはない。

それが、目の前にいる少女はどうだ。今までにない返しをしてきた。やはり変わっているというか、なんとというか。でも、これでも地でも出国前にセラにお金を返しに会う理由も出来た。

ん、そういやどう返せばいいんだ？

「結局、どこに住んでるんだ？」

そのいきなりの質問にミルクティーを飲んでいたセラはむせた。

「だいじょうぶかよ」

半ば呆れて聞くと

「だ、大丈夫です。でも、住所なんてどうして聞くんですか？」

何故か恐る恐る聞くような感じでセラが言うと

「だって、住所とか分からないと金返せねえだろ？」

ここ首都で人多いんだし。だいたいの場所でも分からないと待ち合わせ場所も決められない。

「いい、いいですよ。このケーキ屋つきあってくれたことでチャラってことで」

ある意味拳動不審な彼女に

「それじゃ、俺が納得いかねえよ。つーか、さっきの物質いみねえ

し」

「あ、そつか……。じゃ、じゃあ、中央公園で待ち合わせ  
しませんか？」

「中央公園？」

「はい、あそこは一年中きれいなんですけど、今はお祭りで飾られ  
てていつそうきれいなんですよ。お祭り終わったあともしばらく装  
飾はそのままだから」

うれしそうに話す彼女。仕方ない、そこを待ち合わせにするか・  
……。

「中央公園ってどこ？」

「ここから、十分くらい歩いたところにあるんです」

「一回行けば分かるから、案内してよ」

そう、俺は土地勘がなくてもだいたい道を覚えられる。今の職に  
ついてからそういうことも身につけたのだ。

「分かりました。じゃあ、行きましようか」

ケーキを食べ終えた様子の彼女がそう言って、俺はあることに気  
がついた。

「あ、あのさつ、支払いのことなんだけど」

彼はいきなりそう切り出した。困ったような彼に

「なんですか？」

首を傾げる私。

「俺に支払わせてくれない？」

両手を顔の前で合わせ申し出た。

「……はい？」

一瞬何がなんだか分からなくなって私はそう言ってしまった。

「だってさ、こういうの払ってもらって、なんていうか、俺、ひもみたいじゃん」

顔をそらし、気恥ずかしそうに彼は言った。ああ、そういうこと。

「た、しかに、そう、かもしれないね。でも、私の財布ピンク色なんですよ。しかも花柄の。支払いはやっぱり私がするんで、先に外出て待つててください。それなら、いいでしょ？」

私の提案に

「分かった、それなら」

納得したような彼に

「男の人って、何で女の子にそんなにおごってあげるとか何か買ってあげるとかするんですかね」

イノセンシオもそうだ。たまに、私によく服やらなにやら買ってくる。あんな高そうな服、好みじゃないのだが。

「さあ？俺も聞きたいよ」

彼は苦笑いしながら言った。

彼女が支払いを済ませてるのを、俺は店の外で待っていた。

意外に気がきくんだな、彼女の提案に俺は内心びっくりした。男慣れしていなさそうな彼女がここまで気がきくとは思えなかったからだ。今まで彼氏がいなかったとかじゃ、ないのかも知れない。でも、今男がいるとは思えない。彼女の性格からして彼氏がいるのに違う男と食事はしないだろう。でもなあ、女は見かけによらないからなあ。

そんなことを考えていると

「お待たせしました」

彼女が店から支払いを済ませて出てきた。そしてとことこ俺のところに来ると

「ユファさんこそ、意外と律儀ですよ。私が支払い済ませている間に逃げることもできたのに」

ほほえむ彼女に

「そういりゃそうだな」

つい納得してしまう俺。でも、別にはつくれる気おきないんだよな、こいつつて。それにやっぱり、盗賊まがいの職についているとはいえ、金があったのにあいつらのせいで脅しちゃったんだもんな。しかもこんな女の子を。やろうにおごらせても、女の子におごられるのはやはり俺のポリシーに反する。

「初対面の人にあんなことするから悪い人かと思ってたけど、意外にいい人なんですな」

「いや、確かに俺はまだいいやつ部類かもしれないけど、お前簡

単に他人信用するなよ。世の中、いいやつなんてそんなないんだから」

余計なお世話かと思ったが、俺はそう忠告した。だってこいつ騙されやすそうだしなあ。

「そう、ですよね……。信用して裏切られるのは哀しいですもんね」

伏し目がちにセラが言った。俺は「冷たい人ですねえ」とか、言われるのかと思ったが、まさかこいつの口からこんな言葉が出てくるとは思わず動揺してしまふ。こういう時なんと声をかければいいのかだろうか？ そう思っていると

「さ、行きましようか」

さっきとは打って変わって明るく言う彼女に

「あ、ああ、そうだな」

俺はそんな返答しかできなかつた。

中央公園には、あつという間についた気がする。彼は見るなり

「さすが、中央公園っていうだけあるな」

そう称賛し辺りを見渡した。青々と茂った木々たち、手入れが行き届いた花壇の花々。中央の噴水には人が行きかい、清潔そうなべ

ンチには人が座っていないところはない。この公園は敷地も広く、きれいなので休日や夕方には人がたくさんにぎわう。

そして、柵や電灯には夜になればイルミネーションがきれいになりそうな電球や、昼には普通の造花、夜になれば蛍光色でほのかに光る花になる装飾、色彩豊かな布や紐がお祭り用にあたりを彩っていた。

「明日はきつと一番きれいでしょうね」

ぼそりといった一言に、

「じゃあ、明日にするか」

彼は何を思ったのかそう言ってきた。

「えっ？」

「だから、明日ここで会おうぜ」

あ、あしたあつ！ 明日は確か、仕事を入れてしまったはず・・・

「あの、明日実は仕事は入ってて」

言い出しにくかったがそう言つと

「何時から何時？」

「朝から、夜九時まで・・・」

「あちゃー、ちょうど祭りの時間とかぶってるな」

苦笑いする彼に

「はい」

私は溜め息をついてしまう。そんな私を見て

「じゃあさ、祭りは終わってるけど、仕事終わりこここれないか？」

彼のその提案に

「いいん、ですか？」

うれしさをなるべく外に出さないように訊ねる。

「ああ、待ってるから」

「じゃあ、十時くらいにここに來ます」

「分かった、すっぱかすなよ。俺が言うせりふじゃないけど」

頭をかきながら言う彼に

「絶対来ますよ」

私はもううれしさを隠せずそう言ってしまった。誰かと待ち合わせなんて、いつ以来だろう？　それがこんな出会いをってしまった人とはいえ、楽しいものなんだな。もっと、こういう出会いが、人との付き合いが広がればいいのに……。

そう思い空を見上げた。青い空に、雲がゆっくりとたなびいていた。



## No.7 偶然のつながり

「にしても、人多いな」

俺が率直な感想を述べ

「お祭り前ですし、もともとここプチ観光スポットみたいなものですから」

セラが困ったように言う。

偶然空いた清潔そうな白いベンチに座り、何故か話をする事になった。いや、聞きたい、聞かないことがあったのも確かになのだが……。もうこれはデートっていえるよな、しかも結果俺がナンパした感じになる。向こうは、気づいているのだろうか？

それにしてもほんとに人が多い。子ども、カップル、家族連れ、老夫婦。老若男女問わずここにいる。カップルが数組ほど目の前を通り過ぎ

「やっぱり、ここって定番のデート場所だったりもするのかな」

足を投げ出し、呆れたように言ったその一言に

「さあ、どうでしょうか？ 私そういうの疎いんで……」

恐縮そうに彼女が言った。これは自然な流れになる、そう思い

「彼氏とかいないの？」

俺はとっさに尋ねた。その質問に彼女は視線を上にしたがら

「そう、ですね。彼氏、は、いません、ね」

歯切れの悪い彼女に

「好きなやつも？」

俺はたたみかけた。彼女は少し考えてから

「そういうユファさんはどうなんです?」

質問に質問返しをされ

「いねえよ。出会いがなくてね」

即答してしまう。この返答に彼女は何故か目を丸くし

「意外、ですね」

「そうか? 工作上、移動ばっかしてるから、実際そうでもないんだよ」

「そういえば、お仕事何なさってるんですか?」

きよとんと首を傾げる彼女。俺は返答に困った。正直に言えるはずがない。盗賊まがい、いや盗賊みたいなことしてるなんて。

「そうだな・・・、運送業って言えばいいのかな。一時貸したりしたものを、持ち主のところに運び返すというか、なんというか」

苦し紛れの返答に

「へえ、少し変わった職業ですけど、面白そうだし、人のためって感じな職業なんですね」

少しも疑わずセラはそう言って

「そりゃどうも」

胸が少しばかり痛む。

「正直、うらやましいです。そう言うお仕事してるいろいろなところを訪ねることができそうだから」

「まあ、確かにな。一つのとこに留まってるられないってことなんだけど」

「それでも、うらやましいです。私、この国で生まれて、まだこの国から出たことないから」

彼女は、遠くの空を眺めながらそういった。

この国を出る、か・・・。。この国を出たとき、どんな気持ちだったっけな。ただ無性にあの忌まわしい事件から、この国から逃げたくて、ほとんど亡命に近い感じでこの国を出たんだけ。もう、こいつみたいに他国へ行くことは新鮮じゃなくなった俺がなく

したものを、まだこいつは持つてゐるってわけか……。  
「別に出たきゃ出ればいいじゃん。いまはすっかりどこも平和なんだしさ」

俺が何気なく言った一言に

「出れたら幸せなんですよけどね」

彼女は聞き取れるかどうかの声で言った。思わず

「えっ？」

聞き返してしまった俺に

「もっと早く平和になってほしかったですね。ラナンキュロスとの平和協定がもっと早く結ばれば、きつと、もっと多くの命が救われた気がしますから」

ラナンキュロス、平和協定、そしてそれに引っ張られるかのよう  
に、セラの両親の事故死とあの事件が思い起こされていく。そうだ、  
確かめなきゃいけない。彼女もあの事件の被害者か、確かめないと  
気が済まない。動悸が、一気に早くなる気がした。

「あの、さ、これから聞くこと、言いたくなかったら何も言わなくていいから、聞いてもいいかな？」

そう切り出した俺に、彼女の顔の血の気がうつせる。

「なん、ですか？」

俺は深呼吸して自分の気を落ち着かせると

「両親事故死したって言うってたけど、どんな事故だったんだ？」

そう一気に言った。

「なんだ、そんなことですか」

私は胸を撫で下ろした。びっくりした。まさか、私があそこで働いている使用人か、イノセンシオとの関係を聞かれるのかと思い、冷や冷やしたのだ。

「そんなことつてないだろ、人が真剣につ」

私の返答に彼はいらだつて言って

「す、すいません。全く違うこと想像してて」

素直に謝るしかない。謝ったあと、彼は肩の力を抜き、大きな溜め息をついて

「気合入れて損したつ。つたく調子狂うなあ」

ぶっきらぼうに言う。すねたように見える彼を見て、私はつい子どもみたいな人だなあと思ってしまった。実際は二歳も年上なんだけど。そんな彼の横顔を見て私はつい笑みがこぼれてしまうのであった。

『なんだそんなことですか』はないだろう！ 人がある意味トラウマ乗り越えて質問したつてのに、なんなんだよ本当に。俺は気分を静めるため、また大きく息を吐いた。

「すいません、そういうこと聞かれるって本当に思っていないくて、こちらの様子を伺うセラに、俺は横目で

「で、何の事故だったんだ？」

溜め息交じりに聞いた。なんだそんなことというくらいなのだ、ありきたりな事故死だったのだろう。俺が心配していることとは違うのだ、そう心を平生に戻したその矢先だった。

「列車事故です。覚えてませんか？ この国で平和協定を結ばせるきっかけとなった列車爆発テロのこと。多分、世界各国でこの情報が流れたはずですよ。その列車に偶然乗り合わせてしまったんです」俺の心臓が、一回止まり、大きく脈を打った気がした。心の中でどうか違ってくれと願っていたはずだった。さっきまで、本当に違うと確信を得た、はずだった。しかし、奥底では彼女も俺と同じ事故の被害者だという何の根拠もない確信があった。それが、現実になっちゃった。

「まさか、とは思うけど、お前も乗ってたとか？」

焦り立つ心臓をどうにか押さえながらゆっくりと俺が聞くと

「はい、乗っていました。偶然、爆発を免れた車両に乗っていて、生き延びられたんです」

目を閉じ無表情に言う彼女。

ああ、そうなのだ。俺と彼女は同じなのだ。あの事件の被害者であり、生き残り。こんなつながりがあったなんて。……どうして彼女なのだろう？ どうして帰って早々、あの事件と関わりあう人と出会ってしまったのだろう。運命か、それとも神の悪戯か。ほんっと、不思議な縁ってあるもんだな。そう思い、はるか彼方の空を見上げた。

もう、完全に思い出してしまった。あの日、あの列車で起きたこと。

『お前は生きる』

そう言われ、列車の窓から投げ出されたあの日のことを……

No. 8 もどかしさといらだち

どうしたのだろうか？

私は、ちらりと隣に座る彼を見た。さっきから、こちらに見向きもせず、じつと眉一つ動かさずにいる。本当にどうしたのだろうか？

もしかして……。さっきのことで、気を使わせちゃってる……。もし、もしそうなら何か言わないと……。でも、一体何を言えばいいか。

私が困惑しているまさにそのときだった。

「なあ」

彼が私に話しかけた。

一瞬、こいつにあの事を全部言ってしまうかと思った。全部言ってしまったかった。でも、出来なかった。何か俺をそうさせた。あの事を全部吐き出せたなら、どんなに楽だったことか、考えればすぐに知れたことなのに……。

落ち着け。俺は自分にそう言い聞かせた。

第一、初対面のやつに、いくら同じような境遇だからって、こんなこという必要ないんだ。そんなの馬鹿げてる。

でも、心の中のもう一人の俺が言った。こいつにこんだけ個人的なこと聞いといて、俺だけ何も言わないのか？ それってフェアじゃないんじゃないか？

それでもいい。俺は自分に言い聞かせた。俺には、ないんだ。まだ。こいつに、他の誰かに、あの過去を、自分の過去をさらけ出せない。そんな勇氣、俺には、まだないんだよ。

いったん、あのことはまた忘れてしまおう。片隅に、使われない倉庫の中にでも、しまっておけばいい。

無理やり、俺はあの過去を払拭した。眼前に広がるは、おだやかな青空。隣には、偶然にも、同じ過去を持つ少女。こいつも、俺なりに苦労したのかもしれない。俺までとは行かなくとも、赤の他人の家に居候させてもらってるくらいなのだから。……待てよ。俺は身寄りがなかった。でも、こいつは？ こいつまで、そんな境遇まで一緒なのか？

俺は思い悩んだ挙句、結局

「なあ」

そう声をかけた。

「は、はい。なんですか？」

数秒後、彼女は何故かどきまぎしながら言った。

「その、親戚とかいなかったのか？ 頼れる人」



その質問に彼女は少し間をおいてから

「……………いえ、いなかったわけじゃないんです」

彼女のその言葉に俺はほっとした。良かった、両親が死んで本当に独りになった、ってわけじゃなさそうだ。

「でも、最終的にはそうになりました。」

彼女は膝上で握った自分の小さな手に目を落としながら言った。

それに俺は

「えっ？」

思わずそう言ってしまふ。

セラは苦笑い気味に

「母は他国の出身で、私母方の親族誰一人分らないんです。母も私に母方の祖父母はいないといっていたし。父のほうは……………」

「……………」

そこまで言つて、セラは口を閉ざしてしまった。そこまで言えばだいたい想像はつく。俺はセラに

「無理して言わなくていいぞ」

「いえ。実は事故のあと、父方の祖父母を訪ねたんです」

「一人で？」

「いいえ、今お仕えしているだんな様ご一家が付き添ってくださいました」

「そうか、いい人たちなんだな」

俺が率直に言つたその言葉に、セラは目を細めてから、いったん目を閉じ肩の力を落とす、何故か空のほうを見た。しばしの沈黙のあと

「……………はい」

そう言つた。何か不自然に思われたが、多分その使えている人に今までの感謝の気持ちで感情が高ぶつたのかなと勝手に思いつけてしまった。セラは続けて

「事故の話をごだんな様が代弁してくださいましたあと、祖父母は父の死を悲しみました。でも、私を引き取る話になると顔色を変え、すぐ

にイエスとは言いませんでした。祖父母は叔父夫婦と住んでいましたし、私も正直祖父母にかわいがれているとは言えなかったのです。一番の原因は、両親が祖父母の反対を押し切って結婚してしまったことにあったとは思うんですけど」

「どうして反対なんて」

「母はさつき言ったように外国人みたいなものでしたし、祖父母のところではただでさえよそ者にあまりいい印象を持たず、集落内の結婚と言えいいのでしょうか？　そういう結婚が当たり前だったんですよ。ですからもちろん両親の結婚は祖父母に反対されました。だから、両親の結婚は祖父母の承諾を得ずに、ある意味かけおちみただったそうです。そのせいか、私たちは祖父母のところより遠いところに住んでいたこともあって、祖父母にあったのは指で数えるほどしかなかったし、何より母そっくりの外見でかわいがられなかつたんですよ。唯一父に似たのは赤目くらいで。でも、一応私を引き取ることに承諾してくれたんですよ。しぶしぶでしたけど」

「ならどうして？」

「……だんな様とその祖父母の様子を見て、あとだんな様の息子が私より二つ年下なんですけど、その子が私と離れたくないとおっしゃって泣くものですから、祖父母の代わりによければ面倒を見るとおっしゃってくださいって。……祖父母は、最初は断りましたが、だんな様が三人だけで話をしたいとおっしゃって、席をはずし、しばらくして三人が戻ってくると、もう私がだんな様の元にお世話になると決まっちゃいました」

「かわいたような笑顔で言って、俺はそんな彼女に」

「お前、は、それでよかつたのか？」

「そう訊ねるしか出来なかつた」

「だいたい、今となつては三人が何を話していたのか予想はつきまですし、私も父方の親族は苦手でしたから。それに、あの頃は、両親が死んだショックで正直それどころじゃなかつたんです」

「そうか……」

俺は、深呼吸してからセラを見た。セラは、何を見ているのかわらないが、まっすぐ前を向き俺の視線に気づかない。

どうして、あの事故はこうも俺を悩ませるのだろう。どうして、こんな子にまでおそらく辛い人生を歩ませたのだろう。どうして、あんな事故が起き、あの人は事故が起きることを知っていて、何故俺を助けたのだろうか？

わからないことだらけだ。俺は、嘆息をこぼした。神様なんてくそくらえだ。あらゆる願いも命すら助けられない神なんて、神じゃない。ばちあたりかもしれないけど、そう思わずにはいられなかった。

ふう、彼が溜め息を吐くのがわかった。そこで私はしまったと思  
った。こんな暗い話されても楽しいわけじゃないか。何やって  
るんだろう私、本当にこういうとき他人とコミュニケーションの不  
足がつくづく思い知らされる。な、なにか、何とかして楽しい話に  
持っていかなくては。

「あ、あのっ、別に気にしないでくださいね。もう、昔の話ですか  
ら。私も特に気にしていないんで」

私のその言葉に

「そう、ならよかった」

彼はなんだか辛そうな笑顔で言った。もしかして思いのほか同情  
されてるのかな？ そんな考えが頭をよぎったとき

「今は、幸せなのか？」

彼が苦笑い気味に言った。その質問に私は面食らってしまった。

イマハシアワセナノカ………？

幸せ？ そうだ、祖父母に引き取られたよりは幸せには違いない。  
あの家に来た最初は本当に幸せだった。あんなことが起きるまでは  
………。

でも、私なんて幸せなほうだ。世の中には、私なんかよりずっと  
辛い人生を送っている人なんて山ほどいるのだ。そう思うと、一種  
の諦めのようなものが私を落ち着かせた。

「そう、ですね。しあわせ、ですね」

私は空を仰いでいった。私はきつと欲張りなのだ。これ以上、望  
んではいけないのだ。望んだところで哀しくなる、だけなのだ。自  
由になりたいなんて。

でも、それでもやっぱり私は………、出来ることなら、も  
し出来るなら、あそこから出たい。この国を、出てみたい。

そのためにはやはり彼との問題を片付けなくてはいけない。  
インセンソ

でも、いつか彼を説得できる日が来るだろうか？　今までだって、話しを聞いてくれても彼の私に対する考えや行為が変わった試しはないではないか？　何度脱走を試みて連れ戻されたことだろうか？　その度に私に対する彼の仕打ちは尋常ではなかった。あの苦しみから脱走しようとする勇氣ややる気は、今やもうすっかりなえてしまった。何度逃げ出そうとしても、彼の優秀な従者と親の権力で捕まえられ、そのあとで味わうあの恐怖の苦しみ。もううんざりだった。だったらおとなしくしていて機会をうかがっていたほうがまだ。そう思ったってからもう、こんなに月日が経ってしまった。いつか、必ずそのときが訪れるのを待ち望んで、もう十六になるうとしていく。

いつか、本当にあそこから自由になる日は来るだろうか？

そう思うと一気に気が遠くなる気がした。

『そう、ですね。しあわせ、ですね』

それを聞いて、俺はほっとした。良かった、これでそうじゃないなんていわれたら、どうしようかと……。ん？……。まあ、いいか。・、どうするつもりだったんだ、俺？……。まあ、いいか。何もともかく、幸せにこしたことはないよな。

俺だって、今思うとあの事故がおきてから最初は地獄の日々だった。でも、今はドレットに、お頭に拾われて、こんなにまともな生活を送れるようになった。空賊とはいえ、ドレットもお頭たちもみんな優しいかった。そりゃ、優しいだけじゃなく人から金するようなところもあるけどさ……。

「そうか……。」

俺はセラにそう言う空を見上げた。他国のものであろう変わった文様を施した空舟そらふねが、ゆっくりとどこかに向かうのが目に入った。小舟の中央の両方にカラスのような翼を生やしたそれは、ご立派に帆が張られており、胴体の横下などには舟にそぐわない金属類がごちやごちやと取り付けてあった。

「空舟、ですね……。」

独り言のようにセラが言った。

「ああ。多分、運送系だなあれは」

「どうしてわかるんですか？」

セラは首をかしげ

「速度が遅いし、安全装置とかいろいろなもんがごちやごちやついてるからな。それに、舟自体が全然ぶれてないだろ？ 人や物を運ぶときは、安全第一 人物優先ひともの、安定してないといけないんだよ。乗客にけがさせたり、品物に傷一つついたりできねえから」

俺のてきとうな説明に

「なるほど」

セラが納得する。納得し、彼女は空舟を目で追いながら

「気持ちいいですか？ 空舟って」

そう訊ねた。俺はその質問に内心驚愕した。こいつ、空舟にすら乗ったことないのか……。空船や空舟なんて空賊の俺にとつては、ありふれたものだ。外国に行ったことないって言ってたから、空船に乗ったことがないのはわかる。でもまさか、空舟に乗ったことないなんて……。今やどこの国の片田舎でも、一台はある乗り物なのに。遊園地や公共機関さえ空舟まがいの乗り物がある時代、乗ったことがないなんて、こいつある意味貴重だよな。でも……。この国に入ってこの国の空舟は見たことがない。もしかしてこの国自体、空舟がないとか？

「もしかして、この国って空舟ないの？」

俺の素朴な疑問にセラは

「まさか！」

即答した。続けて

「まあ、ここは首都圏ですから法律上よっぽどのことがない限り民間人は空舟飛ばしちゃだめですけどね。実は今はお祭りで他国の方が訪れているからさつきみたいな空舟は特例なんです。もう少し、郊外に行けばありますよ。でも公共の空舟は少し距離が遠い場所に行く場合にしか使いませんけど」

セラが小さくなった空舟を追うのを止めていった。

「何でここ空舟だめなんだ？」

俺が驚きを隠せずに言つて、セラはばつが悪そうに

「すいません、私もよくは知らないんですよ。憶測ですけど、ここらへんは身分の高いというかお金持ちの人が多く住んでいるからじゃないですかね。一応敷地内の空もその人の所有地でしょうから。人だって動物だって自分のテリトリーというか縄張りというか、そういうところに勝手に入られたら気持ちのいいものではないでしょう？」

「そりゃそうだ」

俺は素直に同意する。

「あとは都市の景観を損なわないためとかじゃないでしょうか？」

「はい？」

都市のけいかん？ なんじゃそりゃ。

「ここはこうみえても歴史ある建造物や自然が多いですから、そういったものやここ独特の美しさといえればいいでしょうが、そういった特徴を壊さないためもあるんじゃないかなあと……。地上に線路をひかず、地下列車にするくらいですから。」

ああ、そういう景観ね。俺は一人心中でうなづき

「確かに、空舟は一つ間違えば歴史ある建造物？ だっけ？ そんなところに猛スピードで突っ込めば簡単に壊せちまうからな。」

「それに、太陽の光を遮ってしまいますからね。日の光はこの国のシンボルですし」

「ああ、そういえばそうだな」

彼女はこの返答をどうとっただろう？ 日光を遮ることの方に思っただろうか？

俺は後者の方で同意した。

．．．．．  
陽光は聖なる光。神がわれらに授けられし、尊きもの。希望の光。

学校でうんざりするほど聞かされた。そう説明する、教師の口調もどこかめんどくさそうで、どこか信じていないことをほのめかせた。

そういえばそうだ。三角形の国旗もオレンジ色の太陽が描かれているし、冬でも快晴ならこの国の空は初夏ぐらいに青々としている。数年たつと、すっかり忘れちまうもんだな。



二人がそんな話をしている頃、中央公園の出入り口の一つでは  
「ほんとにこつちであつてるんだらうな？」

背の高い青髪の青年が苛立たしく言った。

「ほんとだつて」

軽い調子で青年の近くにいた青年とそれほど背丈の変わらない赤  
髪の青年が軽い調子で言う

「ちよつとは反省しろよっ！」

青髪の青年は鷹のように鋭い目つきで睨みつける。

「なんだよー、ドレット。金すつたくらいでさあ。」

二人の少し後ろを二人より少しばかり年上であるう顔立ちの金髪  
の青年が言つて

「そりゃ、すられたあいつも悪いぜ。でもなあ、あいつにしちやい  
きなり自分の国に戻ってきたんだ。あいつだつて少しは考えること  
があるだろうし、もう少しゆっくりさせてやれよ」

ドレットはやれやれと肩をすくめ

「だから俺は止めようつていったのに」

金髪の隣にいた銀髪のこの四人の中では一番背が低い者も、とば  
つちりだといわんばかりにぼつりと言った。

「ドレットー、前から思つてたけど過保護すぎじゃね？ あいつも  
いい加減そこまで子供じゃねえつて。いざとなつたら、ほかのやつ

からだまし取るくらいできんだろ」

金髪の青年はにやけながら言う。それにドレットは額に手を当て「…………お前の腕なら安全かつ穩便に済むさ。でも、あいつ変なところでドジるといつかトロいじゃん。それに、あいつのもともとの性格上この職業むいてないの俺らが一番知ってるだろうが！万が一あいつがへま踏んだら、最悪 船員クルーも責任問わされることになるんだぞ。お前ら、この国の法律厳しいって言われただろうが」

それに三人は

「ああ、そういりゃいってたな」

「そうだったけ？」

「ゴミのポイ捨てしなきゃいいんじゃないの？」

赤髪、金髪、銀髪がそれぞれ言った。

「だめだこの兄弟」

ドレットが心のそこから呆れ、深い深い溜め息一つ。

「まああいつおいてきた店もうすぐだから、さっさと迎えいっちなおうぜ。」

赤髪の青年が頭をかきながらそう言って、公園の中を見た、まさにそのとき

「あれ、リュファスじゃね？」

視界に入った遠くのベンチに座る二人を指差した。

「ほんとかよー」

金髪の青年が指を指す方向に見向きもせず欠伸をして

「ほんとだよ、俺が兄弟んなかで一番目えいいの知ってんだろ！」

赤髪の青年は少しいらいらしながら言う。

「でも、あれ本当にリュファス？」

指差した方向を見た銀髪の少年が恐る恐るといった口調で言う「あんな長い黒髪、あいつしかいねえだろ」

ドレットが二人を視界に入れたまま真顔で言った。

「で、でも、リュファスの隣にいるの……………」

銀髪の少年が珍しいものでも見るようにいいかけ

「あいつも以外にやるようになったな、まさか他国で赤の他人と・  
・・・」

赤髪の青年がにやりと笑う。

「あいつにとっちゃ自国なんだろうがな・・・・・。というか、  
昔の知り合いだったりして」

ドレットがそう言うと

「一体何のことだよー」

金髪の青年がようやく三人の見ている方向を見た。見て、目を少  
し見開き

「へえ。この光景、あいつにお熱のお嬢様に見せてやりたいね」

そうニヤニヤしながら言った。それに、二人の兄弟もにやりとな  
るが、ただ一人ドレットだけは視線を落とした。

一方、また違う公園の入り口付近では

「本当にこんなとこでいいの？」

まだ幼さの残る顔の少年が言って

「ええ、少し散歩したい気分なの？ イノセンシオは嫌？」

きれいに着飾った少女が言った。豊かなブロンドのウェーブがか

った髪が風で揺れる。

「嫌じゃないさ、ベナサール」

イノセンシオが微笑み、彼女に手を差し伸べた。彼女もにこやかにその手をとる。

二人の後ろのただ一人の従者は二人のことを見ているようで見えていなかった。彼が見ていたのは、公園内のベンチに座るよく見知った少女の顔であった。

No.10 逃走と見送り

自分に危機が訪れているとは露知らず

「そういえばユファさん、お時間大丈夫ですか？」

もうすぐ夕方になりそうな空を見てセラフィーナが言った。

「俺は平気。なに、そろそろ帰る？」

リュファスも自分の仲間が冷やかに来ることなど予想もせず言い返す。

「いえ、今日は非番なんで、最終列車の時間もまだまだですし」

セラフィーナのその一言に

「地下列車って楽しいか？」

リュファスがさも自分は乗っても楽しくなさそうな口調で言った。

「楽しいかどうかは人しだいですけど、便利で安いから私はバスより使ってますね」

それにはセラフィーナも苦笑い。続けざま

「まあ、広い空を自由に飛んでる空舟よりは窮屈かもしれませんね」

「なら、俺は空舟でいいや」

リュファスが率直に答える。そしてふと横にいるセラフィーナの方を向き

「てかさ、お前人見知りしないんだな」

いきなりの質問だったが

「そう、見えましたか？ 本当はすごい人見知りですよ。でも、ユファさんとの出会いが出会いでしたし、それにユファさんとは何故か話しやすかったから」

セラがリュファスの方を見ずに一気に言った。

それにリュファスは目を閉じて

「俺も、こつ見えても子供ガキの頃はともかく、人見知りなんだぜ。まあ、仕事上少しは克服したけどさ」

リュファスがばつが悪そうにそう言う

「そうですか、私もがんばらないとな」

セラフィーナが目を細めながら言った。

「何で？」

リュファスが訊ねると

「実は………。笑わないで、聞いてくれますか？」

セラフィーナがリュファスに顔を向けた。リュファスもセラフィー

ナを見すえ

「おう」

短く返事をした。

リュファスの瞳を見てからセラが前を向き、リュファスが右を向

いたまさにそのとき

「あっ！」

二人は同時に言った。

あれは、あれは見間違うはずもない。彼と彼女がこの公園に入っ  
てくる。護衛は一人、あの人だけ。イノセン、オサール

どうしよう、なんでここに……。早く、早く逃げなきゃ。  
一刻も早く。

ベナサール様にとっては、久しぶりのせつかくのデートなのだ。  
ここでどちらか、特に彼女に私なんかの姿を見られたら台無しにな  
ってしまう。彼女はもう私の顔すら見たくないはずなのだから。

それに彼にもこんなところを見られたら……。あれ？  
どうしてリュファさんというのを見られちゃまずいの？ わから  
ない、わからないけど……。見られちゃいけない気がする。  
とにかく逃げなきゃ。

なんであいつらこっちに向かってんだよ。特に金髪と赤髪くんじやねえ。あいつらきたら、セラにちよっかい出ずに決まってる。そんなの……あれ……なんでそれで俺がイライラしなきゃなんねえんだ？ でも、あいつらとセラが仲良くなるのを見てるのは、なんか嫌だ。なっとくいかねえ。特に金髪と赤髪はとりあえず消えてほしい。

俺は額に手を当て、嘆息をもらす。頭を抱える覚悟を決めるしかなかった。

もう、覚悟は決まった。彼には失礼になっちゃうけど、仕方ない。「ユファさんっ！、すいません、私急用思い出して、急いで帰らないとっ」

私はそう言うと瞬時に立ち、頭を下げる。そしてちらりと、彼らを確認する。よかった、まだ気づいてないみたい。護衛はわかあのひとらな  
いけど……。。。。。。気づいたところで、ベナサール様の機嫌を損



なづことはいくらなんでもしないだろう。

「えっ！ あ、あのさっ」

彼はそう何か言いかけたが

「本当にすいませんっ！」

彼と目を合わせもせず、私がそう畳み掛け、左の方に駆け出した。

どうしてこううまくいかないんだろう？ 運が悪いのは今に始ま

ったことじゃないけどね。

もっと、話したかったな……。

あいつらはすたすたこっちにやってきていた。せっかく、セラが何か言い出そうとしていたのに。何て悪いタイミングでこっちくんだよ。

ああ、あいつらが悪魔に見える。ドレットも悪魔に見えてきた。

あいつらが来たら、セラになんて説明しりゃいいんだよ……。

。。

そう俺が呆れていると

「ユファさんっ！、すいません、私急用思い出して、急いで帰らないとっ」

いきなりだった。彼女はそう言うと言かけによらず俊敏に立ち上がり、息つくまもなく頭を下げた。そして、ちらりと横目、俺からすると正面の方を見ていた。まるで、何かに追われているような、そんな様な気配を漂わせていた。まさか、そんな勘鋭いやつだとは思わないけど。。。。。

「えっ！ あ、あのさっ」

俺の仲間が近づいているの気づいたのかな。そうだよなあ、こいつそういうの苦手そうだもんな。そんなことを思っていると

「本当にすいませんっ！」

そう言って、俺に目もくれず一目散に走り出した。それも、あいつらが来る方向とは真逆に。

ええっ！ マジかよ。こんな別れかたって。。。。。

俺は立ち上がり、呆然とした。

でも、仕方がない、か。俺はふと笑みがこぼれた。仕方がないけど、。。。。あいつ以外に足速くね。

必死に走る彼女の後ろ姿を見ながら俺は思わず

「明日忘れんなよっ！」

そう叫んでしまった。

俺の声に気づいた彼女は、いったん速度を緩め振り向くと

「はいっ！」

そう言つて、軽く手を振つた。そしてまたやはり何故か左手の方をちらりと見て、身を翻しかけた。だした。

彼女は気づいていたのだろうか？ さっき自分に返事をしてくれただ、あのときの笑顔がどんなにいい顔だったか……。今日見た中でも一番の満面の笑み。つくづくもつたいないやつ。もう少し愛想がよければ、恋人ぐらい……。て、まあもう二度と会えないかもしれないやつのこと考えても仕方ないか。俺は祭りが終わったたら帰国するし、あっちも明日来るって保証はないからな。でも、とりあえず来るだけ来よう。俺はそう思った。

どうしても気になるのは、彼女が何かから逃げていたこと。明らかに、俺の仲間に気づいたとかではなかった。違う、もっと違うもの。

俺は、彼女が公園の門から出るまで見送り、それからちらりと左手を見た。左手の方に見えるのは、子供数人とおそらくその子達の母親。ベンチに座る老夫婦に、手をつなぎ公園を散歩するカップル数組。その中でも特に目を引いたのは明らかに、一般庶民ではなさそうな雰囲気を漂わせる二人のカップル。遠くから見ても、ルックスは何のどのカップルより優れていた。美男美女といえるかもしれない。カップルの少し後ろにはボディガードのような男が一人、二人にくっついてくる。金持ちか、貴族かな。

俺がそう思ったときだった。

「なーに、きてそうそうナンパしてんだよっ！」

拳が頭に当たった。

セラフィーナが公園から逃げるところを見ている男がもう一人いた。その男は、二人の護るべき人物の幸せそうな顔を見てから、少女が完全に公園から出たのを確信すると

「ふんっ」

軽蔑する目で、なにかをあざけるかのように鼻から息を出した。もちろん、二人にはわからないように。

「なにすんだよっ、金髪っ！」

俺は、疲れながら言った。振り向くと当然奴らがいるわけで・・・

「にしても、リュファスがなあ」

赤髪が感慨深そうにうんうんうなづきながら言う。

「金髪って、俺様は年上だぞー」

年上という威厳を微塵も感じさせず、へらへら笑いながら言う金髪に

「そうですね、俺より四つも上の二十二歳つすもんね、二十二歳っ！ いやあ、見えないなあ、ハシントさん若作りなんですなー」

俺はハツと人を小ばかにしたような笑いで、嫌みを一つ。  
「ああ、そう言うお前も十三四じゅうさんしにしかみえねえな」

俺の言葉に少し右頬をひくつかせてハシントが言った。

「それより、リュファス。さっきの子、知り合いか？」

ドレットがセラの消えた方をちらりと見て訊ね

「いんや」

俺は即答する。

「じゃあ、ほんとにナンパっ？」

ルカが目を丸くする。濃い銀髪の髪がまるで逆立ちそうなほど驚愕した表情に、つい笑いそうになってしまった。

「ナンパっつーか、かつあげしちゃった？　っていえばいいんだか」  
右手で頭をかきながら、皆の視線を逸らしつつ横目でそう言つと  
「はぁ？」

一番手にドレットが眉間にしわを寄せ

「へえ、やるじゃん」

ドレットにかぶさるようにハシントが感心したように言つて

「お前、あんないたいけな女の子を」

トレンツがやれやれといわんばかりに首を振つて

「さいつてー」

しめはルカの軽蔑。

それには俺もついに堪忍袋の緒が切れ始め

「そもそもお前らのせいだろうがっ！」

三人兄弟に向かつて一喝した。右拳がわなわなと震えてくる。

「盗られるやつが悪い」

につつき金髪と赤髪が同時に言つて

「俺は一応反対したし、実際実行したのは兄貴たちなんだから関係ないね」

ルカが両掌を肩の辺りで上にして首をすくめた。

こいつ……、ある意味一番たち悪い。俺はほとほと呆れてしまった。

そんな様子を見ていたドレットが

「確かにトレンツたちも悪いけど、こいつらの言ってることも一理あるぞ。リュファスお前、何年空賊やってると思ってたんだ。そりゃこいつらの腕もあるけど、いくらなんでも身内からすられるなよ。そんなんじゃ、まだこの国は治安いいほうだからいいけど他のもつと荒れてる国行ったら簡単にすられるぞ」

肩を落とすほどと呆れた。

「リュファス来てからお前、説教くさくなつたなあ、ホント」

トレンツがドレットを見ながらうんざりするよつに言っ

「お前本当に俺より年下かあ？」

ハシントもへらへら笑いながらからかう。

「まあ、ドレットがリュフアス拾ってきたんだから仕方ないんじゃない。ちゃんと世話しないと、母さんから船から落とされるだろうし」

ルカがあくびをしながらいった。

「俺は犬か猫か……」

俺がかわいた笑いでぼそりといって

「まあ、どつちかという犬か」

トレンツがよしよしとでもいうように俺の頭をなでた。

俺はその手を手荒く振り払うと

「つーか、いい加減金返せっ！」

俺なりに精一杯睨みつけた。

「はいはい、仕方ない。かわいい後輩の頼みなら、中身がしけてる財布でも返すとするか」

そう言っつて、トレンツがジーンズの両方のポケットに手を突っ込

む。そして、手は殻のまま今度は懐を探り始めながら

「あれ、おかしいな。ハシント俺に渡したよな？」

弟は兄にやつべーというような顔をしながら尋ね

「ああ、ちゃんんと渡したぞ。こればかりは本気で」

ハシントが真顔でそう返す。

ああ、こりやどつちか嘘ついてんな……。

俺が心の中でそう思い二人に疑いの眼差しを向けていると

「おいおい、リュフアス、そんな目で見んなよ。真面目に俺持っていないから、なんなら探していいぜ」

ハシントがどつぞといわんばかりに腕を広げながら言った。にっこりと身の潔白を晴らそうとするうそ臭い兄を見て

「俺だつてガチで持ってねえよ！」

トレンツが少し荒げに言う。

二人のそんな様子に俺はだんだん演技ではないことに気がついてきて

「まさか、お前らこそ盗られたんじゃ………」

おいおいまじかよ。いくらなんでもこいつらに限って………」

「じゃあトレンツの責任だな。俺はドレットにリュファスおいてきたこと叱られて、そのあと確かにトレンツに渡したんだから」

ハシントが責任転嫁して、その無責任さに弟は

「ああ、ちくしょう。まじかよ………、一体いつだよ」

俺に全く謝る様子も見せず、むしろすられたことをひたすら悔いていた。

まったく、今日は本当についてない。

財布といえば、あいつほんとに金持ってたな。よくあんな札束ぎつしり入れてられるよ、無用心な……。俺もしけるとはいわれてもまあまあ一日遊ぶにはゆうに持ってたはずなのに、セラの方が明らかに持ってたな。この国もだいが平和になった証拠かな。とはいえ、財布がなくなったのはいたい。あきらめも肝心だけど、こればかりは………」

俺が深い深い溜め息をこぼすと

「あつ！ 悪い、俺が持ってたんだ」

そういったのは、ドレットだった。

「やっぱり………」

ルカがぼそりとつぶやき

「おーまーえー、いつだつ？ いつ盗んだ？」

トレンツがドレットの胸倉を掴みドレットを前後に揺さぶる。半分冗談、半分本気で。ドレットは揺すぶられながら懐を探り



「いつでもいいだろ？ 盗まれるやつが悪い、だろ？ ほら、リュファスッ」

トレンツにしらとした顔で言うと、俺のサイフを俺に投げた。俺は勿論ちゃんとキャッチし

「サンキュ、ドレット」

礼を言った。

「何で盗んだのかなあ？ ドレットクーん？」

トレンツがドレットに内に秘めたる怒りを隠さずになっこり訊ねるが、

「お前が持つてたらまたハシントと何しですか不安だったからな

あ

「それだけ言うと、その後のトレンツのいつ盗んだかという質問に、ドレットはめんどくさそうに目を逸らしていた。

よかった………これで、あいつに明日会ってちゃんと返せる。まあ、あいつが来れば、だけどね。あいつ、来るかな………

俺がそんなことを考えていると

「そついや、お前さっきの大金巻き上げたにしちゃ仲良さそつにしてたけど、一体どういうわけだよ？」

ハシントがニヤニヤしながら言っ

「別にどうでもいいだろっ」

「からかいやがって。ぜってえ、セラのことこいつらに言ってたまるかっ！」

「あやしー、あーあ、お前が女の子と仲良くしてるのアナイスに見せてやりたかったなー」

「ようやくドレットに聞いたただすのを止めたトレンツがそう言っと  
「何でアナイスが出てくるんだよ、関係ないだろ」

「リユファスがやれやれと首を振った。

「へえ、あんなにお前にお熱なのに？ どういうわけか  
ハシントがニヤニヤしながら言う。

ドレットはリユファスとセラフィーナが座っていたベンチに座り、  
日が傾いて夕焼けになりかかっている空を一人呆然と見上げていた。  
「でも、なんかめっちゃ逃げるようにどっか行っちゃったみたいだ  
けど」

ルカがセラフィーナが去っていった方を見ながら言う

「もしかして振られた、とか？」

トレンツがからかうように言った。

「そんなんじゃないよ」

「もしかして……、俺らが来たから逃げちゃったとか？  
罪悪感を感じたのかルカが言う。そんなルカを見てリユファスが

「いんや、違うよ」

「じゃあどうして……」

「用事が、あつたんだったさ」

リュファスはそれだけ言うと、セラフィーナが去るときしきりに気にしていた方向を見た。その方向には、家に帰って行くのである。う親子連れやカップル、旅行者がちらほらいるだけだった。もちろん、その中に先ほど人目を引いていたカップルはいなくなっていた。

セラは一体どうして急にいなくなったのだろうか？ 多分、急用つてのはうそ、だよな。用事があったのは本当かもしれないけど、この公園からあんなに必死に去らなくてはいけない理由は他にある気がする。セラは、一体何から逃げていたのだろうか？

思い出す、セラが苦しそうな顔で急に去ることを告げたあの表情。しきりに横を向いては、不安と焦りを見せ、怯えているようにも思えた。

そんな中で見せた、あの笑顔。

腑に落ちないというか、何かこのままじゃいけない、そんな気がした……。



## No.12 それぞれの帰宅後

空はすっかり夕焼けに染まり、雲はピンク色に染まっていた。

「あら、早かったのね。おかえりなさい、セラフィーナ」

屋敷の関係者で入り口から帰ると、すぐ自分の上司で指導役の用人が出迎えてくれた。ぴっちりとした白黒のメイド服に、黒髪はいつものようにきっちりとしニヨンに結び上げていた。背が高くほっそりとしていて、年は確か四十前後なのだが、メイド長の威厳は実年齢以上に思えるほどあふれ出ていた。しっかりとしていて顔つきまでも厳しいが、やさしいところもあるのを私はよく知っている。

「ただいま帰りました、ブリギッタさん」

「今日は楽しかった？ いろいろ買い物したの？」

その質問に、私は少し戸惑う。

いろいろ驚くことがあったり、あわただしかったりしたけど、彼との出会いは結果的によかったの、かな？ うん、楽しかったな……。

「はい、楽しかったです。買い物は少ししかしませんでしたけど」

私が正直にそう言う

「確かに、いつも何か買って帰ってくるのに今日は手ぶらね。珍しい」

バック以外に何も持っていない私をちらり見て言った。

「ちょっと、今日はいろいろあって」

言葉を濁した私に

「そう言えば、今日ご飯はどうする？ 早く食べたいなら、伝えておくけど。それとも外食する？」

メイド長が思い出したかのように話を変えた。

「今日は遅めにします。お昼遅かったんで」

お昼といえるのかわからないけど……。

「あらそう？ 残り物になっちゃうわよ、今は屋敷に二家族いるよ  
うなものなんですから」

それに私は声を出さずに笑ってしまった。確かに、ベナサール様  
たちやお付きの従者たちもいるから、いつものような量の使用人た  
ちのまかないはないかも知れない。

「大丈夫ですよ、料理長の料理は残り物でも何でもおいしいですか  
ら」

私が正直に言うと

「うれしいほめ言葉ね、主人に機会があったら伝えておくわ。まあ、  
今日は久しぶりの休みなんだからゆっくり休みなさいな」

メイド長はそう言ってさっそうとどこかへかけて行ってしまった。  
無理もない。仕事の途中なのだから。

私もすぐ自室に戻った。バックを取り机の上におくと、机の椅子  
に腰を掛けた。

ふう………。何とか無事に帰れた。

公園を少し離れた後、走るのを止め、そのまま地下列車を使って  
帰ってきた。別にその後買い物をしてもよかったのだが、気が萎え  
てしまい、到底行く気にはなれなかった。

結局、新しい服も日用品も買えなかった。はあ……。

溜め息をつくくと、バックをしまおうと、バックの中身を整理する  
ため中身を取り出した。ハンカチ・ティッシュ・サイフその他もろ  
もろ。取り出すものを取り出すとバックをタンスにしまった。

バックの中身が置いてある机の上を整理しようとして、私はじつ  
とハンカチを見つめた。きれいに折りたたんでおらず、何かをくる

むようにしておいてあるそれを私は手に取る。ハンカチをとると、中には彼がくれたものがあつた。ひし形を少し伸ばしたような形の、先が尖つた黒い鉱物。

それを窓の方に持つて行き、カーテンを開け陽光に照らすときらきらとところどころ光り輝く。

「物質ものじちか………」

彼は明日来るだろうか？ 来てくれるといいな。来なかつたら……

「返しませんよ………」

私は物質ものじちを胸の前でぎゅっと握りしめた。そして、夕焼け空を見上げる。

彼もこの空を見ているだろうか………？

国が提供している停泊所に泊めてある空船に戻ると、五人で食堂に集まって休んでいた。食堂とは言っても、十数人用のテーブルとイス、調理器具と食材を保管してある、料理兼食事をする部屋である。今日は船での作業も終わっているので、全員出国前までお頭の気まぐれがない限り船員全員にはほ非番クルが言い渡されているのでしばらくよっぱどのことがなければ料理をすることは無い。

「今日夜どうすつか？」

トレンツがあくび混じりに言っ

「おふくろたちは多分仲良く外食するだろうし、俺らも外食でいいんじゃない？」

ハシントがコップの水を飲み干していった。

「作るのめんどくさいしね……」  
ルカも同意する。

三兄弟のそんな様子を見て、ドレットが大きく伸びをし

「じゃあ、俺留守番してるからお前ら食べに行けよ」

「なんでだよ、お前も来いよ」

ドレットの提案にトレンツが少し驚いて言っ

「船に誰もいなかったら無用心だろうが、てか俺今日イロイロあって疲れたし」

「俺も疲れたし外食いいや」

机に突っ伏して俺が言う。そんな俺をみてドレットは何を思ったのか

「じゃあ、材料費出すからお前作れよ、この国の料理でも何でもいからな」



ドレットの急な提案に俺はどうしようか一瞬迷ったが  
「いいぜ。その代わり文句なしだぞ」

俺はそう言い返した。

ちようど、この国に来て食べたいものもあつたし……。別に作れるなら自分で作ってもいいと思えた。材料費も向こう持ちと言つし。

これも……、あいつにあつたせいかな。

「トレンツたちまだ外食しないだろ？」

ドレットが三兄弟に確信すると

「ああ」

トレンツがそういう。

「じゃあ、今のうちに買い物行つとくか。俺準備してくるから、リユファスも準備できたら行くぞ」

「分かつたよ」

俺らのそんなやり取りを見ていたルカが

「ねえ、俺も金払うから作つてよ」

「別にいいけど」

俺が少し驚きながら返事をする。

「そんなら、俺らもそうすつか」

ハシントが言つて

「だな」

トレンツが首を鳴らしながら言う。

「まあ、買出しは行って来てくれたまえ。俺は寝るから出来たら起こして」

ハシントがとろんとした瞳で言つと

「右に同じ」

トレンツとルカが同時に言った。

流石は兄弟というか……。俺は少しばかり呆れてしまつ。

「じゃあ、空舟のエンジン温めてくるから、リュファスも準備できたら来いよ」

ドレットはそう言って部屋から出て行ってしまった。

ドレットが行ってから少しして

「てかさ、明日祭りらしいじゃん、賭けしねえ？」

ハシントが出し抜けにそういった。

「賭け、いいねえ」

トレンツがある意味嫌らしい笑いを浮かべる。

「明日祭りで一番に女の子誘えてOKもらえたやつに五千ユルでど  
うよ」

自信ありげにハシントが言うと

「その賭け乗ったっ！」

トレンツも自信満々に言う。

「誰も出来ないに賭けるよ」

ルカがぼそりといって

「言うね、弟。いいぜ、誰もだめならお前に一人づつ五千ユル払う  
よ」

ハシントが先ほどまでの眠気はうそのように笑った。

俺は三兄弟のやり取りから外れようとそそりど部屋から出ようと  
して

「まーさーかー、お前はやらないなんていわないよなあ？」

トレンツがにっこり言うど

「俺。パス」

俺は視線を逸らす。

「二人じゃ張り合いねえだろ？ ルカは誰も出来ないのにかけてる  
ってことは誘わないだろうし、ドレットは思い人でもいるのか、そ  
れとも本当に女興味ねえのかやらないだろうしなあ」

ハシントがうなづきながら言う。

なるほどね、だからドレットがいなくなったあとこんな話したわ  
けだ。

「そうだよ、今日みたいに明日もなんかきつかけ作って仲良くなればいいだろ」

トレンツがさりりと言う。

そりやお前らはなれてるからそう簡単に言うけどさ……。

「そうそう、明日今日の子に会えたら誘えばいいだけじゃん」

ハシントのその言葉に

「だといいんだけどな」

俺は苦笑いして急いで部屋から出てしまった。

部屋を出ると、空は真っ赤な夕焼けに染まっていた。停留所とはいえ、今は雨が降らないらしく屋外に船を停泊させている状態だ。

やっぱり祭り、一緒に行けたら、よかった、かな。

そう思いながら、きれいな夕焼けをもう一度ちゃんと見る。

明日は一時間でもいいから、待ってみようかな。今日はいい別れ方じゃなかったし、明日はもっとちゃんと会話が出来る気がする。

そう思った後、俺は待っているであろうドレットのもとに走っていった。

「なんだあいつ?」

トレンツがリユファスが去った後ぼそりつぶやいた。

「やっぱり、今日あったた女の子と何かあったんじゃない?」  
ルカが頬づえをついていつて

「かもな」

ハシントがどうでもよさげに言った。

「つかさ、祭りの後に仕事ってだるくね。だったら、祭りの前か  
最中にして欲しいんだけど」

トレンツが頬を膨らませ文句を言つと

「仕方ねーだろ。お袋が何の根拠かその方が盗みやすいつて言っ  
だし」

ハシントがトレンツにあきらめるとでもいうようにいい放つ。

「まあ、祭り行けるだけいいんじゃない?」

ルカのその言葉に

「かもな」

「そりゃな」

ハシントとトレンツがそれぞれ返した。

城下町の市場は祭りの前日でもありどこも賑わい、様々なものが売られていた。

「なあ、リュファス」

ドレットが呼びかけ

「ん？」

俺が後ろにいるドレットに振り向く。

「この材料で、お前一体何作る気だ」

心配そうにいうドレット。

まあ、無理もない。買った材料は、小麦粉・卵・肉・魚介類・芋・食物繊維が豊富そうな葉が何層にも重なったこの国の黄緑色の野菜に香辛料やソース類。見たことがあまりない野菜や香辛料にドレットは

「これ本当に食えるのか？」

そう聞いたほどである。

「まあ、この国じゃ結構知られてる料理で味もそこまで癖ないから、そう心配すんなよ」

「なら、いいけど……」

あ、信用してねえ。目を逸らしていうドレットを見て、俺はそう思った。

「別に期待できないなら無理に期待しなくてもいいけどさ」  
前を向きへそを曲げた俺に

「そついや、お前今日会つてた子に金返さないの？」  
唐突に訊ねた。

その質問に俺は立ち止まり、ドレットが俺の左横に来て立ち止まる。

「何でそんな質問……」

再び歩き始め顔をあわせられない俺に横付けしながら

「だって、お前優しいからな。なんだかんだいって。それに、お前の性格上からしてあいつらのせいで金脅し取っちゃって罪悪感感じてるだろ？俺がお前だったら、返すだろうなって思ってたさ」

ドレットが微笑んでいった。

「……俺ってそんなわかりやすい？」

俺が思い切つてそう訊ねると

「まあ、俺からしたらな。船員クルーの中じゃ一番付き合い長いし」

横にいるドレットを少し見上げると、どこか遠くを見ているようだった。そんな俺に目もくれずドレットは続けて

「てか、お前惚れたんじゃない？」

その一言に俺は顔をゆがめ

「はあ？」

すつとんきよんな声を上げた。

「あれ違つなの？」

ドレットが俺に顔を向けからかうようにいって

「何言つてんだよ、それじゃまるで俺があいつに気があるみたいじゃねえか」

俺が目を丸くして少しむきになって返した。

「そつ言つてんだよ、まあいわゆる一目ぼれ？」

臆面もなくドレットが言つと

「恥ずかしいこというなよっ！　っーか、もう明後日あたりにこの国たつてもう二度と会えないようなやつに誰が……」

最後のほうは少し呆れながら言うと、俺のほうを見ながらドレットが

「そんなの関係ないだろ。別に二度と会えないわけじゃないし。っーか、お前もそろそろ彼女の一人ぐらい作ってもいい年だろ」

半ば呆れ、半ば説教のように言った。

「……ドレットはどうなんだよ？　俺ドレットに彼女いたなんて、生まれてこのかたひとつことも聞いたことないけど」

嫌みをきかせてそう言うと

「ああ、だつて俺興味ないし」

淡々とドレットが言った。その言葉に俺が驚愕し

「それってやっぱりハシントたちの言うとおり、女に興味ないってことか」

恐る恐る訊ねた。

「あー、ちがうちがう。本命以外にってことだよ。てかハシントたちの言うこと真に受けんなよ」

ドレットがうつかりしていたといわんばかりに言ったその一言目に俺はほつと胸を撫で下ろすが、

「ん？　本命ってことは誰か好きな人いたの？」

「え、ああ、まあ、な……」

「誰だよ？」

何気なく俺が訊ねると、ドレットは上を見ながらしばらくして

「秘密」

ぼそりと一言。

「……もしかして俺知ってたりする？」

ニヤニヤしたいのを必死に抑えて平然としたふりをしてそう訊ねた。

「さあな」

さらりと逃げるドレットに

「なんだよ、ケチ」

俺が素直にそう言ってしまう、ドレットが呆れたように笑いながら

「まあ、ずっと片思いってことだけは教えといてやるよ」

本当か冗談かわからない口調で言った。

「ドレットが片思い？ まじ？」

それには俺は本当に心底驚いた。本当だとしたら、どんな女めだろう。ドレットはまず背が高いし、アナイスのところのお店の女の子たちが体格はいいし顔もいいと絶賛するほどで、男の俺からしてもカッコいいかカッコ悪いと言えばカッコいいと思えるのに。性格も悪くないし、何ですつと片思い？ よつぽどすごい女なのかな？

そんなことを考えていると、

「さあなー、まあ俺のことはいいとして、結局今日の子は友達止まりなわけか……」

しみじみというドレットに

「いや、友達にもなっていない気がするけど……。つかさ、出会いが悪すぎるだろ。むこうにしてみりゃ金無理やり取られたよ  
うなもんだしさ」

はあと溜め息一つ。

そんな俺を見てかドレットが

「でも、公園デートしてたじゃん」

「デートに見えた？」

実際次会う待ち合わせ場所をあそこにして休んでただけなんだけ  
どね。

「見えた見えた。相手の子の顔はよく見なかったけど、お前が初対  
面の女の子にあんなに楽しそうに話してるの初めてみたなあ」

ドレットにとってほほえましく言っただけでもその言葉に

「へっ？」

俺は恥ずかしくなってそう口にしてしまう。俺どんな顔してたん  
だ？

「俺、そんな楽しそうに見えたのか？」



「まあ、うん。だからてつきり俺お前があの子に惚れたのかななんて……」

頭をかきながらドレットがいつて

「いや、ちよつと積もる話があったというか……。落ち着いたら、話すよ」

言い訳がましく俺はそう言うしかなかった。実際、セラのことをちゃんと話すとしたら自分の過去も少しは明かさなければいけないだろうから。まだ、やはりドレットとはいえ話す気にはなれなかった。

「そうか」

ドレットもドレットでそれ以上のことは深く聞かない。ドレットのそんなところが俺は気に入っていた。

「でもさ、お金取られたようなもんなのに、お前と数時間一緒にいたわけだろ？ よつぽど変わってるか、馬鹿なほど世間知らずない子ちゃんかー」

ドレットが苦笑い気味に言っている途中で

「多分どつちもだな」

俺も苦笑い気味に返す。俺も変わっていると思ったし、お人よし過ぎるほどバカない子ちゃんと確かに言えるかもしれない。そんなところが、あいつの長所でもあるのかもしれないけど。

「それか、お前に気があるかだよな」

ドレットが俺に顔を向ける。対する俺は

「いや、それはないな」

落ち着いていえた。

セラの俺に対する態度はそういうんじゃないやなくて、初めてのものに対する好奇心というか、そんなものに近い気がする。

「そうかな。ま、気がないにしても仲良くなりたくないやつと俺は一緒にいたくないけどな」

そう、だよな。確かに、それはいえる、けど、素直に喜びたいのになんか喜べないんだよな。ドレットは俺のこといつてるわけじゃ

ないとは思っけど、どっちかっていうとやっぱイロイロ気になっ  
て一緒にいたかったのは俺な気がしてならない。

あー、もうこの話から少しでもはなれよう！

俺はそんな考えを払拭するかのように首を鳴らし

「ところでさー、結局、ドレットの本命って誰なんだよ！」

もうドレットの答えなんてどうでもいいからそう言つと

「んー、じゃあ、お頭？」

それに俺はふきだし

「なんで疑問系でそんな嘘つくんだよ！ 笑えるけど笑えねえぞ」

「いやいや、俺はゆくゆくはトレンツたちの父親に……」

ドレットは眉をくつつけんばかりに、悩ましげでそう演技して言  
う。

「もういいって」

「あ、そう？ ま、正直年上そんな俺は興味ないけどね」

本心であろうその言葉に

「まあ俺もそんなに年上いいとは思わないけど。上下関係なく、年  
より俺は相性の方が大事な気がするな」

俺の正直な意見に

「お前はそうだよな」

ドレットがアハハと笑った。失礼な。

「っーかさ、ラナ語だからついこんな話したけど」

俺が呆れてそう言つと、言葉をつなぐように

「ああ、アガス語だったら俺らほんつとに恥ずかしい話オープンで  
話してる馬鹿に見えただろうな」

ドレットがぼそりと同意する。

「ここがアガパンサスで良かった」

「だな」

そう、ここアガパンサスは自国の言葉アガス語しか喋れない人が  
ほとんどだ。まあ、それは他の国でもいえることなだけだ。この  
国は特にひどいと言う噂で、他の国の言葉を書けても、話せないの

だ。

多分、セラも……。あれ、どうなんだろう？ あいつ、アナウンスみたいなきれいな標準語喋ってたしな。実はラナ語とか話せたり？ 明日会えたらちょっとからかってやろうかな……。

オレンジ色の夕暮れから、空はじきに夜の帳がおりよつとしていた。

No.14 夕食と写真

「おかえりー」

食堂に戻るなり、ルカが俺らにそう言った。

「ただいま」

ドレットが机に食材が入った袋を置きながら返す。

俺も机に食材をそつと置く。なぜなら、案の定帰るとハシントとトレンツが机に突っ伏して寝ていたからだ。タオルケットが二人にかけられているが、多分ルカがかけてやったのだろう。静かに寝息を立てている二人を見て

「この二人が寝てると静かだな」

ぼそりと一言。

「確かにそれはいえるな」

ドレットが苦笑いして同意する。

「それよりお腹すいちゃった。俺も手伝うから、早く作るうよ」

ルカが椅子から立ち上がり大きく伸びをしようと

「気が利くな。じゃあ、野菜とか切るの手伝ってくれ」

俺が袋からこれから切らなければいけない食材を出していく。

「うわ、何これ鼻水みたい」

ルカが率直な感想を言う。

無理もない。ルカが今しているのは、買ってきた楕円形の茶色い芋の皮を全部むき、すりおろすという作業だ。芋はすりおろすと、粘り気がありとろとろのクリーム色ものになり、その粘り気はなんとも言えない独特なものがあるで、初めての感想としてルカの感想は妥当だろう。

「食べる前からまずくなるようなこというなよ。嫌なら変わるぞ。手、かせるかもしれないし」

苦笑いしながらそう提案すると

「いいよ別に。それよりリュファスも早くそのよくわかんない野菜千切りにしてよね」

ルカはあっさり断った。ちなみにルカがいったよくわかんない野菜とは、葉が何層にも重なったこの国の黄緑色の野菜のことである。

「はいよ」

俺がそう返事をする

「リュファス、魚介類とか肉切り終わったけど、次どうするんだ？真ん中にいるルカの左にいるドレットの声が飛んでくる。

「あー、そのままにしよう。全部さつき作った生地にごち込むから」

生地は小麦粉に卵、時間がなかったので間に合わせて作ったただし汁を混ぜ合わせたものだ。

「火通さなくて大丈夫なの？」

ルカが芋をすりながら訊ね

「ああ、平気。フライパンで焼いたあと、ふたして結構蒸らすからドレットいわく今日買ってきた食材はどれも新鮮らしいから、臭みも出ないだろうし、多分大丈夫」

「へえ、蒸すんだ。なんか変な料理だね」

ルカが言っ

「いくら見たことない食材だからって、いいやつと悪いやつ

ぐらいつくつての！ つーか、蒸すだけでほんと平気かよ」

ドレットが手を洗いながら言った。

「ま、見てなつて」

俺はそう言っていると、先ほど刻み終わった野菜たちとルカがすり終わった芋をドデカイ生地の入ったボールに入れ、菜ばしで下から上へ持ち上げながら混ぜる。だいたい混ぜたところで、最後に魚介や肉を入れ先ほどのように空気を入れるように混ぜていく。

そしてそれらを、油を引いて熱したフライパン三つにそれぞれお玉一杯分を入れ表裏が軽くきつね色になるまで焼きあとは蓋をして待つ。

出来上がったホットケーキのように膨らんだものを見て

「見た目はおいしそうじゃないね」

野菜や魚介や肉やらが焼けた生地からはみ出して見えているのを見てか、ルカが一言言った。

「まあ、見た目はそんな上品じゃないけど。この上に、買ってきた香辛料とソース各種をかけてと……」

俺はぱらぱらと青々とした香りのいい葉を乾燥させ細かくしたもので、緑色や茶色、白といったソースをかけていく。

「そのコケみたいなの本当に食えるんだろっな？」

ドレットが座りながら疑わしい目で俺を見て

「ああ、アガサンパスでよく見られる虫だっておいしくてこれの生の葉食ってるぞ」

淡々とそう言うと

「虫も食べないものはまずいって確かに言うけどさー」  
ルカがハハツと呆れた。

「つべこべ言ってるんで、一口食べよ。まあ、食べないなら食べないでお先に」

俺がフォークで端の方を切り、一口食べた。二人はじっと俺のほうを見て

「どうなんだよ？」

「うまい？」

ドレットとルカがそれぞれ言った。

毒見役に回されたことを怒る気にもなれないほど

「うまい、まじうまい。市販の粉買ってもよかったけど、これだけうまく作れるならかわなくて正解だったな。いや、久しぶりだけど、こんなにうまく作れるなんて」

それを聞いたドレットがまず

「市販の粉売ってたんかい」

その方が安全で簡単だったといわんばかりに言ってる

「よく久しぶりに作るのに本も見ないで作る気になるよね」  
ルカがそういつつ一口ほおばる。

「え、え、ドレット。真面目にいけるよ、これ」

俺の正面にいるルカが右隣に座るドレットの肩を掴むと

「なんかいいにおいがある」

俺の左隣で机に突っ伏していたトレンツが上半身を起こしだした。そしてトレンツの左隣で

「メシだっ！ メシッ！」

まるで先ほどまで寝ていたとは思えない口調でガバツとハシントが上半身を一気に起こした。目覚めがいいというか、よすぎだろ。

トレンツがあくびをしながら、テーブルに並ぶおそらく今日のメイン料理であるうものを見て

「なにこれ？ 失敗？」

「見た目わりいな」

ハシントも思ったことを口にし

「またこのやりとりかよ、めんどくせえな」

俺は小さくつぶやいた。

結局俺の作った料理は見た目はともかく味は好評で、五人できれいに平らげてしまった。ルカが茶色と白のソースが一番おいしいと言ったり、トレンツは茶色のソースだけの方がいいと言ったり自分なりに好きな味にしていき、とてもにぎやかな夕食となった。

片付けは珍しく、トレンツとハシントがやってくれるというので、その言葉に甘えて俺は甲板で夜風に当たっていた。空はすっかり闇



に包まれ、ところどころに星が輝いている。

「ルカがお茶入れたから飲まないかってさ」

後ろを振り向くと、ドレットがいた。

「ああ、今行くよ」

俺がドレットの方に歩いていく。ドレットと目が合うと、どろしたわけかドレットはふと目を逸らした。俺が首をかしげ不思議がつていると

「お前、いいのか？ このまま、この国出て」

真剣な面持ちで言った。

「なんだよ急に」

目を閉じながらドレットの右隣に、すれ違うような形で立ち止まる。

「俺が、無理やりこの船に連れてきちまったからな。別に、いつ抜けてもいいんだぞ。お前はお前の好きなことすりゃいい。それに、お前こういう職業むいてないから、性格上」

ドレット……。そんなこと考えてたのか。

吸すると、  
「……これはちゃんといったほうがいいよ、な。俺は深呼吸

「俺はドレットに感謝してるよ。あんな腐ってた俺を、この船の一員にしてくれて。そりゃまだまだ未熟だけどさ。後悔はしてない。

それにもうこの国に俺の居場所はないからな。それでも出てけって  
「？」

「そうはいつてねえけど。……分かったよ」

ドレットはそう言うと、ようやく俺と顔を見合わせた。

「早く行くこうぜ、俺ぬるいお茶嫌いだからさ」

それを聞くとドレットは笑って

「だな」

食堂に向かう途中、ハシントが書類を抱えてこちらに向かっていた。

「なにそれ？」

俺が訊ねると

「次の仕事でいろいろ集めた情報。盗みに入るのにいらないうつだから捨てに行くんだよ」

「ふーん。にしても、情報収集早かったな。入国時の夜と翌日の朝までで見取り図までそろえちゃったんだろ？」

何気なく言ったその言葉に

「まあなー、俺様とドレットがいりゃこんなもんよ。特に俺に使用人の女たちがいろいろ親切に話してくれたからさー、おまけに何の疑問も持たずにこうやって個人情報というか屋敷の情報まで提供してくれて」

確かにこの二人なら顔はいいからそうなるか。呆れた話だけどな。「つーか、その屋敷にちょうどお付き合いのあるこれまたおんなじ

くらいの金持ち一家が使用人連れて大勢で泊まりに来てたからやりやすかったのもあるけどな。その屋敷の使用人は俺らを泊まりに来た使用人だと思っただろうし、逆もまたしかりって感じで。使用人のふりしなきゃいけないから、かつらは辛かったけど」

ドレットが小さくあくびをしながらいつて

「だよなー。全員、黒髪や茶髪はつかだから、俺も茶髪にしなきゃなんなかったし」

ハシントが溜め息交じりに同意する。

確かにこの国は茶髪や黒髪が多いから、地毛じゃないがハシントの金髪も別に世界的に珍しくないのだがこの国では目立つだろうし、ドレットの珍しい地毛の青髪はなおさらだ。

「お疲れさん」

俺がそういうと、ハシントの書類から紙が一枚落ちた。

「悪い、それとって」

ハシントがそう言う

「はいはい」

俺がそれを取り上げた。別にそこまで興味はなかったが、落ちた紙を裏返しにしてざっと見てみる。写真が左上に小さく乗っており、いろいろ個人情報載っている。履歴書みたいなもんか……。俺は、すぐハシントに渡そうとして、その際写真の人物が目に入った。

薄暗くてはつきりとは見えないが、肩ぐらいの髪のおそらく女。

どこかで見た気がした。

そんな違和感が何か突き止めようと

「二人のどっちか、ライトかなんかないか？」

そう訊ねた。

「持つてるよ」

ドレットが呆れて言うと、ペンライトのようなもので紙を照らしてくれた。

「てか、そんなもん常備してんのお前ぐらいだって。準備よすぎだ

る

「ハシントもドレットの用意の周到さにほとほと呆れた。  
「サンキユ」

俺はそう言くと、写真に目を向けた。

あれ・・・・・・・・？

俺は驚きを隠せなかった。写真に写っているのは、間違いなく自分が知っているものの顔だった。

ハシントが近寄ってきて写真を見ると

「ああ、お寝つけ役の子か・・・・・・・・」

追い討ちをかけるかのようにいった。

## No.15 知ってしまった事実

仕事上、つい先ほど知り合った人間の家に盗みに行くことはありえなくもない。もともと、俺らが盗むのは持ち主から盗まれたり、不正なやり取りで持ち主が手放してしまったもの。それを取り戻し自分の物に戻したいが出来ないもとの持ち主の代わりに、俺らはそれを盗ってくる。

それが、俺たちの仕事。

確かに悪いことにはわりはない。でも、ただ無差別に金銭や命すら奪うやつらと違う、まだやりがいがあるいい仕事だと、そう俺は割り切っている。そう割り切らないと、やってられない。

依頼を受けたら、必ず完遂する。依頼者や盗難品のことには深く関わらない。それが、モットー。

知らないことのほうがいいってのは、いろんなことでいえるしな。

だから、感情移入はもつてのほか。例え、どんなに親しい間柄でも身内でさえ、その者が依頼された物を所持しているなら、必ず奪う。同情なんていらぬ。

別に、俺もそれに反対はしてないし、それでいいと思っている。

今回も、盗みに入る家に知り合った奴がいるからといって止めるつもりはないし、正直あまり悪いとも思わない。そういった考えや経験で、慣れてしまったせいもあるけど。

だから、そういうことがショックなんじゃない。

最初は、ただ単純にその偶然に驚いただけ。

でも、ハシントの言葉は俺をそれだけにとどめさせてはくれなかった。

『ああ、お寝つけ役の子か……』  
ハシントのその言葉に背筋が凍りつく思いになった。

オネツケヤク……？ うそ、だろ？ どうして、どうしてだよ。

セラ……。

紙を握る右手に力が入る。写真の人物は、間違えようもなくセラだった。ココアパウダーのような珍しい髪色、赤い瞳。名称のところに、セラファイナときつちり印刷されている。……本名だったのか。それにしても

「おねつけやくって、どういうことだよ？」

俺は平然を装って独り言のようにいった。だいたい、ハシントのいいたいことは予想できたが、認めたくはなかった。

「ああ、なんか、この屋敷の息子がこの子に惚れ込んで父親の権力使って無理やりやっちまったんだって。なんでもこの子事故で両親亡くして身寄りがないらしくてさ。たまたまその事故に見合わせた息子がこの子と知り合って、父親に頼んで使用人として数年前連れて来たらしいけど、話してくれた子によるともうその頃からこの子に息子が惚れ込んでたらしいぜ、溺愛ってやつ。んで、今はよっぱどのがない限り夜一緒に寝るようになったちまって、だからお寝つけ役なんだと。皮肉な話だよな」

ハシントがあっさりといった。

『だんな様の息子が私より二つ年下なんですけど、その子が私と離

れたくないとおっしゃって泣くものですから』  
セラの言っていたことが徐々によみがえる。

「そうか、だからこんな若いのに使用人なんか。にしても、ほんとにすごい話だな」

ドレットが写真か年齢の欄を見てかぼそりとつぶやき

「ああ、俺も正直びっくりしたよ。なによりさー、その息子っての婚約者がいるのに、のちのちこの子愛人みたいなのにするって噂もあるらしくて。でもって、今泊まりに来てるのがその婚約者一家らしいけど」

婚約者？ 愛人？

「なんだよそれ？」

口に出さずにはいらなかった。

「まあ、あれだ。身分が同じもの同士結婚と言うか、親が決めた政略結婚というか、一応それで息子は婚約者いるらしいけど好きにはなれなくて、この子に夢中ってわけだよ」

ハシントの言葉が胸にどンドン突き刺さる気がした。

なんだよそれ、ふざけんなよ。

「この子、よく逃げないで働いてられるな」

ドレットのその言葉も重くのしかかる。

そうだ、なんで逃げないんだよ、セラ……………。  
もしかして……………。

「もしかしてこの子もその息子にマジなの？」



ドレットが確信をついたかのような質問をする。心臓が止まる思いがした。

「いんや、その正反対。無理やり襲われてから何度も逃げ出したらしいよ。でもな、その息子がほんつとにその子好きみたいで、お付きの従者に連れ戻させたり、親の権力であらゆる交通機関にコネきかせてこの国から出られなくしたりしてらんだって。そこまでいくと恐ろしいよな。ある意味監禁だよ監禁。で、最近はまだあきらめて働いてるんだって。ある子は、将来見据えて金目当てでもう仕方なくいるんじゃないとか、逃走するふりして本当は構って欲しいのよとか好き勝手いつてたけど。女ってこういう話、よく話のネタにするよな」

呆れているような口調でいうハシント。

「そう、だな。話し聞いている限りじゃ、働いているつっても肩身狭そうだ、この子」

ドレットが同情するように言い放つ。

この国を出たいと言っていた彼女。出たければ出ればいいじゃないか、俺がそんなことをいったあと彼女は話を変えた。今思うと、彼女にとってはどれほど残酷な言葉だったか……。どんな気持ちだっただろう……？

付き合っている奴はいないのかと聞いて、少し不自然なように彼女は返答した。

なかなか住所を教えたがらなかった彼女。俺が彼女でもいえるわ

けがない。そして仕えているところは金持ち……、道理であんなサイフ分厚いわけだよ。

金を脅し取られても、怯える様子も見せず怒り狂うわけでもなく、平然と諦めを通り越したような態度をとっていた。それが俺には印象的で、彼女が不思議がったように逃げる事が出来ずにいた理由の一つでもある。哀しいけど、そんなことがあつちや感覚が麻痺しているのかもしれない。あんなことはもう、彼女にとっては普通のことになっているのかもしれない。そんなことを考えている自分がどんどん悲しい気持ちになってくる。

幸せなのかと聞いて、幸せだと彼女は言った。そのときはそんなのだと思った。でも、今思い出して真剣に考えてみると、あの時あいつがそうだった言葉は、本当に幸せなやつがいつているようには到底思えなかった。

パズルのピースがはまっていくように、様々なことが思い出される。

とりあえず幸いなのは、どうやら今日俺が会っていた少女と同一人物だと二人は気づいていないこと。確かに髪の毛の長さは一緒だけど、顔は今より少し幼い。屋敷に仕えた当初に撮られた写真だろう。

とりあえず落ち着け。俺はそう自分に言い聞かせる。ふうと深く息を吐き

「喉渴いたから、早く行こうぜ。ハシント、これ俺がどっかのゴミ箱に捨てとく。一枚くらい、大丈夫だろ」

怪しまれるか、だめか、それなら俺が全部捨てに行けといわれることが予想できた。捨てに行けといわれたほうがむしろ都合で可能性が高かったのだが、

「ああ、そうしてくれ。じゃあ、俺は重いから行く」

そういうとさっさと行ってしまった。

こういう仕事の都合で手に入った情報はだいたいシュレッダーにかけてゴミに出していて、ハシントはその部屋に捨てに行ったのだが、今回ばかりは仕方、ないよな……。

俺は食堂に行く途中、ドレットの少し後ろを歩き、ドレットが見ていないうちにきれいに紙を折りたたんでポケットにしまった。いっついで捨てようと、ドレットはそこまで気にはかけはしないだろう。食堂に入ると、ルカがの淹れたお茶のいい香りが漂っていた。

「早くしないと冷めちゃうよ」

ルカが出し抜けにそういって

「ていうか早くしないと飲み干しちゃうぜ」

トレンツが早速ルカの淹れたお茶をごくごくとお茶菓子を食べながら飲んでいた。

「トレンツ、お前晩飯あとそんな食ってたら太るぞ」

ドレットがトレンツの向かいに座ってテーブルの上の皿にあるクッキーを口に入れた。

「残念だけど、俺はどんだけ食っても太んないんだな、これが」

そういって、トレンツはクッキーを二つ同時にパクリ。

そんな光景を見ていた俺が座ろうとすると

「リュファス、顔真つ青だけどどうかした？」

ルカが心配そうに言った。それにドレットとトレンツも俺に注目する。

「ちよっと、夜風に当たりすぎて冷えたただだよ」

俺は精一杯苦笑いして、ドレットの右隣に座った。

「そうだよな、この国他国より夜は冷えるよな」

トレンツがそう話題を変えると、俺はほっと胸を撫で下ろす。

にしてもドレットといい、ルカといい勘が鋭いというか、なんというか……。にしてもそんな顔色悪かったのかな？ だもしたらつくづく俺って単純だな。さっきのことで、そんなに顔にあらわれるなんて。

そう思いながら、俺はクッキーをほおばる。

「ルカ、俺にもお茶くれ」

俺がそう言うと

「はいはい、今日はアッサムだよ」

ルカがティーカップを俺に差し出しながら言った。

「アッサム、ね」

ティーカップを受け取り俺はついそう口に出してしまつ。

『ダーズリンで』

そうつれしそうに言った彼女を思い出す。彼女に会わなければ、茶葉のことなんてそう気にはしなかっただろう。

「なあ、ルカ」

「なに？」

ルカが紅茶をすすりながらいつて

「うちの船にダーズリンなんてあったっけ？」

俺はティーカップの中をまじまじと見ながら訊ねた。

「……あるよ。それがなに？　今まで茶葉の一つも知らなかったような人が」

ルカが不思議そうに俺を見て

「ほんとにそうだよなあ」

俺は苦笑いして、そう答えるしかなかった。

No.16 小さな決意

それにしても、やっぱりセラのことはどうにかしなくちゃいけない、よな……。。なにか力になれるらなつてやりたい。

むこうにとつちや、おせっかいで余計なお世話かもしれないけど。このままじゃ、いけない気がする……。。。

そんなことを考えながら、ポーっと紅茶をすすっていると「てかさー、リュファス明日祭りの前に俺と一緒に買出し行く係りになつてるの忘れてないよね?」

ルカの声が飛んできた。

「あー!」

忘れてた。俺のあからさまな態度に

「やっぱり。明後日夜が明ける前にこの国出てくから、食料や生活必需品買い溜めしとけて母さんにいわれたろっ!」

ルカが呆れたようにいつて

「そうそう、お前ら明日盗み働かないんだからせつせと雑用こなしてくれよー」

トレンツがニヤニヤしながらいつた。

そんなトレンツを、ドレットはお茶を飲みながらティーカップ越しに見て

「お前は明日へまして足引っ張るなよな」

白い目でぼそりと一言。

「するわけねえだろ、リュファスじゃあるまいし」

トレンツが大笑いして

「悪かったな」

怒る気にもなれず、それだけいつた。

「でも今回の仕事楽しそうなんでしょ?」

ルカが退屈そうにいつと

「ああ。聞いた話だと依頼品はもとの持ち主から騙し取ったやつが、今回盗みに入る屋敷主との仲を取り持つためにあげたものらしい。屋敷主はそれそんなに気に入ってなくて、倉庫の奥の奥にしまってるくらいだから、別に盗まれてもそこまで執着しねえだろ。警備もそこまで厳重じゃねえし」

ドレットが小さくあくびをした。

「いくらそういつた依頼品がその屋敷に複数あるからつて、三人もいらねえと思うけどな、正直。あー、かつたるい」

トレンツが本当にだるそうにいつた。

そうだ、明日セラの働く屋敷とやらにドレット・ハシント・トレンツの三人が盗みに入る。このメンツは確かにちよつと慎重に行き過ぎてる気がするけど、お頭の考えあつてのことだろう。

「ま、文句言ってもしやあないか。じゃ、明日に備えて俺もうシャワー浴びて寝るわ」

そういうとトレンツはティーカップのお茶を飲み干し、さっさと出て行ってしまった。

トレンツが出て行ったあと、その場が一瞬しんと静まり返る。

「珍しいこともあるもんだな」

静寂を破ったのはドレットだった。

「まあ、明日祭りに行って仕事してこの国出るっていう結構ハードスケジュールだしね。一番の理由は、祭りのために気合入れるからな気もするけど」

ルカの発言は的を得ているに違いない。事情の知っている俺は特にそう思えた。

「祭りに気合入れるって……、あー、またあいつら遊ぶ気か」

ドレットが一人納得し

「その通り。今回は賭けもするらしいよ、誰が一番先に誘えるかって。ちなみに俺は誰も女の子誘えないに賭けたけど」

おいおい。ルカそれいつちゃっていいのかよ。

俺がそんなことを心配していると

「ふーん、ま、俺は興味ないから話は来ないわな。別にいいけど」  
ドレットが心のそこからどうでもいいといわんばかりにいった。

「そういえば、リュファスはつきりやらないつて兄貴たちにいわないと金とられるよ」

ルカのその言葉に

「そうそう、止めとけよ。お前、そういうの得意じゃないだろ」  
話の内容をすっかり理解したドレットがさらりという。

「わかってるよ」

ふうとため息をつく

「まあ男同士で祭り行くのはちょっとむなしいけどね」  
ルカが肩を落とす。



そっか、ハシントとトレントは二人が単独で行動して目当ての子  
見つけるだろうから、必然的に俺ら三人になるな。確かにむなし  
いけど、別に俺はいいかな。

とりあえず、今後の予定はというと、明日は祭りまでにルカと買  
出し行つて、それからこいつらと祭り行つて……………。

会えたらセラに会つて金を返して……………。  
とりあえず、いったんセラのことは置いてと。

こいつらが仕事終わらして帰ってきたら、それまでに出国手続き  
済ましてある船でこの国を出ると。確か手続きして、十二時間以内  
に出ればいいんだっけ？ それまでなら、空舟ソウフネでも使つてこの国飛  
んでも十二時間以内にこの国でりゃいいとかいう馬鹿げた規則だ  
つたな……………。

ん？ 待てよ、てことは。

「あ、あのさっ！」

口にしてから、しまったと思った。こんなことこいつらに正直に  
訊ねて、感づかれたらどうすんだっ！ なんか知らんけど特に勘鋭  
い二人なのに……………。

「なんだよ？」

ドレットがすました顔で紅茶をすする。

そしてルカも無言でじつと俺を見る。

冷静になれ、普通に振舞つてりゃ多分勘ぐられない……………。

多分。あー、もう、こうなったらやけくそだ。

「もし、仮にだぞ。出国手続き済ましてから、ドレットたちは空舟で盗みにいって、先に出国した空船くうせんと空舟で国の境かどっかまで来てうまい具合に落ち合う予定じゃん。手続き済ましたあとさ、例えば、例えば空舟にこの国の人間乗せてこの国出てもいいのかな？」

あまり考えずに、思ったことを一気に吐き出した。こいつらにちやんと伝わったか疑問に思っている

「ああ、そんなこと」

ルカがあっさり言った。

そんなこととはなんだよ、そんなこととは。ったく、セラといどいつもこいつも。人の気もしらねーで。

「大丈夫に決まってるんだろ。つーかお前一番よく分かるはずだろ」

ドレットが呆れていると

「は？」

俺はわけがわからずそういつてしまった。

そんな俺にドレットは額に手を当てながら

「お前さ、この国の出身なんだよな？」

「え？ ああ、まあ一応……」

「でも俺と出会ったのはランキュラスだよな？」

「ああ、そうだよ、それがどうしたってんだ？」

いつまでもわけがわからない俺にドレットはとうとう

「この国出身のお前は俺と会ったときランキュラスにいたわけだろっ！ お前正式な手続きしてランキュラスに滞在してたわけじゃないっていつてたよな、確か？ 正式な手続きしてないならどうしてお前はランキュラスにいたんだよっ！」

たまっていたものが爆発した。

「どうしてって、森抜けたらもうランキュロスので……」

ああ、そういうこと

ようやく理解した俺に

「この国は入るの厳しいけど、出ていきたくや勝手に出て行っていいからね。犯罪者なんかじゃなきゃ、引き止めないでしょ。まあ、そうやって国外逃亡する犯罪者は多いだろうけど。アガパンサスって国民にいい生活させるために結構金かけてるらしいから、国民になりたいって他国からくるやつは嫌がって、正式な手続きしないで出て行くやつは国民とはもう認めないから戻っても保障はしないぜ、それでもいいなら出ていきなって国なんでしょ？ まあそのほうが確かに金浮くだろうしさ。そう考えると、ラナンキュラスとはやっぱり違うよね。あっちは来るもの拒まず、去るもの追わずらしいじゃん」

ルカが淡々といった。

「でもさ、勝手に出て行ったとかどうやってわかるのかな？ 魔法かなんかで管理してたっけ？」

俺が考えもなしにいったその言葉に

「まあ、そういう国もあるけど。ここはありえないでしょ。魔術の面じゃ、この国世界でもワーストクラスだし」

ルカが苦笑いする。

「そういや、そうだったな」

そうだ、この国は魔法を使えるものが本当に少ない。百人に一人って言われてるほどだ。ちなみに俺もからっきし。

「にしてもそんなくせに、入国はくそめんどくさいっていうね」

はぁーと、ルカは散々な目にあつたといわんばかりにいった。

それは俺も同意する。

俺たちは国境沿いで写真撮らされたり、書類に滞在期間とかその他めんどくさいこと書かされてたりしたあと、数時間後やっと仮入国証を船員一人一人に配られ、やっと国に入った。それからまたお偉いさん方やその他大勢の人が住む首都で正式に入国手続きをしなければいけないくて、なんちゅう不便な国かとみんなでブーブー文句

をたれたってわけ。

でもそれをしないで勝手に国に入ったものは、そういった奴らをカモにして暮らしてる奴らに見つかって終わり。連中はピンからキリまでいるわけで、ただ金稼ぎたいと素人に魔術師や手練れまでさまさま。多分ルカがさきほどいった犯罪者が逃げるのを防いでいるのもこいつらだろう。

出るときは、首都でもらった正式な入国証を首都か国境のそういった出入国管理機関に提出して十二時間以内に国の領地から出りやいってわけ。

そのあと不法滞在していると、またさつきいった連中の出番ってわけだ。どうやって不法滞在かわかるのかしらねえけど。ちゃんと出国するか見張ってんのかね。ま、追跡系統の魔術とか使えるやつは造作もないか……。便利なことで。

魔術を使うときってどんな感じなのかな……。？

そついや、セラはどうなんだろ。あいつ、意外にも使えたりしてな。

そんなことを思っていると

「この国民でいることすら絶対大変だよな」

腕組みをしていうルカの言葉が耳に入る。

「確かちゃんと国民になってるやつは、生まれたときに書類かなんかで国民登録して、それから成人するまで年に一回は本人や保護者や家族がその登録の更新して、成人すると半年に一回本人が更新しなきゃいけないんだっつな。それ怠ると、非国民にされて十年間またここに住まないと外国人同様国民として認めてもらえなくなるって話」

ドレットが大きく伸びをしていた。

「俺この国で生まれなくて良かった」

ルカが上向き気味でうれしそうにいう。

成人、確かこの国は二十だっけ？ ラナンキュロスは確か十八。国によってやっぱいろいろ違うな。

「なるほど、それでこの国勝手に出てったとかもわかるわけだ。ま、それなら俺はとくに削除されてるな。親がきちんとその国民登録してたか知らんけど」

「リュファスってこういう話ほんつとに興味ないよね。自分の故郷すらそういった知識ないなんて」

ルカがほとほと呆れて

「お前みたいにぼんぼん情報頭に入れられない性分でね」  
そういつて俺はテーブルに突っ伏した。

やっぱり、そうだ。

俺の考えは実行できなくもない。

あとは……………。

「俺ももう寝るわ、ルカっ、寝過ぎしちゃったら悪いけどたたき起こしてくれ」

ガバッと立ち上がり、あくびをかく真似をする。

「いわれなくてもそうするよ」

ルカが皮肉めいたようにいって

「じゃ、おやすみ」

そういって食堂をあとにした。

シャワーを浴び、俺は自室のベッドに横たわっていた。なかなか寝つけず、薄暗い中、天井を見つめる。頭に浮かぶのは、彼女のこ

とばかり……。

ふと、俺はなにかを探り求めるかのように右手を上突き出した。そして、空を掴む。ぎゅちりと固めた拳はやや爪が食い込んで痛かった。手の中には何も無い。でも、目に見えないなにかが確かに存在している気がした。

俺はいったん目を閉じ、深く息を吸って吐くと、ゆっくりと瞼を開けた。

あとは……、セラ、お前の気持ちを確認するだけだ。





No.17 覚悟

『おっさん、腹減ってんの?』

思い出す。四年前、あの列車。みんなが目を伏せたり、まるですこには何もいないかのように振る舞い通り過ぎていく中、俺だけがただ見つめていた。

あの頃の俺は、いい子ちゃんでも勇気があるわけでもないただ平凡な馬鹿ガキだった。でも、どうしてもなにかしてやりたい、確かにあのときそう思ったんだ。

だから、

『これやるよ』

そういつて俺は差し出した。

どんな表情をしていたか今でもわからない。

でも、彼は俺にそんなことをさせるなにかを持っていった気がする。

俺を惹きつけるなにかがあった。なぜか無視する気にはなれなくて、俺はそんなことをしたんだ。

おせっかいだっただろうな。……でもなおっさん、俺には今でもあんたのほづがおせっかいな気がしてならないよ。

どうして、どうしてあのとき、俺なんかを、俺だけを助けたんだよ？

「おいつ、リユファスっ！」

ん？ これは夢？ 誰かが俺を呼んでる。

「てんめえ、ふざけんじゃねえぞっ！ いい加減起きろってんだっ  
！ こんの××野郎っ！」

ああ、なんかすごい夢だな。ドアを叩く、いや蹴ってるようなもの  
のすごい効果音もある。

「くっそー、リユファスのへたれっ！ ボケッ！ 低血圧っ！ ×  
×！」

さっきからすごい失礼なこともいわれてるし……………。

「あと少ししたら、ドア蹴り破るからなっ！」

ドア蹴り破るって、物騒な。あれ、そっいゃ、この声聞いたこと  
あるような。誰だっけ？

「起きろっ！」

オキ口……………？

ああ、そっか、なんだ、夢じゃないのか。

昨日、いつの間にか知らないうちに寝てたのか……。  
聞き覚えのある声だと思ったら、当たり前だ。毎日顔合わせてる  
やつなんだから。

「何時だと思ってたんだっ！」

またルカの荒い声が飛んできて、俺は寝返りを何回か打つ。うー  
とうなつたあと、むくりと起き上がった。ベットの所で大きなあく  
びをして、頭をかくと開かない目のまま、靴を履くとよるめきなが  
らも鍵をときドアを開ける。

「誰の何がなんだってっ？ つーか、俺もうとっくに卒業してるっ  
ての」

あくびで大きく開いた口に手をあてながら言って

「へえ、つーかさ、他にいうことあるんじゃない」

ルカが俺を睨みつけた。

「悪い、起こしてくれてサンキュ」

俺がそう言うと、腕組みして俺を鋭い眼で睨んでいたルカは、ふ  
うと息を吐く。そして腕組みをとき、目を閉じると

「なんてね、実はまだ九時過ぎたぐらいなんだけど」

目を開き意地悪そうな笑みを俺に向けた。

「は？ 九時ー？ 早すぎだろ……」

俺は一気に脱力した気分になり首を振る。

「だって、これ以上待ったらせつかく作った朝ごはん冷めちゃうと  
思ってる」

ルカがにつこりほえんだ。

「そういうこと……」

俺は心の中でほとほと呆れた。完璧主義というかなんというか……  
……。自分の作った飯を温かいうちに食えと。ルカは世話好き  
というか、自分の思い通りにならないときがすまない性分で、これ  
がたまーに厄介というか。ほんっと、こいつら兄弟はどこか厄介な  
んだよな。まあ、ルカは金髪や赤髪ほどじゃねえけど。

「わかった、すぐ行くよ」  
そういつとまたこみ上げてきたあくびを一つ。

食堂には、バターとなにかの甘いおいがたちこめていた。

「おはよ」

入るなりマグカップを右手に持ったドレットがいった。

「ああ、おはよ」

まだスイッチが入らない俺がそう言うつと

「眠そうだな」

事情がわかつているであろうドレットが笑っていった。

「はい、どうぞ。本日の朝食はフレンチトーストになります」

そういつてルカが差し出す本当に作りたての朝食たち。

「いただきます」

テーブルにつき、半目のまま合掌。

寝起きとはいえ、メープルシロップがかかったバターのいい香りのするこれは流石に残さなかった。俺自身朝食べられない人ではないし。

「ごちそうさま」

きれいに完食したのを見て、ルカもご満足したようだ。ニコニコ顔で後片付けしている。

ようやく眠気がすつきり払われ、お茶を飲んでいると

「リュファス、とつとと用意してよね」

ルカが食器を洗いながらこちらを見向きもせずいった。

ゆっくりさせてはくれないわけね……。

「はいはい、わかりましたよ」

「とりあえずその頭どうにかしてよ。寝癖ほんとうにすごい。はね

すぎでしょ」

ルカが洗い終わった皿を布巾で拭きながら、こちらを見てほとほとあきれた。

俺は右手で髪の毛をとるところどころ触る。たしかに、いつもよりひどいなこりゃ。

「まあ、いつか……」

朝シャンめんどくさい。

「よくないっ！俺そんな清潔感ない奴と一緒にいたくないからルカがいきりたつていった。

一方ドレットは何事もなかったかのように、すました顔でお茶をすする。

「寝れなかったのか？昨日」

正面に座るドレットはお茶のカップを見ていった

「ああ、ちよつと考え事してて」

俺はドレットから目を逸らす。

「考え事ねえ、そりやただでさえ寝返り百回はうってるような寝相の悪いリュファスが余計寝相悪くなって、そんな頭になるわけだ」

ルカが目を見開きすごい形相でいった。

「起きなくて悪かったって謝ってるだろ」

「そりやたまにならいいよ、でもここ最近ほんつとに起きないじゃん。低血圧にもほどがあるってっ！」

ルカが吐き捨てるようにいう。

「それは本当に申し訳ない」

そこは素直に謝った。最近の俺の寝起きの悪さは、いつもより確かに拍車がかかっているというかなんというか。もう俺自身じゃどうしようもない、仕方のないレベルにまで達している。ルカが切れるのも無理はない。俺だって、別に好きで起きられないわけじゃないんだよっ！

「はあ、まあ、そういつたつてなにも始まらないか……。とりあえず、その頭どうにかしてさっさと行くよ」

俺の必死さが伝わったのか、ルカが折れた。俺はとりあえずほつと安堵する。

そんなやり取りをあくまでただ聞いていたドレットはまたお茶をすすって一言。

「いってらっしゃい」

祭りの日とあって、国中の店という店は多くの品物を並べたり、つぶれるんじゃないかと疑うくらい商品の値引きを行っていたりしていた。市場や商店街といったところは、どこもかしこも人が行きかいにぎわっている。

そんな場所を俺とルカは転々とめぐり、荷物がたまっては空船くうせんと空舟そらぶねを行き来し、これが三度目にわたる頃にはもう正午を過ぎていた。

今、俺たちは露天街の通路を歩いていた。

「でも、リュファスの寝癖今回はすぐ直ったね、いや、それで時間ロスしなくてよかったー」

ルカが機嫌よくいつて

「そりゃなー」

ドデカイ紙袋を両手で抱きしめて俺は言い返す。お前の機嫌これ以上損ねまいと水やらなんやらで頑張りましたから。長いぶんほんつとめんどくさかった。そんな俺の心を読んだかのように

「長いから余計に大変だったんじゃない？ いっそのこと切っちゃえば？ てかなんで伸ばしてるの？」

ルカが一気に訊ねた。

「いや、切ろう切ろうと思ってたらいつのまにか。流石にこれ以上は伸ばす気ねえけど」

「ふーん、てかさ……」

ルカは底まで言う口をつぐんでしまう。俺はどうしたのかとルカに顔を向けた。ルカは少し眉間にしわを寄せ気味に

「リュファス、この国に残るつもり？」

苦笑いをしていう。

俺はその唐突な質問に

「はあ？」

驚いてそういつてしまった。

「だつてさ、この国行くなってからリュファス微妙に変だったじゃん」

「へん？」

「んー、変というかちょっと暗くてさ。で、朝はいつにも増して弱くなるし」

一言目はとにかく、二言目は的を得ていた。確かに、俺が不眠症気味で朝起きられなくなってるのは、俺がこの国に行くと聞かされ今まで封印していたあの記憶をたびたび思い出してしまうのが原因には違いない。

ドレットとの昨日の件もある……俺、そんなにわかりやすいのかな？ つーかルカにまで変な心配されて。自分でいうのもなんだけど大丈夫かな俺。



俺が頭を抱えていると

「で、結局俺らのとこに残るの？」

ルカがそんな俺を見てふっと笑った。

「当たり前だろ。そんなに出て行って欲しい？」

俺が最後の方は肩をがっくり下げていった。

「……俺さー、一兄いちにいは絶対この仕事継ぐって思ってたんだよね。でも、出てった。結構シヨクだったなー。本人が一度もその口にしたわけじゃないけど、ずっとそう勝手に決めつけてたからそれが当たり前のお姉さんと恋に落ちてあっさりこの仕事止めちゃうんだもんさ。リュファス、昨日女の子と一緒にいたる？それ見たときなんかリュファスもいつか出てっちゃう気がしたんだよね」

ルカが目を細めながらラナ語でいった。

「ルカ……」

そんなこと思ってたのか。

確かに、今思い出すとセサルさんが出ていくことになって、ルカはどことなくセサルさんを避けていた。ハシントやトレンツは馬鹿みたいに二人のこと祝福してたけど、ルカも祝ってたとはいえないもより元気がなかったな。まあ、もともといいやつだからそんなことあの時は誰にもいえなかったよな。ましてや一番尊敬してたであろう兄貴になんか……。

俺は深く息を吐くと

「あいにく、俺は行くところないんでね、しばらくまだ世話んなるつもりだよ。余計な心配すんな」

ぶっきらぼうにいった。

「ま、足手まといにはならないですよ」

ルカはやつと普通の笑顔に戻っていうと、すたすたと俺の先を歩き始めた。

俺はルカの後ろ姿を見て申し訳ない気分にならざるを得なかった。

ルカ、確かに俺、残れるなら残りたいたんだ。でも、俺がこれからしようとするのはそうはさせてくれないかもしれない。やるとなったらまずおかしらにいわざるを得ない。その結果によつては……俺はルカに嘘をつくことになるかもしれない。それでも俺は……。

とりあえず、それより今日はあいつの気持ちを確かめないといけない。

でも、一体どうやって切り出そう？ あいつにこの話をするとうことは、あいつの知られたくない秘密を勝手に知ってしまったという事で……。俺があいつじゃなくても赤の他人にそんな秘密知られるのは嫌に決まってる。

私はあなたの秘密を知っています。だからあなたを助けたいと思います。こんなのでつたいありえない。

でも、結果的にはそうなるんだよね……。きれいことばつかいってられねえか。

ふう、俺が溜め息をついていると

「どしたの？」

ルカがあくびをかきながらいった。俺はもう賭けだと思い、  
「ルカさー、もし俺が偶然お前の知りたくない秘密知っちゃって、俺がお前の秘密をしったってわかったら、俺のこと許せる？」

俺のその質問にルカはしばらく黙っていた。

数分たって

「やっぱり時と場合によると思うけど、必死に謝れば許すかな。てか、さっきのこと結構気にしちゃってるのか？」

「違う違う、でもお前はそう思うのか、そっかあ」

俺がうーんと考え込んでいると

「それか、リユファスも俺になにか秘密教えるとか？」

ルカが冗談交じりにいった。

「えっ？」

俺は思わず聞き返してしまう。

「だから、痛みわけってやつかな。お互いがお互いの秘密知ること  
で、引き分けじゃないけどそれでもう勘弁してやるよみたいな。秘密共有してるからどちらかがどちらかの秘密をばらすリスクは低くなる気もするし。まあ、ありえないけどね」

ルカが最後の方はアハハとわらっていった。

痛み、わけ……。秘密の共有。。。。

心臓が大きく脈打った気がした。

ルカはそんな俺の動揺に気づかず、まあ気づかなくていいのだが  
「それがどうかしたの？」

進む方向の真正面を見て訊ねる。

「いや、ただ気になっただけ。真面目にたいした意味はないんだ」  
俺は平然と嘘をついた。こればかりは仕方ない。

「ふーん、なんかフェアじゃないなあ」  
ルカの何気なく発したであろうその言葉に俺はつい反応してしま  
う。

フェア……………。

あいつはあんな出会い方した俺に、正直に身の上を話してくれた。  
確かに少し変わってたけど、あんな馬鹿正直なやつが嘘をついてい  
るとは思えない。

それなのに俺はどうだ。

ただ嘘に嘘重ねて逃げてるだけじゃないか。よっぽどあいつの方  
が男前だよ。馬鹿なだけかもしれないけどさ……………。

もう、いいじゃないか。俺だって楽になっただっていいよな。いい  
加減、意地張ってたって意味ねえよ。

俺は深呼吸すると

「そつだな、フェアじゃねえかもな」

空を見上げた。雲ひとつない快晴だった。

俺の中の不要で硬いなにかがぼろぼろと崩れていく気がした。

今日の目覚めはすこぶるよかった。やっぱり一日休むだけでも違うな。昨日は自室でぐっすり寝れたし。

それに今日はお祭り。一昨日まで別にそんなに楽しみにしてたわけじゃないけど、今年はちょっと行きたかったな……。

そんなことを考えながら出勤の九時からもくもくと掃除をこなし続けていた。もしかしたらいつもより早く任された仕事を終えれば、祭りにいけるかもしれないし。

そんな淡い期待を胸にせっせと動き回って、もう時刻は二時を回っていた。お昼は軽くすまし、その休憩時間を切りつめ働くことでどうにか仕事を早めに切り上げたかった。

別に彼に会いたいわけじゃない。純粹に祭りに行きたかった。祭りなんて一人でいったって楽しくなんてないと思っていた。確かに一人は寂しいけど、楽しむのは自分しだい。

今更自分の身の上めそ悔いてたつてしょうがないよね。屋台でおいしいもの食べて、目を見張るようなショーでも見て自分なりに楽しもう。楽しまなくちゃ損だ。

強く、もっと強くなるう。一生このままでも、もういい。この国で出来ることを自分なりに精一杯やってみたい。

ガラス窓を拭きながら、ガラス越しに空を見上げる。雲がところどころたなびく、真っ青な空。いつか、少しでも近づけるだろうか。

二人のいる場所は、きつともっときれいな場所なんだろうな。

私はやっぱりまだそこには行けないけど、どづか、どづかそっち  
では幸せに。。。。。

その頃空船では

「どうだっ！ 今日の俺様はっ」

ハシントがびしつと決めて食堂に入ってきて

「髪形はいいと思うよ」

ルカがにっこり返し、ドレットは見るだけ見るが何も返さず、リユファスはテーブルに突っ伏したまま動かない。

「そりゃこの繊細な俺様が仕上げたんだ、このたてかた凡人には真似できまい」

ハシントが左側に座っていたルカの隣に座り

「兄貴の髪遊びやすい、いい髪質だしねー」

隣のルカはお茶をすする。

その数分後

「どうだっ！」

ハシントと同じくドレンツが食堂に来た。

「似たもの兄弟」

ドレットがドレンツに目もくれずマグカップを顔の前で持ちながら呆れて一言。

その言葉に

「一緒にしないでくれる」

ルカがびしやりという。

「で、どうだよ？」

二人の言葉など耳に入っていないようにドレンツがいつて

「服はいいと思うよ」

ルカがにっこりという、

「だな」

ハシントも同意する。

一方、ドレットはちらりと見ただけで大きくあくびをかき、リュ



フアスはやはり突っ伏したまま動く気配はない。

「ま、こんなもんだろ」

トレンツがテーブルの右側、ドレットの隣に座る。

ドレットとルカがお茶を飲む音だけがやけに静かに響き、ハシントとトレンツは顔を見合わせる。何事もないかのようにすました顔でお茶をすする二人に

「フーかさ」

ハシントがまず切り出した。

「なに？」

ルカが目をつぶりながらカップをテーブルの上に置く。

「あれ、マジ寝？」

トレンツがドレットの右隣の者を指差し

「いんや」

ドレットが軽く否定した。

「というより、ショートみたいな」

ルカがあざけるかようにぼそりとつぶやく。

「はあ？」

トレンツがいつて

「おい、リュファス、またなんかへましたのか？」

ハシントがからかう。

リュファスから聞こえてきたのは

「んー」

返事とはいうより音だった。

「昨日の彼女にでも振られたか？」

トレンツの言葉に

「あー」

また音が返ってくる。

「ね？ 買い出し終わった頃からずっとこの調子なんだよ」

ルカが呆れていった。

「お前はロボットか」

トレンツが笑い

「はー」

また音。

「お前はアホですかー」

「馬鹿ですかー」

ハシントとトレンツがいつて

「へー」

「だめだこりゃ」

ルカがお手上げだといわんばかりにいつて

「故障中って張り紙張りたいね」

トレンツがいつた。

「そして、船から落とされた、と」

ハシントがそういつと

「俺もお前らみたいなの神経図太くなりたかつたよ」

リュファスのはつきりとしんの通つた声やけに食堂に響いた。

食堂がしんとなり、ルカは目を丸くし、ハシントやトレンツも表

情が引きつる。

ただ一人ドレットだけが

「あははっ！ そりゃ確かに、俺も神経の図太さはあやかりたかつ

たな」

腹を抱えて、大笑い。

「なあ、弟たちよ」

「ああ」

「うん、絶対リュファスおかしい」

半ば心配するような、半ば疑うような眼差しをリュファスに向け

た。

一人笑い止まない青髪の青年を除いて。

時刻は三時を回った頃

「ここにもいない」

アガサンパス国のとある屋敷では、一人の少年が歩き回っていた。この国の男としてはやや長めの短髪。その色は暗すぎない黒だが、表面の部分はうっすら紫がかっている。背は高いとも低いともいえない高さ。灰色の瞳はせわしなく何かを探していた。

少年はとことと少し先を歩くメイドを

「ねえ、ちょっと」

呼び止めた。

メイドは声で少年が誰か分かり、振り向くと恭しく

「はい、何でございましょうか？」

一礼して聞いた。

「セラ見なかつた？」

少年の質問に

「はい、セラフィーナなら確か今日は三階の担当ですので、大広間あたりにいるかと」

メイドがいい終わるか否や

「ありがとう」

少年は、満面の笑みを返して足早に行ってしまった。少年のまだどこかあどけなさが残るも整った顔立ちの笑顔に、メイドもついほころんでしまっていた。

その頃、三階の大広間で花瓶の水を替え終わったセラフィーナが花の位置をうまい具合に調整していた。花瓶の花は、祭りの日でもあるのでこの国の国花アガパンサスがいけてあった。誇らしげに咲く鮮やかな青紫色の花に、セラフィーナはつい笑みがこぼれる。

ココア色の髪、白と黒のメイド服を着た小さな後ろ姿の彼女。それが視界に入った先ほどの少年が、ほほえましく彼女を見ていた。

「セラッ」

それはセラフィーナが予期せぬ呼びかけであった。その声にセラフィーナの表情が一瞬にしてこわばる。

声の主はセラフィーナに近づき、肩に手を置くと少し強引に自分のほうに振り向かせた。

「逢いたかった」

そういつて少年はセラフィーナを抱きしめた。セラフィーナは苦しそうな顔をして、

「いけません、イノセンシオ様。服が汚れてしまいます」

小さな声でいった。

イノセンシオは名残惜しそうにゆっくりと抱擁をとく。そして、セラファイナの左頬に自分の右手を当てながら

「二人だけのときは敬語はいいつていったろ」

セラにほほえむ。

セラファイナはゆっくりとイノセンシオの手を外すと、目を閉じながら首を振り

「そうはいきません」

「がんこだなあ。それより、今日は何時に仕事終わるの？」

イノセンシオはセラから目を離すことなく訊ねた。

「九時です」

セラファイナが事務的に答えると、イノセンシオは驚愕した。

「どうして？ 祭りは行かない気だったの？」

「はい、他に行きたい方も多いでしょうし、だったら私が残った方がいいと思ひまして」

セラが目を伏せがちにいう。

そんなセラを見ながら

「………、だめだ」

イノセンシオがぼそりといった。

「えっ？」

聞き取れなかったセラがつい聞き返してしまう。

「俺、ずっと前から今日はセラと行くって決めてたんだ。来てよ」

イノセンシオの本当に寂しそうな顔からセラファイナは顔を逸らし

「お気持ちはどううれしいですが、仕事ですので。」

きっぱりいった。そして続けて

「それに祭りはベナサール様といかれては？ ベナサール様もお喜びになりますよ」

セラファイナは精一杯ほえんでいった。

「ベナサールは親族で行くってさ。今はベナサールは関係ないだろ」  
それを聞いたセラの視線が落ちる。いつまでもまともに自分と目

を合わせないそんなセラに、イノセンシオは少し眉間にしわを寄せ  
「それならブリギッタに仕事今日はここまでにしてもらおうっ！」  
いきなり苛立っていったイノセンシオにセラはびくっとなんげ  
た。

「私わたくしに何の御用でしょうか？ イノセンシオ様」

突然だった。二人が出入り口のほうを向くと、この屋敷のメイド  
長であるブリギッタが姿勢正しくたっていた。こつこつといい音を  
立てて、ブリギッタはイノセンシオの前に来ると

「先ほど仕事がなにやらおっしやっておられましたか？」

背が高いこともあり、イノセンシオをやや見下ろす。

「今日セラの仕事ここまでにしてよ。一緒に祭り行くから」

イノセンシオはブリギッタの目を見ていった。

ブリギッタはイノセンシオから目を離し、セラフィーナを見る。

セラフィーナは申し訳なさそうに下をうつむいていた。

「そうですね、セラフィーナが今日の仕事さえ終われば祭りに行っ  
てもいいでしょう。仕事さえ終われば」

ブリギッタのその言葉にセラフィーナははっと顔を上げる。

「……………わかった。ブリギッタがそういっなら……………」

セラッ

いきなりの呼びかけに

「は、はいっ！」

セラフィーナの声は上ずってしまった。

ありがとう、ブリギッタさん。これでイノセンシオもあきらめるはず。イノセンシオはブリギッタさんに勝った試しはなかなかない。先ほどの提案も、私を助けてのこと。いくら私をイノセンシオが待っていてようと、私の仕事は終わらない終わらせる気もない。仕事なんて探せばいくらでもある。私は九時まで粘り放題というわけだ。

イノセンシオは祭りとかそういう催しごとは好きだし、いくらなんでも今回は引き下がるに決まっている。これから私にきとうに謝るなどして、私なんかほっといて勝手に従者でも引き連れていくだろう、そう思っていたのに

「セラ、あと何の仕事残ってるの？ 早く二人で終わらして祭り行こう」

イノセンシオの口から出たのは意外な言葉だった。

それにはメイド長もびっくりしてしまう。

「な、何をおっしゃっているのですか？ イノセンシオ様がなさるような仕事では到底ありません。そういった仕事は私たちのつとめです」

メイド長が動揺しているのと、イノセンシオは悪戯な笑みを浮かべ「じゃあ、やつぱりセラの仕事今日はここまでにしてよ。それがだめならさっきメイド長がおっしゃられたように……」

それにはメイド長も困り果てる。少ししてメイド長は深い溜め息をつく

「わかりましたっ、認めましょっつー！」

「やったあ、ありがとうブリギッタ」

うれしそうにはしゃぐイノセンシオ。彼をよそに、ブリギッタがごめんなさいねといわんばかりの顔を向け、私は軽く首を振って微

笑み返した。

メイド長が、ま、負けた。どうしよう……。私やっぱり。。。。

「さ、セラ用意してきなよ」

本当にうれしそうにいうイノセンシオに

「私一人だけ仕事を放棄して行くわけには行きません」

きっぱりと彼の目を見ていった。やっぱり私はイノセンシオとは行けない。

それにイノセンシオは平然と

「ねえ、ブリギッタ。今日の祭りの時間ぐらい、祭り行きたい使用人全員祭り行かせてもいいんじゃない？」

にっこりと提案した。それにはブリギッタは額に手を当て

「仕方ありませんね、今日だけですよ」

溜め息混じりにいった。

「め、メイド長っ！」

自分のせいでとんだことになり、慌てふためく私に

「気にしなくていいですよ、セラフィーナ。屋敷は私や主人に任せて楽しんでいらっしやい」

メイド長は優しく微笑む。

そんな、そんなことって。

「。。。。メイド長も、料理長もいかないなら私もいきません。」

下をうつむいて私はいった。二人に申し訳がなくてたまらなかつた。

「そうだよ、たまには二人で仕事忘れて楽しみなよ」

イノセンシオがいった言葉に私は首を縦に振り賛同する。

イノセンシオと私の顔を交互に見比べ

「今回は特別ですからね、全く二人とも頑固なんですから」

メイド長はやれやれといわんばかりに折れた。



やったあ！ そうだよ、たまには二人に二人だけの時間をゆっくり楽しんでもらいたい。

って、あれ………？ もしかして私自分で自分追い込んでしまった？ これじゃ、祭り行くこと決定じゃない。はあ、またやっちゃた。どうしてこうドジなんだろう………。

自己嫌悪に陥っていると

「この部屋の掃除が終わったら、シャワーでも浴びてきなさいな、セラフィーナ」

ブリギッタがいった。

「すみません」

「謝ることないわ」

ブリギッタがいった

「じゃあ、途中まで一緒に行こう」

話を聞いていたはずなのに、イノセンシオがすぐ私の手を引いて部屋からさっそうと連れ出した。私が振り向くと、メイド長は怒っても呆れてもなく本当に優しい顔でほほえんでいた。

「服は選んであげるよ、じゃあ四時ごろにまた来るから」

自室のドアの前でイノセンシオがいった

「いいですよ、そこまでなさらなくても」

私が自室の中に少し入った場所で、目を伏せがちにいった。

「………セラッ」

突然のことだった。イノセンシオは部屋の方に入ってきて、私にいきなり顔を近づけた。とっさのことだったが、私は左を向き何とか防いだ。右頬に彼の唇が当たっていた。

「困ります」

目をつぶり、何とかその口にすると彼はゆっくりと私から離れた。

どうしよう、十時にはあそこに絶対に行かなければ行けない。どうにか、どうにかして帰りはイノセンシオから逃げるしかない。それにいくら人が多いからといって、ベナサール様に出会いでもしたら……。

そんなことを考えながら浴場に向かっていて、  
「ずいぶんいい身分だな、おい」

後ろから声がした。この声は、彼以外にいるはずもない、か。  
ふうと息を吐きながら肩を落とすと私は振り向いた。

セラフィーナが振り向くと、前をあけたスーツ姿の長身の男がいた。肩ほどの黒髪、人を見下すかのような黒目。年は二十代前半といったところ。男は近くの壁に寄りかかりながら

「主では飽き足らず旅行者をたぶらかしているのか？」

その言葉にセラフィーナはきつと男を睨みつけた。続けざまあざ笑うかのように

「なんだ、なにかいいたそうな顔だな」

そういつて男ははっとした。目の前にいる少女は確かににらみつけていたが、その瞳からは涙が伝って落ちていた。少女はくるりと踵を返すと、さっさといつてしまった。

男は呆然とその後ろ姿を見送っていた。

「はい、いいわよ。これでおしまい」

「ありがとうございます、ブリギッタさん」

セラフィーナはそういって、鏡の前の自分をみた。いつもよりしている化粧で、どこか雰囲気が違う。ブリギッタはセラフィーナの後ろに回り、両肩に手を置いて

「あなたも大人っぽくなつたわね」

暖かいほほえみでしみじみといった。それには

「そう、ですか？ この前また十二三歳じゅうさんにさんに間違えられましたけど……」

セラフィーナは苦笑い。

「四年前に比べればずっと大人っぽくなつたわ……。あなたももう十六になるなのね」

「そうですね……」

セラフィーナは目を細めながらいった。

コンコンとドアを叩く音がして

「セラッ！」

イノセンシオの声が飛んできた。

それにはセラフィーナとブリギッタが鏡越しに困った笑顔を見合わせる。

「お迎えね。私は花火が本格的にあがるころに主人と行くから、先にいろいろ楽しんでらっしゃい」

ブリギッタがそう笑いかけると

「……はい」  
セラフィーナもほほえみかえした。

ドアを開け、二人は部屋を出た。ブリギッタは軽くイノセンシオに会釈をし、行ってしまう。二人はその後ろ姿を見ていた。

セラフィーナがまだブリギッタのほうを見ている中、イノセンシオはセラフィーナのほうをむいて

「やっぱりその服似合うね」

にっこり笑った。セラフィーナはとまどいがちに微笑する。

腰あたりに黒いリボンを巻きつけ結び目は正面にある、胸元あたりにフリルなどの刺しゅうが施された七部袖の薄い生地白いワンピース姿。そんなセラフィーナを見ながら

「きれいだよ、セラ」

イノセンシオがいつて

「……ありがとうございます」

セラフィーナが何とか笑っていった。

「じゃあ、ちよつと早いけど行こうか」

時刻は五時を少し回った。四時頃にイノセンシオがセラの服を選びに来て、そのあとセラフィーナがブリギッタに用意を手伝ってもらうことになった。談笑を交えながらの用意だったため、すっかり時間がたってしまった。

「そうですね、……ところでダルコさんは？」

セラフィーナはきよるきよると辺りを見渡して訊ねる。その顔はどこかさめていた。

「ああ、俺が来ないでいっていったんだ。せつかくの祭りだし、

あいつもここのとこ全然休みとってなかったからさ。ちょうどいい機会だと思って」

イノセンシオが淡々と答え

「そうですか……でも危険なのではないですか？」

セラフィーナが少し肩を落としながら聞く。

「大丈夫さ。俺ももうそこまで子供じゃないし。まあいざとなったらどうにかするから、自分のこともセラのことも」

イノセンシオがセラフィーナの目を見ていった。セラフィーナはそんなイノセンシオから目を逸らさず

「……いざとなったら、ダルコさんが駆けつけてきてくださる気もしますしね」

あっさりという。

「あはは、確かにあいつならしかねないな。俺らのことこっそりあとからつけてそう」

イノセンシオが笑う一方

「……絶対そうしてますよ」

セラフィーナがぼそりといった。それは、案の定イノセンシオの耳には届かない。

時刻は六時前。空は次第に暗くなり始めていた。

首都の中心部では、商店街や広場に所狭しといるいろな屋台や店が出回っていた。どこもかしこも盛大に彩られ、様々な色や光のもので溢れかえっていた。

「早く花火あがんねーかな」

リュファスがぼそりといつて

「六時きっかりにならないとあがんないって。ここは時間につるさい国だしね」

その左隣でルカが棒のついたブルーレースのような丸い飴玉を舐めながらいった。

「それうまいの？」

リュファスが訝しげに飴を見ていうと

「ふつう、まずくはない」

ルカの率直な感想。

「そうですか」

リュファスは右左とせわしなく道の両側に延々と続いていそうな店という店を見ていた。食べ物だったり、的当てなどのゲームだったりとにかく様々な店がある。

「しょっぱいもん食いてえ、しょっぱいもん」

リュファスのところに後ろからトレンツの声が飛んできて

「俺なんか飲むー」

ハシントの声も飛んでくる。

「なんか買えばいいだろ」

そしてドレットの呆れた声も飛んできた。

「兄貴たちも結局一緒に来たね」

ルカが残りかけた飴をがりがりと食べながらいうと

「だな」

リュファスはまた空を見上げた。まだ花火はあがらない。

花火もう少しだな。そう思いながらふと空を見上げた。暗みはじ



めた空。まだ星は見えない。

「セラ、何か買わないの？」

右隣にいるイノセンシオがいつて

「はい、花火があがってからでいいんです」

私は人とぶつからないようしながらいった。

「俺が払うから、遠慮しないでどんどん買っていいよ」

イノセンシオがカップに入った虹のようなアイスをおいしそうにほおぼる。

遠慮しないでといわれても……。

自家用車でお店が並ぶ通りまで乗せてもらって、ついたころには五時半を少し過ぎていた。そしてもう花火があがる六時少し前になった。まだお腹がすかないといえは嘘になるが、花火が中盤になったほうが気分も今よりよくなって食欲も出てくる気がした。

それでも、人におごられるというのは嫌いではないが、おごつてくれる人が自分が仕える立場の人であり、複雑な関係となると話は別だ。これじゃ本当に、彼女というより養ってもらう妻じゃないか。あまりいい気はしない。

ふうとこっそり小さく溜め息をつく。

「あ、花火ももう少しじゃない？」

イノセンシオがいつて、私は空を見上げた。

パン。

風船が割れたような音がしてから、空に花が咲いた。おそらく最初のこの花火はこの国の国花でもあるアガパンサスの花に似せたもの。それが大きく空に描かれると、数秒後また爆発音がして空に色とりどりの花火が次々に打ち上げられた。

アガパンサスの花……。

この国の国花でもあり、国の行事ごとには欠かせないものとなっている。花言葉は、実直、そして恋の訪れ……。

小さいころ、アガパンサスを大事に育てると運命の人と出会えるなんて迷信があつてみんな育ててたな。私も、一回学校でみんな一人一人育てなきゃいけないくて育てたけど、いつの間にか私の鉢だけなくなちゃって。確か、誰よりも早く咲いたから目立っちゃって同級生の女子の誰かが妬ましさかなんかわかんないけど、もって帰っちゃったんだっけな。犯人わかつてその子謝るだけ謝ったけど、結局返してもらえなかつたっけ。ご利益でもあつたのかな？ まあ、もうどうでもいいけどね。

私は人とぶつからないように注意しながら空を見続けた。

「やっぱ、首都だけあつて結構いいじゃん」

トレンツがパツクに入った魚介類や肉が入った白色の麺類であるものを食べながら感心した。

「ところどころ、魔術使ってるっぽいね。にしても使っていないのも味があつていいな」

ルカのその言葉に

「魔術使ってるってよく分かるな」

俺は少し驚いた。

「いや、ところどころ光が魔術のそれだからさ。形も複雑なのは多分普通に火薬詰めても限界あるだろうし。んー、なんというかりユファスが魔術使えればすぐ分かるんだけど」

ルカが歯切れ悪くいった。なんとなく唯一魔術がからつきしな俺に気を使っていることも伺えた。

そういうこと、本能的に分かるってわけか。そりゃ、俺には一生理解できねえな。

「そつえば花みたいなのもあがつてるけど、ラナンキュラスの花もあげるのかな。というかあがつたのかな？」

ルカが歩きながら空を見つつ、立ち並ぶ露店も見る。

「ランキュロスはさすがにあげないんじゃないかね？　いくら今日が平和記念日とはいえ、元敵国だからな。あんまりよく思っていないやつも多いし」

「なるほど、国民の考えはそうなるか。でもさ、やっぱりユファスこここの出身だね。あんまりランキュラスって正式にいつてるの耳にしたことないし」

「ああ、それな。アガス語ではランキュロスでおっちゃってるし、十数年そういい続けてたの今更直すのも結構めんどくさいというか、慣れちゃったというか。とにかくアガス語ではランキュラスよりランキュロスのほうがいいやすいんだよ」

俺が頭をかきながらいうと

「ふーん、勉強になりました」

ルカがからかうようにいった。

「てかさー、お前らなんかくわねえの？」

「うわっ、びっくりさせるなよ。ドレットいつからいたんだ？」

いきなり右でそういわれ俺は驚いてそういった。

「ランキュロスはさすがにあげないんじゃないかね？　ぐらいから。いやさ、あいつら本格的にターゲット探し始めたから」

そういつてドレットは親指をくいと後ろへそらして二人を指し示す。

「それならそうともっと自然に入ってきてくれよ。んな気配消さなくとも、あー心臓に悪い」

俺が呆れていうと

「悪い悪い」

ドレットがさほど悪びも見せずいつて

「僕は気づいてたけどね」

ルカはあくびをしながらいつた。

「で、なんかくわねーの？」

「僕は食べるよ、そろそろがつんと」

「俺はもう少ししたらでいいや」

そう返して俺はまた花火を見る。星形のような模様が空に描かれ、そのあと赤い粉のようなものが空を舞う。

「そっぴや、あいつの瞳もあんな感じの赤だったな。確か父親譲りとかいってたっけ。」

「きれいだったな」

独り言のようにいつて

「そう？　俺、ああいう星形とか見ると魔方陣思い出しちゃうよ  
ルカが正直に言った。」

「確かに、魔法陣多いもんな、ああいう形のやつ」

ドレットが同意する。

こいつらって………。それにしても、あいつ惜しいよな。  
見れたらよかったのに。

そう思いながら人とぶつかるのを最小限に押さえ、また空を見上げる。さすがに、花火もあがれば人も多くなるな。

「あ、またアガパンサスの花だっ！」

ルカが空のほうに指差した。

空に白と青紫色のアガパンサスの花のような形がくつきりと浮かび上がっていた。

「そっぴや、なんでアガパンサスなんだ？」

ドレットが首をかしげ

「さあ？」

ルカがそっぴやって俺のほうを右ひじで小突いた。

「多いからじゃねえの？」

俺は曖昧にいう。俺が分かるわけないだろ。そんなの今まで疑問に思ったことねえし。

「使えない。まあランキュラスみたいに建国者が好きで花の名からとったとか？　アガパンサスの花言葉も考えるとランキュラスよりは納得いく……か？」

「なんで自分でいって疑問系？」

訊ねるとルカは

「だって、ラナンキュラスは魅力的とか名譽って意味でアガパンサスは……」

「アガパンサスは？」

ドレットが促す。

「まああれだね、恋の季節ってやつ」

ルカがラナ語に変え早口で言うと

「どんな季節だよ？」

ドレットが呆れている。

「この国じゃ春がそういう恋の季節だっけな」

俺がいった言葉に二人は驚愕した。

「まじ？」

ドレットが目を大きく見開いていつて

「でもさ、アガパンサスって初夏、今くらいかもう少ししたら開花じゃなかった？」

ルカが納得いかないといわんばかりいうと

「じゃあ、今がちょうどその恋の季節だったりしてな」

ドレットがどうでもよいといわんばかりに一言。でもそれはラナ語だった。

「つかさ、よくんな花言葉とか知ってるよな、男のくせに」  
俺が呆れていると

「国入るときいろいろもらったパンフレットに書いてあったんだよ」  
ルカは苛立ち気味に返す。

ドレットは、一人買ってきた魚の身をすりつぶし球状にして棒に  
三つさし油で揚げたものを、黙々と食べていた。

俺たちの真後ろで

「これ！ って思う奴いないなあ」

ハシントが不満をこぼし

「外れだなあ、この国」

トレンツも文句をたれる。

「これならお前の一人勝ちだな」

俺がルカに向かっていうと

「どうかかな？」

ルカがあっさりいった。

「あーあ、こんなことならメイドの子の誘い受けときゃよかった」  
溜め息混じりにいったハシントに

「お前、好みじゃないからってこっぴどく振ってたくせに」

ドレットが振り向きもせず、最後の一個になった魚のすり身を上  
げたものをほおばりながらいう。

「紳士的に断つただろー」

ハシントのそんな調子のいいような返事が返ってきて

「あれのどこが」

ドレットが最後の一口を飲み込んでほとほと呆れた。

「メイドって今日の仕事の屋敷の？」

ルカが後ろを振り向いてハシントに尋ねた。ラナ語で。

「ああ、そりやみんな美人ちゃ美人だったけど年上ばつかでさ、誘ってくれたのも見た目は若かったけど三十路だぜ三十路！」

ハシントもラナ語でいきりたっていった。

「八歳しか違わないじゃん」

トレンツとルカが同時にいって

「おまえらなあ、他人事だと思つて。俺はいつでも二歳上までなの。それ以上はもう十分楽しんだから結構っ！」

ハシントがラナ語で断言した。

「へえ」

「ふーん」

二人の弟が大して興味なさそうにいう。

「そういや、トレンツ兄アナイスのとこの女の子にお土産頼まれてなかった？」

ルカが思い出したようにいって

「あ！」

トレンツも思い出したようにいう。

お土産？ そういや俺も誰かに………。まあ、いつか。

「いいんだよ、ものなんてありすぎて困りもんだろ？」

トレンツがハハハと笑いながらいって

「なにまた三股とかしてバレたの？」

ルカがラナ語で訊ねた。

「もともと俺は誰とも付き合ってたの！ むこうが勘違いしただけ」



トレンツが悪びれる様子もなくいつて

「最悪だな」

ドレットがぼそりと一言。それには俺も同意する。

「それより弟よ、俺はお前が心配だな。彼女欲しけりゃ紹介するぞ」  
ハシントがラナ語でルカに言い寄り

「そうそう、興味ないって、そんなんじゃゆくゆくはその青いで  
くのぼうみたいたいになっちまうぞ」

トレンツのその言葉に

「誰がでくのぼうだ」

ドレットが一応反論する。

「それより兄貴たちこそ本命見つけて落ち着けば」  
ルカがどうでもいいといわんばかりにいつて

「本命が見つければなあ」

二人の兄は嘆くかのようにいつた。

ドレットが花火を見ながら

「いやあ、恋の季節だね」

ラナ語でいつて

「どうかな」

俺は吐き捨てるかのようにぼそりとつぶやいた。

でもま、こういうイベントのときって彼女欲しいとか思うわな。  
・・・あいつといつたらそれなりに楽しかったかな？ そんな  
ことを考えながら歩いていると、やけにカップルが目についた。

ドンツ。

いきなり大きな音がして、空を仰ぐと空は流星群のように光がと  
どこおりなく星のように流れていた。人々の歓声があたり一帯に広  
がる。

目の前を見ると、十字路になっていた。正面、左右の道から人という人が流れていく。俺は、ふと遠くの正面を見た。

来たところとあまり変わり映えのない露店などが立ち並んでいた。家族、カップル、子供たち。様々な人が来る中、俺は思わず

「えっ？」

そう口にしてしまった。目をつぶってもう一度見る。頭を振って確かめても、間違いのないようだった。

「どした？」

ドレットが不思議そうに俺を見て

「見つけた」

俺はそれだけいう。ドレットが余計に首をかしげる中

「なあ、一番最初に女の子誘えば勝ちなんだよな？」

俺がハシントたちに振り返って

「やらないんじゃないの？」

ルカが目を丸くする。

「そりゃ、そうだったけど」

トレントがそういつてハシントと目をあわせる。

それを見た俺は

「誰がやらないなんていつたよ」

そついい終わるや否や駆け出した。

目標は十字路のちょうど真ん中で一人きよろきよろしていた。そして右を見て、何を見たか目を見開いてびっくりしていた。まあ、そんなことどうでもいい。

目標まであと、五メートル。でも、あいつはまだ気づいていないようだ。

「……………目標までもう

「おい、行くぞっ！」

ゼロメートル。

俺はそいつの左手を右手で掴むと、強引に連れ出した。とりあえ

ず左折してしまふ。

冷たい手は何もいわない。あの時と同じように。

「セラ、これやらない？」

イノセンシオが指差したのは、ルージュフィッシュを一分以内で網ですくうというゲームの屋台。長方形の細長い水槽には、掌サイズの魚がうようよ泳いでいた。ほとんどの魚が赤色だが、ところどころ金や銀が混じっている。この魚はとても素早く、一度網に入っても自力で出てしまうというほどだ。毎年イノセンシオは自力に従者に頼み、最低一匹は持ち帰り屋敷の水槽で飼っている。これはうまくいけば、顔ぐらいの大きさになりイノセンシオはそれが楽しいらしいのだ。

「私は、遠慮します」

苦笑いで私がそういうと

「じゃあ、ごめん。俺だけやるね」

「それでは、私は少し先をいっていますね」

「え？」

「大丈夫ですよ。あそこの十字路あたりにいますから」

そういつて私は少し先の十字路を指差した。

「わかった。迷子にならないですよ」

イノセンシオが心配そうにいつて

「そこまで子供じゃありませんよ」

私はそういつてイノセンシオをあとにした。

ふう、やっとひとりになれた。とはいってもほんの少しの間。

左右の店をちらちらと見ながら、私は肩を落とす。みなどれも軽食とはいえないそんな食べ物屋ばかり。

お腹すいたなあ。でも、ときとうに買って後悔したくないし。

そんなことを考えていると、もう十字路の真ん中についていた。

どっちに行くんだろう？ もし私が決めていいなら、決めさせてもらおう。

そう思いながら、右を見て左を見て、私は左からやってくる光景に驚きを隠せなかった。周りに溶けこんでいるように見えるが、私の目から見たら明らかに従者を引き連れたベナサール様ご一家。見

間違っはすもない。

ど、どうしよう。こんなところで、もし見つかりにでもすれば、まだ、こちらには気づいていないようだし、に、逃げなきゃ。

そう思い、体を正面に向き直したまさにそのときだった。

「おい、行くぞっ！」

そういわれ、左手を少し痛いぐらいの強さで握られいきなり走り出された。とっさのことにわけがわからず、私もつられて走ってしまふ。幸いなことに、ベナサール様たちとは逆の右の方向に。

手を引くものの後ろ姿は見覚えがあった。走るたびに揺れるセミロングほどの黒髪。

……えっと、どうなってるんですかね？

思ったが口にはしなかった。

なんか、出遭ったときみたい。

思わず笑みがこぼれる。そして、彼を見た。自分より背が高く、そこまで太くはないがたくましいと思えるような後ろ姿。

また自然と笑みがこぼれた。空では、色とりどりの花が咲き乱れていた。

No. 21 小さな逃亡者

「あれ、リュファスだよね」

リュファスがセラファイーナの手をとって走るのを見ながらルカが  
いって

「あいつも成長したなあ」

ルカの左横でトレンツが腕を組み、返事になっているようななっ  
ていないような返事をする。

「なあ、ドレットよお」

二人の少し後ろでハシントがドレットに腕を回し

「なんだよ？」

ドレットが片眉を吊り上げてきく。

「あれってさー」

ハシントがなんともいえない表情でいい

「だな」

ドレットは即答。

「俺、なんか面倒ごとのにおいがぶんぶんするんだけど」

ハシントが弟たちに聞こえない声の大きさにっこりいうと

「あーあ、つたくリュファスのせいで賭け負けちゃったじゃん」

ルカが舌打ちし

「ま、俺はこんなんであいつに負けた気全然しないけどな」

トレンツが屈託なく笑った。

そんな二人をよそに

「保護者代わりとしてどうかしたほうがいいんじゃない？」

ハシントがまたぼそりいうと

「もう遅いって」

ドレットがもう二人がいない十字路あたりを見ながらいった。ド  
レットの真顔の返事に、ハシントはハァーと深い溜め息一つ。

そんなハシントを尻目に

「いやあ、アガパンサスの季節とはいったものだな」  
ドレットが本当に小さくつぶやいた。

その少し前、赤い魚が一匹入ったビニール袋を下げたイノセンチオがきよろきよろとセラフィーナを探していた。屋台を見て通りを見て、そして最終的にセラフィーナが進んだであろう十字路に眼を向ける。そこには案の定、セラフィーナがいた。

イノセンチオはその後ろ姿を見てほほえみ、セラフィーナのほうに歩き出したまさにそのときだった。

「えっ？」

イノセンチオは予想もなかったことに目を丸くする。

なぜなら、先ほどまで十字路の真ん中に立っていたセラフィーナを、いきなり正面のほうの通りから走ってきた見知らぬ少年がセラフィーナの手を取り連れ出したからだ。それには思わず、イノセン

シオはセラファイナのもとに駆け出す。

人と人の合間をすり抜けてできるだけ早く十字路についたイノセンシオは、肩で息をしながら右を向いた。

二人はまだイノセンシオの目の見えるところにいた。セラファイナは何の抵抗も見せず、少年に手を取られる形で走り続けていた。

「どうして……?」

イノセンシオは思わずそう口にする。

そして、また二人の下に駆け出そうと一歩踏み出して

「イノセンシオ?」

後ろから聞き覚えのある声がイノセンシオの耳に入る。それにはイノセンシオは瞬間に振り返った。

「べ、ベナサールッ!」

イノセンシオが驚いていうと

「ふふ、どうしたの? そんなに慌てちゃって」

ベナサールは花が咲いたような笑顔でいい返した。昨日よりきつめに巻いたウェーブの髪に、胸元あたりに白いバラのような花が刺しゅうされた、水色のシンプルなワンピース姿。透き通るような白い肌と明らかに普通ではない美しさに、近くを通りすぎた人という人が振り返る。

「あ……」

イノセンシオは振り返って確かめた。もちろんもうそこにセラファイナはいない。

「何か探してたの?」

ベナサールは不思議そうに訊ねる。

「……い、いや。なんでもないよ」

「そう、ならいいけど。それにしても奇遇ね。こんなところで会うなんて。会えてうれしいわ」

ベナサールが最後のほうは消え入りそうな声でいうと

「イノセンシオ君じゃないかっ!」

ベナサールの後ろのほうから威勢のいい声が飛んできた。



「こんばんは、おじさん、おばさん」

声の主はイノセンシオは明るくいった。長身でがたいがよく清潔そうな格好をした、初老の男性は右隣にいる妻に微笑む。妻はきれいな顔立ちで、どこことなくベナサールに似ていた。

二人は真正銘ベナサールの両親であった。ベナサールの母親はにっこりと

「偶然ねえ、……あら？ イノセンシオ君一人なの？」

「実は、従者とはぐれてしまいました」

イノセンシオが言いにくそうに告白した。

「なに？ それはいかん」

ベナサールの父が少しいきり立っていうと

「従者つてダルコさん？」

ベナサールが首を傾げた。

「え、あ、ああ。俺が勝手にいるんなとこ行くから向こうが見失っちゃたみたいで」

イノセンシオがベナサールから目をそらしていった。

「珍しいこともあるのね」

ベナサールがいつて

「まあ、ダルコモプロとはいえ人間だし、失敗もあるさ……」

イノセンシオが歯切れ悪くいう。

「おや、噂をすれば」

ベナサールの父の言葉に

「え？」

イノセンシオは思わず振り向く。

「こちらにいらしたんですか。探したんですよ」

イノセンシオの目の前には、黒いシャツ姿といたいつもよりラフな格好のダルコがいた。イノセンシオは驚愕するばかりで何もいわない。

「これでひとまず一安心ね」

ベナサールの母がそういうと

「はい」

イノセンシオは何とか平生を取り繕いそういい返した。

「イノセンシオ、今年もとったのね……」

いきなり話題を変えたのは、ベナサールだった。イノセンシオの手に持つものを優しい眼差しで見ている。

「ああ、ベナサールと一緒にとってから自分でもだいたいぶ上達したな  
って思うよ」

「そうなの？ 一昨年なんて、イノセンシオも私もセ……  
誰も取れなくて、結局おじさんにおまけしてもらったのに」

ベナサールは目を伏せがちにいつて

「そんなこともあったな……」

イノセンシオが懐かしそうにいう。

「……ねえ、もしよかつたらこれから一緒に行かない？」

ベナサールがそう提案すると

「私たちも夫婦水入らずで久しぶりにゆっくりしたいし、イノセンシオ君がよかつたらお願いできないかしら？」

ベナサールの母がイノセンシオに優しい笑顔でいった。

「もちろんよろこんで」

イノセンシオの言葉を聞いて

「じゃあ、お邪魔な娘はいないし行くとするか」

「ええ」

ベナサールの両親はさつさとイノセンシオが来た方向の道にいつてしまった。

「もう、二人つたら」

ベナサールは少し憤慨気味にいつて、続けて

「行きましょ、イノセンシオ、ダルコさん」

そういつて両親とは真逆の道を歩き出す。

少し先を進むベナサールに聞こえない声で

「いつからつけてたんだ？」

「もちろん最初からですよ、あなたに何かあったらどうするんですか」

「……俺たちのことはいいから、セラを」

「彼女なら大丈夫でしょう。もうそこまで子供じゃありませんし、いざとなったら自分の力でどうにかしますよ。今は、ベナサール様との時間を大切にしてください」

イノセンシオの言葉を遮りダルコはいった。

「わかったよ」

いらいらしながらイノセンシオが言い放ち

「心配なさらなくても大丈夫ですよ、彼女が帰る場所はあなたと暮らす屋敷以外ないのですから」

ダルコは笑顔でいう。

「それもそうだな」

イノセンシオは眉根を寄せながらそういうと、急いでベナサールのところにかけて行った。

「ここまでくれば平気だろ」

少し息切れしながら、振り向くことなく彼はいった。

先ほどようやく走る速さを緩め止まったばかりだった。振り返ってみるともう先ほどの場所は見えず、少し遠くに来たことがわかった。

左手をひざにつき息を整えている彼と同じく、私も息を整えていた。相も変わらず、彼の右手は私の左手を離す気配はない。握る力はやはりまだ強くて

「あ、あの」

私は思い切ってそう切り出した。

「あー、ごめんな急に。足痛くない？」

私の言いかたもまずかったのだが、勘違いしたであろう彼はそういった。

いや、そうじゃなくて。

ようやく彼は私のほうを振り向いた。申し訳なさそうな、でもどこかうれしそうな顔。そして、私の顔をなぜか直視する。

私は首をかしげ

「えっと、何か変ですか？」

「い、いや、昨日と雰囲気違うから」

そういつて彼は私から目を逸らす。

「そうですか？」

化粧のせいかな？ 昨日はすっぴんとまではいかない薄化粧だったし。それとも服？ まあ、いつか。それより……。

「すみません、あのちょっと手が痛くて」

私が申し訳なさそうにいうと、

「あ、ごめん」

そういつて彼はすぐ手を離れた。そして

「手、冷たいんだな。走った後でも」

ほほ笑んでいる。

「はい、あんまりあたたかくならなくて……」

苦笑い気味に私がいうと

「いいんじゃない、ルカだれかが手が冷たいやつは心があったかいとかいってたし」

リュファさんは私の視線をしっかりと受け止めてそういつてくれた。思わず私は視線を少しずらし、

「そう、なんですかね」

あいまいな返事をする。

「まあ、信じるか信じないかは人しだいだよ」

「ですね」

そういつて私はふと思いつ出したように尋ねる。

「あの、一ついいですか？」

そうだ、さっきから気になっていたこと。これは聞かなくちゃいけない。

「なに？」

リュファさんは私に顔を向けた。

「ここまでくれば大丈夫ってどういうことですか？」

No.22 楽しい祭り(前編)

『ここまでくれば大丈夫ってどういうことですか?』

もしかして私とイノセンシオのことを知っている? まさか、私と彼を離すために?

考えすぎかもしれないが、そう思わずにはいられなかった。偶然にしてはできすぎている。

私はまっすぐ彼を見る。

彼は目を逸らすことなく頭をかきながら

「あー、いや俺仲間と一緒に来てただけど、邪魔されたくなかったから」

へっ?

その言葉に思わず拍子抜けしてしまう。

「あ、そ、そうだったんですか……」

そういつてほっと胸を撫で下ろす。でも本当によかった。

「セラだっていきなりまわりが男ばかりになったら困るだろ?」

リュファさんが困ったような笑顔になっていった。

「確かにいきなりは少し、困るかもしれないですね」

私も困ったようにいう。続けて

「仲間って、お仕事の?」

「ああ、つってもみんな年近いし友達みたいなもんだけど」

「そうなんですか」

なんだかんだいって、リュファさんにこうして連れてこられてよかったのかもしれない。あの場所でまとも会ってたら、イノセンシオにうまくあしらわれて終わりだったろう。それに、イノセンシオに会わせちゃいけない気がするし。

「……イノセンシオに何もいえずに来ちゃったけど、大丈夫かな？ まあ、見られてはなさそうだし、帰ったらうまくごまかそう。」

そんなことを考えていると

「俺も一ついいか？ 今日仕事っていつてなかったけ？」

リュファさんが少し怖い顔で訊ねてきた。それに私は血の気がひく。そうだ、彼には今日仕事があるから、夜遅くに公園で待ち合わせの約束したのに。うそをついていたことになる。

「あ、そ、それは、確かに仕事はあつたんです、夕方までしてました。嘘じゃないんです。でも、急に休みを出されて……」

「ごめんなさい」

なんと説明していいか分からず、とりあえず少し動揺しながら私はいった。

「謝んなくていいよ。そっか、祭りこれでよかったな」

彼はそれで納得してくれたのか、私に笑いかける。それには私はずいうれしくなり

「はい」

思わずそういつてしまった。



『はい』

そう満面の笑顔でいう彼女に思わず見とれてしまう。

正直に、まともにさっき近くで見てもかわいいと思ってしまうた。

白いワンピースといい感じの化粧が、昨日とはまた違う雰囲気を見せている。

俺もハシントたちじゃないけど、もう少し俺も気合入れときゃよかった。

「あの、ユファさん？ 具合でも悪いんですか？」

少し心配そうにセラが訊ねてきて

「え？ いや、大丈夫だけど、どうして？」

「さっきから気難しそうな顔してましたし、顔色もあまりよくなさそうだから……」

「ああ……、なんでもないよ。ただ、寝不足なだけ。それより、はい」

俺はとりあえず、お金が入った小さな封筒をポケットから取り出しセラに差し出した。セラはそれを受けると

「これ、もしかして昨日のお金ですか？」  
まじまじと封筒を見た。

「ああ、昼飯代はちゃんとはいつてる。あと、ケーキ代はいくら払えばいい？」

俺のその言葉にセラは慌てて

「いいですよ、ケーキ代はっ！ 私が無理やり誘ったんですから  
そう断る。」

「いや、でも、そういうわけには……………」

「お昼代だけ返してもらえれば十分です。これだけいただいておきます」

セラは断固としてケーキ代は払わせてくれないと意思表示。変な  
とこで頑固だなあ。

むー。やっぱりふに落ちないというか。

あっ！ そうだ、そっちがその気なら

「セラもうなんか食べたの？」

いきなり話題を変えた俺に

「いいえ、食べたいと思うものがなくて」

セラは正直に答えた。

「じゃあさ、昨日のお礼もかねておごるよ。食事も、食事以外の出  
店代もさ」

「そ、そんな悪いです」

慌てふためくセラに

「悪くない。ここはおごらせてよ、男として」

俺が苦笑い気味にいうと

「……………わかりました。今日だけですよ」

セラが申し訳なさそうに折れた。

「じゃあ、行くか」

「はい」

そして、俺たちはやっと道を進んでいく。俺はさっきまで右手に

いたセラの右手にくる。出店は見たところ食べ物屋ばかりが並んでいた。

「あ、チーズもち」

セラは左側の屋台を見ていった。

「もちつてあのもち？」

俺が首を傾げると、セラは首を横にふった。

「違います。もちもちした粘り気の強いあるお芋をチーズと混ぜてバターで焼いたものなんですよ。とってもおいしいんです」

セラはうれしそうに説明した。

「へえ」

俺はそういってちらりセラに目をやる。セラはすっかりチーズもちに輝く視線を送っていた。ああ、そっか。

俺はセラの前を通り過ぎその屋台の前に来て

「六個入り一つください」

すぐさま注文した。セラが俺の隣に来ると

「まいど。ソースは好きなのとっていきな」

店の体格のいいおじさんが、手際よくパックにフォークを二つつけて渡してくれた。

「セラ、ソースは任せるよ」

俺がそういってセラは

「えーと、じゃあこれとこれとこれですかね」

そういって、黒と白と赤の小さなソースをとった。

「じゃあ行くか」

そういって店をあとにした。

「はい、食べたかったんだろ？」

俺が人がいないところで立ち止まりパックを開けて差し出した。

「どうしてわかったんですか？」

「見てればわかるって、だって昨日のケーキ屋と同じくらいうれしそうに顔してたし」

「あーそっか、単純ですね私。……ありがとうございます」  
セラはばつが悪そうにしていたが、本当にうれしい顔でお礼をいう。

「どういたしまして。じゃあ、さっそく食べようぜ」

「はい、じゃあ、ソース全部隅のほうに出しちゃいますね」

そういつてセラはパックの墨の開いたスペースに手を汚さないよう慎重に三種類のソースを出した。そして近くにあったゴミ箱にゴミを入れ

「それでは、まずはユファさんからどうぞ」

「ソースはどれがお勧め？」

「みんな黒いソースがいいっていいますね」

「わかった、それじゃいただきます」

俺は小判型に焼かれたチーズもちの一つを半分に切り、黒いソースをつけて一口パクリ。

「うまいっ！」

「ですよ」

セラもうれしそうにいう。

「芋自体が少し甘くて、それがこのしょっぱいソースとうまい具合に甘じよっぱくなって。バターとチーズの風味もいいし、セラが好きなのもわかるよ」

俺が残った半分も黒いソースにつけてほおばっている

「気に入ってもらえてよかったです」

セラが俺の顔をほほえましく見る。そんなセラを見て、俺はようやくこれは誰のために買ったか思い出

「じゃあ、今度はセラどうぞ」

「はい、いただきます」

セラがチーズもちを三分の一くらいの大きさに切り白いソースをつけて、実においしそうに食べる。

なんかこいつ鳥<sup>あいつ</sup>みたいだな。鳥<sup>あいつ</sup>も自分の好物食べるときこんな感じだもんな。ペットにえさを上げる飼い主の気持ちがわかる気がする。ってセラに失礼か……。

そう思いつつ、俺は赤いソースをつけても一つパクリ。

「ほんとにいつたべてもおいしい」

セラが独り言のようにいって、俺はふとあることを思い出した。

「なあ、セラ、Tuesdays jolies aujourd'hui。」

そうだ、こいつラナ語できるのかな？俺はセラの反応を待っていると、セラは困惑しながら

「すいません私、ラナ語全然聞き取れないですよ、さっきも今日しかわからなかったです」

正直に告白した。一応ラナ語だとはわかったらしい。もしかしてはぐらかしているだけかと思い、

「本当か？」

俺は一応釘を刺す。

「はい、どちらかというを書くほうがまだできますね、といってもまだまだですが」

恐縮そうにセラはいった。

これは本当にさっきのラナ語聞き取れなかったらしい。まあ、そのほうがいいか。でも以外だな、こんだけアガス語はきれいにしゃべれるのに、ユトリユの発音は別として。

「ふーん、俺は書くほうがだめだな。文法とかさっぱり」

「話せるだけいいですよ、うらやましいです。ところで、さっきなんていったんですか？」

首をかしげ知りたそうにする彼女から視線を逸らし

「秘密」

そう誤魔化す。

「えー、気になるじゃないですか。ずるいです、教えてくださいよ」  
せがむ彼女に

「勉強したまえ」

俺はそういうしかなかった。

あんな恥ずかしいことアガス語で直接いえるかっての。ハシント  
やトレンツじゃあるまいし。

「そうですね、じゃあ、ラナ語でもう一回だけっていうのは」

セラは顔の前で小さく合掌し俺に頼んだ。

んー、まあそれくらいならいつか。

俺は頭をかきながら

「じゃあ本当に一回だけだぞ。T u e s t r e s j o l i  
e a u j o u r d ' h u i .」

それでもやはり気恥ずかしくてさつきより早口でいった。俺がい  
い終わるとタイミングよく、花火が立て続けに何発か空に上がる。

「んー、やっぱり最後の今日しかわからない。でもなんとなく発音  
はわかりました。勉強してなんて意味か絶対知りますね」

そう張り切るセラに

「まあ、ほどほどにね」

それだけ俺はいった。

まあ、直訳すれば君は今日とっても……まあ、昨日会  
ったやつにやすやすいえるようなことじゃない、か。俺は。

空では、きれいな色とりどりの花々が描かれては消えていった。

あー、おいしかったな。チーズもち。幸せだー。

でも、やっぱり気が引けるなー。誰かにこう全部おごられるのって、いけない気がする。

私はちらりと彼を見た。きれいな横顔。でもやっぱり男らしくて、年上のせいもあるのか私よりしつかりしていると思うし、今は隣にいてすごい落ち着くというか、なんだろう安らぎとでもいえばいいのかな。最初は確かに出会いも出会いだったし、少し近寄りがたいイメージがあった。目もどちらかといえばいかついし、失礼な話正直性格が悪そうだなとも思ってしまった。

でも実際は、本当に優しい人だと思う。なんだかんだ気を遣ってくれてるし。お金も、まさか本当に返してくれるなんて。友達に財布持ってたって話もやっぱり本当だったんだな。これでもし騙されていたのだとしても、文句をいえないというか後悔しない気がする。

チーズもちを食べ終わり、私たちはあの十字路から右にきたこの道をさらに進んでいた。お店は所狭しと続き、途絶える様子はない。人にぶつからないよう注意しながらまた彼を見た。しかし偶然にも彼も同時に私のほうに顔を向けたので、思わず目が合ってしまう。私は突然のことに内心驚いていると

「肉ボール食べる？」

リュファさんが平然と右のほうの肉ボールの屋台を指差していつ

た。肉ボール、か。丸くした野菜や米やパンなどの周りにきれいに何かしらのばら肉を巻いて特製のタレにつけて揚げたり、焼いたりしたもの。周りに立ち込めるタレのおいだけでおいしそうなのが、

「あ、私はいいです」

私は断った。

「遠慮しなくていいんだぞ」

その彼の優しさに私は本当に申し訳なくなった。……これは正直にいったほうがいいのかもしれない。

「あの、実は、私お肉ほとんどだめなんです」

謝るかのように私が正直に告白すると

「まじ？」

彼は目を見開き驚いていた。

「はい……。お肉全般っていうわけじゃないんですけど、ああいうばら肉系の肉は本当にだめで」

本当に自分が情けない。普通に肉が嫌いなんて人なかなかないし、嫌だろうな。めんどくさいって思われるに決まってる、というよりもすでに思われてる。

そんな自己嫌悪に陥っていると

「どういうのなら食べられるの？」

彼が訊ねてきた。

「えっと、ひき肉は大丈夫ですね。あと、薄いベーコンとかハムは好きです。直接固まりになっているのを切ったやつはだめなんですけど。あと皮なしの小さいウィンナーとかも普通に好きです」

少し混乱しながらいうと

「ふーん、めずらしいな、ほんと」

彼が物珍しげにいった。

「ほんと珍しいですよ、肉が嫌いなんて……」  
落ち込む私に

「いや、でも仕方ないよ、好き嫌いだし。それに、セラと一緒に食



事するともしかしたらセラが食べれない肉料理を食べれる機会があるわけだろ？ 肉好きにとっちゃいいんじゃない」

なくさめるように彼はいった。

「そう、ですかね。でも確かに小学校の給食で肉料理が出たら友達にあげてました」

「やっぱり、だと思った」

「それより、買いましようよ。肉ボール」

「え？」

「だってユファさん食べたんですよね」

「ああ、じゃあちよつと買ってきちゃうな」

彼はそうほほ笑むと小走りで店のほうへ行った。その後ろ姿を見て、私はふと自分の髪を触ってみた。縛れなくもないが、縛るほど邪魔ではない。幼いころはまあまあ長くしていたらしいのだが、今ではもうセミロングくらいになるかならないかになると肩あたりの長さに切るのが当たり前になっていた。

伸ばしたいと思わないこともなかったのだが、かつてイノセンシオにこのくらいが似合っている、長いのは想像できないし似合わないといわれ、断念したことがあった。というよりそこまでいわれると、落ち込んでしまい、確か伸ばす気が萎えてしまった気がする。

それに、イノセンシオだけではなく小学校のころは周りの女の子からもそんなことをいわれたこともあったっけ。

そんなことを考えながらまた髪をいじった。

「どした？ ぼーっとしちゃって」

声をかけられ、彼が戻ってきたことによようやく気がついた。

「いえ、あの、ユファさんは髪長いのが似合ってうらやましいなと瞬きを繰り返しながら目を逸らしてそういうと

「はあ？ なんじゃそりゃ」

リュファさんがあきれていった。

「私以前髪が長いのは似合わないといろんな人にいわれたことがあった」

苦笑いしていうと

「ふーん、まあ、想像はできないな」

その一言に一気に気が重くなった。

やっぱり、私似合わないんだ……。シヨック。

「でもさー、一回伸ばしてみれば？ 別に誰になんといわれようと自分の勝手じゃん。まあ、俺の場合、ただ単に切るのめんどくさくていつのまにかこうなってただけだけど。そこまで不自然じゃないから今は別に切ろうとは思ってないけど、さすがにもう少ししたらばっさり切るぜ。短いほうが楽だし」

「えー、もつたいないじゃないですか？」

「いや別に。伸ばしたかったらまた伸ばせばいいだけの話だし」  
あっさりという彼。

そんなものなのかな？ 私は結構切ったあと後悔するのが多かったからなあ。うーん……。心の中で悩む私に

「あ！ 俺思ってたんだけどさ、セラこれ肉なくせば食べられるんじゃないか？」

いきなり彼はいった。

「え？ あ、そうですね、いわれてみれば確かに」  
考えたことなかった。そんなこと。

「米と野菜どっちがいい？ 肉とってやるよ」  
いつてる時点ですでに用意をしている彼に

「えっと、本当にいいんですか？」

本当に実行するとは思ってもみなかったので、そう口にする。

「ああ、俺肉好きだし」

無邪気に彼はいった。

そういう問題かなあ……。でも、せつかくの彼の提案、無駄にはいけない。

「じゃあ、お米でお願いします」

そついい終わるや否や、パックの中に転がったひとつの肉ボール

をきれいに肉と中のお米で分けてくれた。お米だけでもタレが染み込んでいて十分おいしそうだった。

「はい」

彼はもらってきたフォークを差し出した。

「どうもありがとうございます」

私がそれを受け取ると、

「じゃあお先にいただきます」

さっそく中身は野菜であろう肉ボールをフォークでさして口に入れた。実においしそうにほおばる彼を見て、私は彼が用意してくれた丸いお米を

「いただきます」

フォークで口に運ぶ。濃厚なほどよい甘さのあるタレの味が一気に口の中に広がる。

「おいしい……」

独り言のようにつぶやくと

「だよな」

もくもくと食べながら彼はいった。

やっぱり、楽しいなあ。お祭りって、こんなに楽しかったんだよな。二年前だって、三人ですごい楽しかった。それは変えようのない事実、大切な思い出に違いはない。

ふと、空を見上げた。赤、青、黄、緑、橙、紫、白、さまざまな光が空を照らす。

やっぱり、きてよかった……。そう思わずにはいられなかった。

それから、途中で飲み食いしながら少しずつ道を進んだ。思えば今まで食べ物以外に金を使っていない。というより、このとおりはそういったものがメインのようだった。

俺はちらりとセラを見る。こんなでいいのかな？ 俺はいいんだけどさ、でもやっぱ祭りとかドレットたちといると的当てだったり、賭けだつたりなんかしらはするしな！。やっぱそういうのなきやつまんないかな？

そう思っていた頃だった。

「あれ、嬢ちゃん、久しぶりだね」

いきなりセラが俺の右側のある店の前でつつたつていた体格のいい男に声をかけられた。船乗りのような格好の、筋肉質の男。その筋肉のつき方をみると無理やり作ったものではなさそうだった。でもどう見ても三十路はこえていることがうかがえた。

「あ、お、お久しぶりです」

セラがびっくりしながら男にいった。

「知り合い？」

俺が訊ねると

「え、あ、はい」

セラが慌てふためきながら答えた。

俺がそんなセラを不思議がっていると

「どうだい、嬢ちゃん、今年は参加者少なくてね、今ならすぐ対戦できるけどするかい？」

「たいせん？　ますますわけがわからない。

「え、遠慮します」

セラは思いつきり首を振った。

「どうだい少年は？　腕に自信はないか？」

実にすがすがしい笑顔でいう男に

「へっ？」

俺はいきなり話を振られてそう口に出してしまった。男はそんな俺に

「何だ少年ならやってくれると思ったのに」  
「がっかりしていた。」

「えっと、俺何がなんだかさっぱりなんですけど」

俺が困ったようにセラを見ると、セラも困った顔を俺に返した。

「少年、もしかして私たちの店を知らないのか？」

男がびっくりしていうと

「あー、俺旅行者なんで」

あながち嘘ではないのでそういっておいた。

「なるほどいわれてみれば。なら説明しよう、右手に見える大きな建物が見えるかね?」

そういつて男は右手の俺らが行こうとしていた方向を指差した。指した方向はさっきまで気がつかなかったが、歩いてきた通りより開けた道になっており、道の中央にはドでかいサーカスのテントのようなものがあつた。通り過ぎる人がなんだろうとばかりにテントに目を向けていた。

「あそこで何かするんですか?」

「もちろんそうとも、我が発明によるすばらしきロボットとの対決ができるのだ」

誇らしげに男がいつて

「ロボットと対決う?」

胡散臭そうに俺は男を見た。

「そう、まあ対決とはいつても決められた範囲内でロボットと一分間戦ってもらっただけだ。戦うとはいつてもロボットの攻撃を防げばいいだけさ、少しでもロボットの攻撃を受けた時点でアウト、負けとなる。もちろんロボットへの攻撃はし放題、なんなら倒してもいいよ、できればの話だけど。ちなみに参加費は一万ユル、勝利すればばお金は戻ってきて豪華なプレゼントつきときた」

簡潔に男がいつて

「ふーん」

俺は全く興味が出ずそれしかいえない。

「今年はまだ誰も成功者いないよ、毎年少しづつ強くなっているからね」

「やる人結構いるんですか?」

俺が訊ねると

「まあ、腕に自信のあるやつはね。毎年の常連さんもいるし、嬢ちゃんなんか二年前二十数秒でロボットをKOしたんだよ。あの時はほんと鬼気迫るものがあつたというか……。栄光ある二年前のチャンピオンだね。いまだにその記録はやぶられてないつての

「がまたすごいところなんだけど」

「さらりと男はいった。」

「ん？ 今、誰が何をどうしたって？」

「俺は隣の嬢ちゃんを見た。」

「お、おじさん、それはたまたまロボットの調子が悪くて、私も運がよかつただけで」

「なんとも慌てふためく彼女。」

「まあ確かにロボットは調子悪かったかもしれないが、運も実力のうちっていうしな」

「男は意地悪い笑みでセラに言い返す。」

「まじ？ とろそうで、口げんかすらいつも負けてそうなのに。い、意外すぎる。っーか、戦うってことは戦うってことだよな……」

「おじさん、戦うって素手、じゃないよな？」

「ああ、別に素手でもいいが、みんなだいたい武器を使ってるよ。ちなみに魔法はなしな。もしかしてやる気になってくれたか？」

「ぱあっとうれしそうな顔をする男に」

「いや、べつにそういうわけじゃないけど」

「俺は目をそらしていった。」

「今回の商品はなんとメリトリア銀だ。どうだ、嬢ちゃんとおそろいのペアリングなんか作ったりしたら」

「話を聞いていなかったように男がいうと」

「あ、私シルバーリングみたいな指輪嫌いなんで」

「セラがあっさりといった。」

「え？ 俺初めて聞いたよ、そんなこという女め。やっぱりセラってちょっと変わってる。」

「そう思い苦笑いしていると」

「少年が心配で嬢ちゃんそんな嘘を」

「男がセラを憐れんだ目を見た。」

「そうなのっ？」

俺が驚いて訊ねると

「いえ、本当に嫌いなんです。シンプルすぎてなんか好きになれなくて」

セラが平然としていった。

「じゃあ、嬢ちゃんのほうが強いからか」

男が冗談でいったであろうその言葉に俺はカチンときた。

「やりますよ」

俺が男を睨むと

「おお、それでこそ男だっ！」

男が喜び、

「そんなげがしたら……」

セラが心配した。

「大丈夫だって」

いらいらしていたので何の根拠もなく俺はセラに笑っていった。

「じゃあ、さっそくテントへ行こう」

男はせかすかのようにそういって、俺は戦うことになったのである。



ああ、どうしてこんなことに。やっぱり悪いのは私だよな……  
・。二年前いくら二人のため、賞品を取るためとはいえ、必死に戦っちゃって顔まで覚えられてるなんて。

二年前、どうしても二人が世界に百個とない有名デザイナーが作ったとかいうペアのぬいぐるみが欲しいと駄々をこねた。もちろん、

彼女は戦わなかったが、というより彼と私が全力で戦いたがった彼女を阻止したのだが、賞品はロボットに勝たないといけないわけで、まず彼が挑むこととなった。結果は、頑張ったのだが惨敗に終わった。それでも欲しがってた二人を見て、特に彼女が欲しがっていたので、ダルコさんと呼ぶという考えもあったのだが、だめもとで私が挑むこととなったのだ。

結果は先の通り。もう無我夢中で挑んだら、勝ってしまっていたのである。

おじさん、なにもいわなくてもよかったじゃない。ひどいよ。でも、二人がすごいほめてくれてぬいぐるみも喜んでくれたのが救いかな。

ところで、……リユファさん、強いのかな？ これでもリユファさんが負けたら私最低だよ、ね。

「……い、……ラッ！」

けがでもしたら、リユファさん働いてるのに。

「おいっ、セラッ！」

彼が私の肩を掴み、ようやくそれで我に返った。

「あ、す、すいません」

謝る私に

「んな心配すんなよ」

困ったように笑う彼。

「で、でも」

そういつて目を伏せる。

私たちは、テント内のステージ、つまりロボットと戦う場所の裏方にいた。いま、おじさんがリユファさんの武器を取りにいつてるところである。

「大丈夫だつて、俺多分そのロボットより強いやつらにいつも相手してもらってるから」

彼はそういつて私に笑いかけた。

「一応ロボットはけがしない程度の攻撃をする設定にしてあるらしいですけど、万が一けがしたら、ユファさん働いてるのに……」

「意外に俺頑丈だから、てかさ、セラは二年前なんの武器使ったの？」

彼のその質問に

「えっと、実は私……」

どうしよう、これ武器の名前いったら、あのことも聞かれるよね。あんまり、いいたくないな。いまだき、魔術師だって使わないらしいし、ほんとうにどうしよう。

「セラ？」

首を傾げる彼。あー、もう、いってしまえ。

「あの、その使ってた武器っていうのはっー」

「おい、持って来たぞー」

リュファさんに打ち明けようとしたまさにそのとき、タイミングよくおじさんがやってきた。

「悪いな、やっぱりダガーはなかった。でも、ロングソードはほらこの通り」

そういって、おじさんは両手いっぱい抱える剣の数々を見せた。おじさんは近くにあった机の上にそれらを置いて

「好きなのどれでも選んでくれ」

「じゃあ、これでいいや」

そういって、彼は手前の装飾があまりこつていない剣をとる。

「そんなあっさり決めちゃっていいんですか？」

私なんか二年前装飾で決めちゃったぐらいだし、人のこといえないけど。

「いいんだよ、こつというのは直感で。それよりさ、さっきから心配ばっかで少しは応援してくれないわけ？」

彼は溜め息をつく。

そういえば私、まだ応援の一言もしてなかった。本当になんて気

が遣えないんだろ。

ふう、私は深呼吸すると

「がんばってくださいね」

精一杯力を込めていった。彼はくるりと後ろを向き

「おう」

そういつてステージへと向かっていった。

No. 24 楽しい祭り（後編）

『頑張ってくださいね』

あれは、反則だよな。あの笑顔で、そりゃうれしくないわけないけど、つい気恥ずかしくなり後ろを向いてしまった。

これはちよつと本気で頑張ってみよう、かな。そう思い、つい頭をかく。

あー、賭けもしてないし、魔法使用でも、どっかの国に生息するめっちゃ強い魔物モンスターでもないのに、ひさしぶりにめっちゃ緊張する。

それでも、思い出してしまうのはさっきの応援。

こりゃへまできねえな。

そう思いながら、一歩踏み出すは明かりまぶしいステージ。その明るさに思わず手をかざす。そして、予想以上に沸きあがる歓声。

おいおいまじかよ。円形劇場のような客席にはほとんどの人がいた。忘れてた。そういや、賭けもしてるつってたっけ。多分、いや絶対、俺のほうが高倍率高いよな、あはは。

ステージは地面より一メートルほど高い場所にある。戦うにしている、結構おおざっぱだな。客との仕切りといえるようなものは段差

以外には何も無い。これじゃ、万が一武器が客のほう飛んでつたらどうすんだ？

疑問が残りながら、だいたいの立ち位置であろう場所に立ち、止まった。

そして間髪いれず

「勇気ある対戦相手はー、なんと旅行者っ！ シェフともこの大戦が初対面だっ」

どこからともなく声が流れた。観客がどつと沸き、のりのいいやつは指笛を吹いてくれた。

「頑張れよー」

「お前に大金かけたんだ、負けたら承知しねえぞっ！」

客席のほうからそんな応援や掛け声が響く。

はいはい。こっちも負けないうよう必死だったの。

「ようやく、準備が整ったようだ。われらが誇る自称アガパンサス一のロボット、シェフの登場だー！」

そしてパンと何かがはじける音がして、ステージが突然白い煙に覆われた。

煙はともかく、シェフって………。さっきから疑問だったんだけど、なんでシェフ？

そして数秒後、

「なるほどね」

俺は一人納得した。

数メートル前に表れたのは、高さ一メートルほどの卵形のまん丸とした青い物体。頭にはモヒカンのような黄色の毛、黒い大きな瞳に、ドでかいレモン色のくちばしに水かき。そして、料理人のようなコック服に右手といえるような場所に巨大なお玉、左手といえるような場所にはこちらも料理用ではなさそうなフライパン。手は水かきではなく尖った細長く平べったい三角形とでもいえるのか、そんなものがお玉やフライパンの柄に巻きついていていた。

ロボットとは思えないふさふさの青い体毛、といえはいいのか、

よくできてるもんだ。

感心していると、縄か何かが切れる音がして

「へっ？」

どしんといきなり巨大な鉄格子の箱のようなものがステージの頭上から落ちてきた。それはつまり、絵的にいうと俺とシェフは罠にはまり囚われの身となった獲物といったところで……。なんとまめぬけというか、でもこうすれば客には危害は及ばないな。

縦横に組まれた、鉄という鉄。ん？ でもおっさん、ステージを出たら失格とか何とか……？

「今回はその鉄柱に触れたら失格だ。あとは例年と一緒にシェフの攻撃を武器以外で受けても失格、あとは一分間で逃げとおせるか、運良く倒せたら栄光ある勝利が待っているぞ」

またどこからともなく声がいった。なるほどね。

「じゃあ、準備はいいかい少年っ？」

姿なき声に、俺はしつかりとうなづいて見せた。そして、左越しに持つ剣の柄に右手を軽くそえる。相手も、お玉とフライパンを音を鳴らしてクロスさせた。……、なんか緊張感あるような、ないような。そう思いながら、集中を途切らせずにいた。

「では、開始っ！」

待ちに待ったゴングが鳴った。その瞬間、相手がいきなり突っ込んできた。

予想はしてたけど、なかなか速いな。そんなことを思いながら、俺は鞘から剣を素早く抜き、もちろん突っ込んでくる奴に向け横に一振り振る。

剣は空を切り、奴はというと後ろに後退していた。こりゃ、攻撃を防ぎきって勝つのはできそうだ。でも、問題は……、セラは一体どうやって二十秒で勝ったのかね？

そう思いつつ、俺も相手に攻撃を仕掛ける。相手は避ける気配はなく、俺は相手の攻撃に注意しながらモヒカンめがけて剣を振りおろした。奴は、フライパンで剣を受け止め、お玉で俺を狙ったが

「こんな遅い攻撃ドレットの足元にも及ばねえな」

ラナ語でそういうと俺は剣を戻しお玉を交わした。  
続いて硬そうなフライパンが俺の顔面めがけてシエフの手から飛んでくるが

「こんなのルカのナイフに比べりゃこわくともなんともないね」

またそうラナ語でいって、俺が左にそれるとフライパンは俺を無視して鉄柱に当たる。当たったところはぐにやりと曲がってしまった。さすがというか………避けて正解だったな。

シエフは残ったお玉を振り回しながら、

「たたきにくれるわー」

なんとも機械的な声を発し頭構わず突っ込んできた。俺はお玉に気をつけながらできるだけ相手を近づけさせて

「よつと」

ぎりぎりのところで右にそれた。そして、後ろに回りこむ形となり、無謀な背中に剣を振りおろしたまさにそのとき

「終了ーっ!」

叫ぶような声とゴングの音が鳴り響く。観客席からは、喜びの声と嘆きの声の両方が入り混じる。

あーあ、時間制限あるのすっかり忘れてた。

俺はぎりぎりのところで剣を止め、シエフの体毛をきらずにすんだ。俺は剣を鞘に戻すと、シエフはくるりと踵を返し

「ありがとうございます」

ひれのようなコバルトブルーの手を差し出した。

「じちらんぞ」

俺はにっこり握手した。



勝利っちゃ勝利だけど素直に喜べねえな……。

ステージ裏に戻りながら、俺は思った。毎年強くなっているとはいつても、あんな隙ない奴にセラはどうやって勝ったんだよ？ほんと奇跡としか思えない。

そっついや、セラって結局何の武器使ったんだ？それよりも、そもそもセラは使用人なんだよな？一体どこで戦い方学んだんだろ？いくらなんでもアレに素人が勝てるわけない、よな……。

なんだってあのセラが？

ふに落ちないままステージ裏に来ると

「お疲れ様です」

第一声はそれだった。

「ああ」

俺がテーブルに剣を置くと

「どこもけがしませんでした？」

大きな瞳が心配そうに見つめる。

「見ての通り、無傷です。それにしても、あんなのによく二十秒で勝てたな」

ほんと、気がかりでしょうがない。

「まぐれですよ。それに、……今とはいろいろ違ったんです」

目を細めながらセラがいった。その姿はどこかさびしそうに思わせる。

やっぱり、二年前のほうが弱かったてことかな？ 変に気を遣わせちゃった、か？

そんなことを思っているよ

「かつこよかったですよ。戦っているとときのユファさん、いつもと別人みたいで。あらためて、おめでとうございます」

セラがさっきとは打って変わって明るく笑顔でいった。

「そりやどうも。……ところでさ、セラって誰かに戦い方習ってたの？」

俺は何気なく自然を装い訊ねた。

「私のことより、ユファさんこそ誰かに指導されてたんですか？」

あ、やっぱり仕事上とか？」

しかし、セラから帰ってきたのはそんな言葉だった。もしかして、さけられた？ そんなことを思いつつ

「んー、まあ、そんなとこかな。最初は縁あって凄腕のおっちゃんたちに少しだけ教えてもらって、そのあとは我流で仲間と遊びがてら鍛えてたといえればいいんだか」

「へえ、そうなんですか。あ、そういえばお金返してもらいに行きましようよ。あと、賞品も」

セラが俺にほほ笑み

「え？ ああ、そういや参加費も勝てば返してもらえるんだっけ」  
思い出したように俺がいう。

「はい、だから行きましよう？」

「そうだな」

そういつて俺たちはおっさんのところに向かった。

やっぱり、さっきはさけられたな、セラにしちゃうまい具合に。

まあ、いいたくないこともあるよな。俺だって………こいつにも、ドレットたちにも肝心なこと伝えられてないし。というより、誰にもいわないつもりだったからな。墓場まで持つてくつもりだったってのに。

右横にいるセラに顔を向けると、セラが俺の視線に気づき俺にほ

ほえむ。俺もつい自然に笑い返した。

そうだ、別にいいじゃないかそんなこと。勝てたんだし、セラも祝福してくれたし。セラが俺よりすごかったからって、男の立場とか、そんなくだらないこともどうでもいい。今は、とりあえず楽しもう。なんてったって、祭りなのだから……。

よ、よかったー。リュファさんけがしなくて。

彼の隣でこっさりほっと胸を撫でおろす。

それにしても、まさか本当に勝っちゃうなんて。いや勝ってくれなきゃ困ったんだけど。でもやっぱり、私の記録は塗りかえられな

かったか。ちょっと期待してたんだけどな、やっぱりあのときは必死だったから……。仕方、ないよね。

そう、今とは違かった。二人がいて、すごい幸せで、なんだって二人のためなら頑張れる気がした。大切な人譲りのこの力と戦術。ちよつど体調が万全だったせいもあるけど、魔法が使えなくてもある意味二人の応援もあり百人力だった。

だからあんな奇跡的な結果出せたわけだけど、運がよかったものもあるけど、やっぱりリュファさん嫌だよな……。自分より強いというかすごい女って。そりゃ今は腕も鈍ってるし、彼のほうが強いに決まってるけど、この戦いだけ見たら、やっぱり私最低だな……。

それにさつきはごまかしちゃったしな。やっぱりまだ、彼にはこの力のことは知られたくない。屋敷だって、知ってるのは二人と旦那様と奥様、それにダルコさんくらい。約束もある、いくらリュファさんとはいえむやみにいえない。ごめんなさい、リュファさんな」

気がつけば、もうテント出入口のカウンターのところにきていた。

「いや、まだまだですよ」

彼が溜め息混じりにいって

「さあ、参加費と賞品だ。おめでとう」

おじさんはそういつて小さな麻袋と一万ユルを彼に手渡した。

「これが例の？」

リュファさんが麻袋をしげしげと眺め

「ああ、本物だぞ。普通に買えば参加費の十倍はする。まあ、嬢ちゃん指輪はお気に召さないらしいからなにか他のものにしてやりな」  
おじさんがからかうようにいった。

「ああ、まあ」

リュファさんが頭をかきながらいうと

「私のことはいいですよ、ユファさんのものなんですからユファさんが自由に使ってください」

慌てふためいて私はいった。

じよ、「冗談じゃないよ。おじさんやめて、リュファさんに悪いというか、リュファさんだって困るじゃない。」

「まあまあ、そんなこといわずに。嬢ちゃんは少年に感謝のキスでもすればいいんだしさ、なんか作ってもらいなよ」

おじさんのその言葉に私は固まってしまった。

き、キスって……。それじゃまるで

「そんな、付き合ってるわけじゃないんで」

私はリュファさんに申し訳が立たず、そう呟いた。

『まあまあ、そんなこといわずに。嬢ちゃんは少年に感謝のキスでもすればいいんだしさ、なんか作ってもらいなよ』

『そんな、付き合ってるわけじゃないんで』

はあ、おっさん余計なこといいやがって。

セラのいったことは間違ってる。でも、困った顔であっさりそんなこといわれると、なんだかなあ……。

おっさんもセラのそれには、意味ありげな顔を俺に向けてるし。俺はなんとも気まずい表情で答えるしかないし、あーもう。なんだってんだ？

結局なんともいえない状況のまま、俺とセラは通りに戻っていった。

き、気まずい。

テントを離れてから会話といった会話はなく、ただもくもくと出店が並ぶ通りを進んでいた。

私がさっきあんなこといったせい？ いや、考えすぎだよ。それに嘘ではないから、そのことで謝るのも変だし。

ちらと右隣のリュファさんを見る。するといきなり

「なんだこれ？」

リュファさんは、ある出店の前に立ち止まってその商品を見た。

私はそれを見て

「ああ、カキ氷ですね」

「カキ氷ってだってこれ、普通のと違う……」

彼のその指摘に私は苦笑してしまう。確かに普通のカキ氷とは違う。

「だって、豆とか入ってるぞ？」

「これはアガスの南西部が発祥のカキ氷なんですよ。あつちじゃ、一個のカキ氷にシロップを五色などかけてカラフルにして、回りにナッツなどの豆類も乗せるのが一般的なんです。男の人は苦手かもしれないですけど、私は好きですよ？」

私がそういうと

「食べる？」

彼がほえんだ。

「えっと、いいですよ。食べられる自信ないんで」

私は苦笑いしながら断った。

そうだ、今まで食べた分普通のカキ氷よりサイズも大きいので食べられるわけがない。

「いいよ、残ったの俺が食べるから。すいません、おばさんこれ」

「つください」

彼はそういって、注文してしまった。

「やっぱり、なんでこんな優しいんだろう？ 気を遣うのがうまいというか……。嬉しいけど、申し訳なくなってくる。それに、私が口つけたもの嫌じゃないのかな？」

「はい」

そういって、私にカキ氷を差し出す彼。

「ありがとうございます」

それでもやっぱり食べたいものを食べられてつい嬉しくなる。でも、さすがに残ったのを食べてもらうわけには、いかないな。

「ユファさん、あの、もしよかつたら一緒に食べませんか？ 私左側食べるので、ユファさんは右側お願いできませんか？」

私の提案に

「わかった。じゃあ、カキ氷は俺が持つよ」

彼は同意してくれ、かき氷を左手に持ち私たちの真ん中に持った。

「じゃあ、いただくとするか」

「はい」

私はまず彼の反応を見る。

「あれ、意外にいける……。この組み合わせなんだかなあ。って思ってたけど、結構いいな」

「よかつたー」

私が安心すると、空で大きな音が立て続けに鳴り響いた。

「なんか、急に花火の数多くなったな」

「彼がぼそりという」

「思えばもうお祭りも終盤ですから。いつも終わりはこんな感じですよ」

「気がつけば時刻は八時半を回っていた。」

「ふーん、あ、あれアガパンサスかな？」

彼は空を見ながらいった。



「あー、そうですね」

空に浮かぶは白と青紫の光。それが消えるとまた次々と花火が打ち上げられる。

花火に見とれていると

「セラ、危ないよっ」

いきなり彼のほうに引き寄せられた。彼は、右手に力キ氷を持ち替え左手は私の左肩にそえられていた。

「あ、すみません」

彼がいなかったら、いろんな人とぶつかるところだった。

「ほんとに変なところ抜けてるよな」

呆れる彼。続けて

「まあ、それがセラらしいけど」

思いがけない優しい顔でいう。思わずその貴重な表情に見入ってしまった。

空ではいくつもの花火が色鮮やかに打ち上げられていた。

「あーあ、もう終わっちゃうね」

ルカが巨大な肉ボールを食べながらいって

「はあ、これから仕事かあ」

トレンツが深い深い溜め息一つ。

「そーいや、リユファスどうしてるかなあ？」

ルカがぼそりつぶやき

「まあ、うまくいって花火終わったら帰ってくるに千ユル」

トレンツが苦笑い。

「結局何も進展なく帰ってくるに五千ユル」

ルカが呆れながらそういとうと

「絶対泣かしたにもしくは泣かすに一万ユル」

ハシントが花火を見ながらめんどくさそうに一言。

「俺はー、絶対相手の子泣かしてー、でも近いうちにあいつが俺た

ちにその子紹介するに十万ユルツ！」

ドレットがさも明るくいとうと

「おいおい」

ハシントが顔を引きつらせ

「はあ？」

「はい？」

トレンツとルカがわけがわからないとばかりにいった。

「あのへタレがんなことするかよ」

トレンツがほとほと呆れると

「どうかなー」

ドレットがにやりと笑った。

「もう、何もやり残したことない？」

リュファスがセラに訊ねた。花火を見ていたセラは

「はい、今日はごちそうさまでした」

さも満足気にいう。

「どういたしまして」

リュファスがそんなセラを見ていった。

「あつ！ もう少しで最後ですね」

セラが空を見ながらいつて、リュファスも空を見る。

空に何発もの色鮮やかな花火が一気に上がり、たくさんの人が立ち止まり空を見た。花、星、流星群のようなものから、独特の個性溢れるものまで次々に上がっていく。そして、ドンツと通常よりも大きな音がしたかと思うと、空の一番高くに青紫色のアガパンサスの花が咲いた。他のものより余韻が長く、きらきらと輝く。

「あれが、最後か・・・」

リュファスが独り言のようにいつて

「はい・・・」

セラが最後の花火から目をそらさずつぶやいた。

終わっちゃった……。

私は隣の彼を見た。もう、彼ともお別れか。久しぶりに楽しかったな。

そっだ、ちゃんとお礼いっておこう。

「ユファさん、今日は本当にありがとうございます」  
ほんとにもう感謝の言葉しかない。私がそういうと

「セラ、このあとどうする？ 帰る？」

彼は私のほうを向き真剣そつな顔で訊ねた。

「え？ はい、ユファさんにも会えましたし、そのつもりだったんですけど」

「あのさ、このあともし何も予定がないなら、今日約束してた公園に行かないか？」

ユファさんは頭をかきながらいった。

「別にいいですけど……」  
どうせひまだし。

でも、どうしてかな？ もう用はすんだと思うのだけれど、まあ  
いっか。

「じゃあ、行こうかって……どうやって行けばいいんだ  
？」

今自分たちがどの位置にいるのか把握できていないだろう彼がい  
う。

「案内しますよ。ここからなら徒歩でも一応行けないことはないで

すけど、二十分は歩きますよ。列車使っていけば、十分くらいでいけるとは思いますけど、どうしますか？」

「んー、俺は歩けるならそれでいいんだけどさ、セラ足疲れてない？」

彼が心配そうにいった

「大丈夫ですよ、歩いていきましょう」

私が首を横に振っていった。

「じゃあ、案内頼むよ」

「はい」

そして私たちは中央公園に向うこととなった。店じまいする出店が立ち並ぶ通りから少し外れた通りになる。私はふと、反対側の通りにある公衆電話に目がいった。レンガ造りの通りにあったデザイン公衆電話。

。そうだ、一応電話しとかなきゃ、心配してたら悪いし……。

「すみません、ちょっと電話して来ていいですか？」

私はリュファさんに顔を向けた。

「ああ、じゃあここらへんで待ってるよ」

「ありがとうございます、すぐ戻ってきますね」

そういって私は駆け出した。

「もしもし、セラフィーナですがー」

そういって電話をかけて出た相手は

「セラフィーナッ？ どうしたの電話なんてかけて、なにかあった？」

案の定ブリギッタさんだった。やっぱりもう帰っていたらしい。

「はい、実は途中でイノセンシオ様とはぐれてしまって」

「まあ！ 大丈夫だったの？」

ブリギッタさんの声は本当に心配していた。

「はい。それで、もしイノセンシオ様が帰ってきて私のことをもしお探しになっていらっしやったら……」

「ええ、大丈夫だって伝えておくわ」

「ありがとうございます、それと私少し用事があったて帰りは遅くなるかもしれませんが、十一時には帰るので心配しないでください」

「大事な用事なの？」

「……はい。でもできる限り早めに帰ります」

「まあ、あなたもそこまで子供じゃないし、別にいいけれど。気をつけて帰るのよ」

「はい、では失礼します」

そう私がいつてから、ブリギッタが電話を切ったのを確認して私も受話器を置いた。

あとは、帰ってイノセンシオに会ったら謝らないとな。せつかく誘ってくれたのにはかわらないし……。悪いことしたな。

でも、これでよかったよね。やっぱり、イノセンシオと一緒に祭りに行くべき相手は私じゃない。彼女だ。

イノセンシオをダルコさんが一人にするわけないし、大丈夫だっただろう。

公衆電話から出て、彼のほうを見た。いったとおり、待っていてくれた。

今は、忘れよう。今だけは、忘れたいよね。

そう思いながら、私は彼のもとに向かった。

『あのさ、このあともし何も予定がないなら、今日約束してた公園に行かないか?』

断られたら、もうどこか近くの人気のない場所でセラにいうしかないと思った。

冷静に考えれば、俺最低なことしようとしてるんだよな。こんな



に楽しんでくれたのに、俺こいつを裏切るようなことするのか……

今なら引き返せる。心の中でくすぶっている何かがある。そうだった。

でも俺は………。

やっぱりこいつをどうにかしてやりたい。もし本当にあの話が偽りじゃないなら、やっぱり避けられない。

セラの本当の気持ちを知らなきゃ始まらない。それは彼女にとって、酷なことかもしれないけど、でも………このままじゃ行けない気がするんだ。

おせっかいでもいい。やっぱり言おう………。

「お待たせしました」

電話から戻ってきた彼女がいった。

「どこにかけてたの？」

俺が気になっていたことを訊ねると

「ちよっと、勤め先に………。帰り遅くなるって伝えてたんです」

少し困ったようにいう彼女。  
なるほどね。

「住み込みってのも、大変だな」

俺の正直な一言に

「まあ、そうですね。でも、慣れれば結構楽しいこともありますよ」  
セラは笑った。

ああ、俺は本当に今からこいつを困らせるんだな。セラの笑顔を

見ながら、胸が痛んだ。

でももう、引き返せない。

俺は一步一步、歩みを進めた。

公園に着いたのは、九時半ごろだった。昨日にまして、装飾やイルミネーションで輝かんばかりの公園にセラはどこかうれしそうに思えた。

公園内には、祭りが終わって帰る人たちや、祭りの余韻に浸る人たち、とりわけカップルばかりが目についた。

俺はなるべく人のいない、人が通らなそうな道から少し外れたベンチを選び座った。もちろん右隣にはセラが座る。右後ろのほうにある灯りがぼんやりとベンチを照らし、眼前には少し遠くにある池の端が広がっていた。

「不思議なものですよね……」

セラはいきなりそういった。

「え？」

俺はセラのいいたいことが分からずに、聞き返すようにいう。

「つい昨日あんな出会いをしたのに、今日偶然お祭りであって、今こうしてここにいることが不思議でしょうがないんです」

セラが池のほうを眺めながらおだやかにいった。

「そう、だな」

それには俺も同意する。

セラは知らないけど、俺のほうが絶対そう思ってる。なんてったって、偶然にも俺たちはあの事故の被害者で同じような境遇を辿ったのだから。

「そつえば、もう明日あたりにはこの国から出て行ってしまっただけでいい？」

セラが思い出したようにいった。

「ああ……」

「ユファさんに出会えて、いろいろ楽しかったです。もう二度と会うこともないかもしれませんが、お元気で。って、まだはやくかったですね」

何も知らずにいう彼女。

ああ、俺本当にひどい奴だな。

「ユファさん？」

左拳を硬く握った。

「セラ、ごめん。俺、知っちゃったんだ。セラのこと」

やっぱり間違っているのかもしれない。でも………。

俺は、歯がなくなるんじゃないかと思えばかりに歯を食いしばった。

「あの屋敷で働いてるって」

でも、俺、お前の本当の気持ちを知りたいんだっ！

No.26 知られてしまった事実

『セラ、ごめん。俺、知っちゃったんだ。セラのこと』

え？

『あの屋敷で働いてるって』

う、そ………。

それだけでもう十分だった。彼に知られてしまった。屋敷のこと  
も、そして彼の<sup>イノセンシオ</sup>こと………。

「セラ？」

彼のほうを向かなくても、彼が私のほうに顔を向けているのがわ  
かった。

なんだろう？ 胸が苦しい………、呼吸が辛い………  
。目からもあつい何かが込み上げてくる。

「セラ、俺………」

もう、だめっ………。

私はベンチから立ち上がると、すぐさま駆け出した。

「セラッ？」

後ろから彼が追いかけてくるのがわかった。

私は彼に構わず走り続ける。大丈夫、走りは自信がある。走りには………。

そう思っていた矢先、左手首を何かが掴んだ。

「離してっ」

私は振り返ることなく言い放った。

「待ってくれ、話を聞いてくれっ！」

「いやっ、聞きたくないっ、聞きたくないのっ！」

そういうと私の中のかなかが決壊した。とめどなく涙が溢れ、私は手首を握られたまま地面に跪く。まるで子供だな、そう思いつつも力が出なかった。

彼は手首を掴んでいる力を緩めると、ゆっくりとしゃがみこんだ。つい昨日出会った人。最悪な出会だった。

でも、やさしくて、どこか憎めない人。久しぶりにたくさん喋って、同じ時間を過ごした人。もう二度と会うこともないだろう、だからこそどうかいい別れをしたかった。いい思い出にしたかった。私の今の現状なんて知らずに別れたかった。そう思っていたはずなのに、どうして？

そう思えば思うほど、涙が頬を伝う。

「セラ………」

もう何も聞きたくなかった。だから、両手で耳をふさいだ。そん

なことをしても、無駄だと思いながら、そんなことをせずにはいられなかった。

ふと、もう軽くそえられているというような彼の手が冷たくなつていく気がした。そして、彼は深く息を吐くと

「俺も、俺も同じなんだ。俺も、あの列車事故で両親を亡くしたんだ」

え？ 私は耳を疑った。涙を拭うことなく、彼を見る。彼は沈痛な面持ちで地面を見つめていた。涙は出ていないものの、今にも泣きそうに思えた。

「俺たちは、後部車両に乗ってた」

「たちつて、もしかして……」

「ああ、俺もいた。俺も乗ってたんだ。俺は偶然助かった、でも両親は死んだ」

まさか、こんな偶然って……。

「びっくりした。セラも俺と同じって知って。こんな偶然あるなんてな」

ふっと笑っていったが、その声はどこか震えている気がした。

いつてしまった・・・。。。。これでもう、後戻りはできない。

俺は何かがおかしいことに気づいた。セラから何も反応がない。

「セラ？」

心配になり、思い切ってセラのほうを向いた。俺のこと睨んでいるだろうか、そんな考えが頭をよぎる。

セラを見て、俺は唾然とした。顔は怒っても、悲しんでもいない無表情。でも、目からは涙が溢れ落ちていた。

その姿が俺の胸を突き刺した。今更ながら、俺はひどいことをしてしまったと改めて思わせられる。

それでも俺は

「セラ、俺・・・。。。。」



そういいかけたときだった。セラはいきなりベンチから立ち上がると、さっそうと逃げるかのように駆け出した。

「セラッ？」

俺は考えるまもなく追いかける。

ちくしょ、なんでんな靴で、んなはえんだよ。

それでも俺は必死においつき、右手で左手首を掴んだ。

「離してっ」

セラはあかんかぎりの力で抵抗する。それでも、俺は離さなかった。

「待ってくれ、話を聞いてくれっ！」

「いやっ、聞きたくないっ、聞きたくないのっ！」

そういきりたつていう彼女。呼吸がどことなく荒い。

まもなく彼女はその場に崩れ落ちた。

『やめろーっ！』

セラの姿が、あのときの俺と重なる。どうしようもできなかった、

あの頃。なんで今頃思い出すかな……。

でも俺は、救われた。あいつが、俺に救いの手を差し伸べてくれた。

俺はセラの手首を掴む力を緩めた。そしてしゃがみこむ。

「セラ……」

セラは俺の話など聞きたくないとばかりに、首を振って耳をふさいだ。

俺があいつみたいに他人を救えるとは思っちゃいない。俺は、あいつにはなれない。だけど、……こいつをこのままにはしておけない。

馬鹿みたいだが、体が震えた。落ち着け。俺は深呼吸すると

「俺も、俺も同じなんだ。俺も、あの列車事故で両親を亡くしたんだ」

言ってしまった。ずっと、胸のうちに、奥底に秘めていたこと。ついに、言ってしまった。

仲間にも、ドレットにもいえずにいたこと。いわないでおこうと思っていたこと。

後悔してないなんていつたら嘘になる。でも、でも、少しだけ肩の荷がおりた気がした。今まで自分が守り通そうとしていたものが急にすごくくだらないものに思えてくる。

セラの顔を直視できなかった。でも、彼女が自分のほうを向いているのは分かった。

もうこうなったら、すべて洗いざらい話してしまおう。もう、十分だ。十分俺は……。そうだ、楽になったっていいじゃないか。本当は心のどこかでそう望んでいたはずなんだ。すべて何もかも投げ出して誰かに全部ぶちまけてしまいたかった。

でも、できなかった。なにかがいつまでも、今日までそうさせた。

そっか、そうなんだ。俺はそこでようやく気づいた。俺はずっとこの日を、同じ境遇のものを待ち望んでいたのか。セラなんだ。俺があのかを告白できるのは。こいつしかいないんだ。

初めて見たときから、なにかひっかかるものがあった。それは言葉ではうまくいえないけど、もしかしたらやっぱり、俺たちの出会いは偶然かもしれないけど、運命ってやつなのかも知れない。

俺の中の何かが完全に吹っ切れた気がした。

「俺たちは、後部車両に乗ってた」

自然と言葉がこみ上げる。

「たちつて、もしかして……」

セラは涙が伝う目を丸くした。

「ああ、俺もいた。俺も乗ってたんだ。俺は偶然助かった、でも両親は死んだ」

俺は偶然助かった、でも両親は偶然死んだ。心の中が冷え切っていく気がした。

「びっくりした。セラも俺と同じって知って。こんな偶然あるなんてな」

自然に笑おうとしたが、不自然に皮肉めいた笑いになってしまった。

これで完全に彼女とつながった。彼女も知ってしまった。

四年前、火の海と化したあの列車に俺たち二人が偶然に乗ったというのを。

「……とにかく、本当にごめん。勝手に知られたくないこと知っちゃって。俺がセラだって本当に嫌だと思う……。今、自分が最低なことしてるのは分かってる、でもどうしても話を聞いて欲しいんだ」

リュファスが懇願するようにいった。

セラフィーナは、涙を流しながらリュファスを見る。リュファスはセラフィーナから目をそらさなかった。その真剣な眼差しに、セラフィーナはこくんとうなづいてみせる。

リュファスは力が抜けたかのように

「ありがとう」

少し安心するそぶりを見せた。そして、自分の服のポケットというポケットを探る。しかし、ポケットからは何も出さず、頭をかきながら

「あー、ごめん。ハンカチも、ティッシュもないや」

ばつが悪そうにいった。

セラフィーナはそんなリュファスに首を振り、バックからハンカチを取り出して口を押さえる。

「さすがにセラは準備いいな」

ほめるかのようにリュファスがほほ笑んだ。セラフィーナは返事の代わりに、リュファスを見る。

「ここじゃなんだし、ベンチに戻るっ？」

リュファスは立ち上がると、左手を差し伸べた。セラフィーナは、なみだ目で左手をじっと見てから、ようやくリュファスの手をとる。

彼が優しくひっぱり、立ち上がるのを助けてくれた。

右手を握る手は、今まで彼とつないだ中で一番優しかった。さっきまで少し冷たかったのに、今はすっかりあたたかい。

歩く早さも、自分にあわせてくれているのが分かった。

やっぱり、彼は優しい。いくら自分の秘密を知られてしまったからといって、どうしても彼には信じられる何かがあった。こんなことがあっても、優しいと思わずにはいらなかった。

二人は、座っていたベンチに戻った。リュファスが左側、セラフ  
イーナが右側に座る。

「いつ、いつから知ってたんですか？」

セラフイーナがようやく口を切った。泣き腫らした目で左を向き  
「もしかして……、最初から？」

リュファスを見つめた。リュファスは首を横に振り

「いや、初めて逢ったときは本当にセラフのこと何も知らなかった。  
知ったのは、昨日の夜だった。今回依頼されてた仕事で、俺は担当  
じゃなかったんだけど、たまたまセラフのことを耳にした」

「そうですか……」

セラフは視線を落とす。

「どう、思いました？」

セラフイーナが遠くを見るような目でつぶやく。リュファスも池  
のほうを見ながら

「……びっくりした。そうだな、ショックだったな。まさ  
か、セラフがそんな辛い日々送ってるなんて知らなかったから。知ら  
なかったとはいえ、俺セラフにはひどいことだったよな、ごめんな」

正直に謝る。

それにセラフイーナは首を振って

「いいんですよ、ユファさんは悪くありません」

はつきりといった。続けて

「……もしかして、やっぱり今日私のこと連れ出してくれ  
たんですか？」

「え？」

リュファスは首を傾げる。

「いえ、もしかして今日彼と来ているの知ってて連れ出してくれた  
のかなって……。でも、本当にお仲間から離れるためだっ  
たみたいですね」

セラフィーナが優しく笑うと

「……そっか、今日一緒に来てたんだ。もしかして、俺セ  
ラに余計なことしちゃったかな？ 俺が勝手に連れ出しちゃったと  
はいえ、セラはあとあと困るよなー」

失態をおかしたようにリュファスがいう。そんなリュファスを見  
ながら

「いいえ、むしろ助かりました。実は、仕事が急になくなったのは、  
彼が仕事先の人々を休みにしてお祭りに行かせるようにしてくれ  
たからなんです。それで彼と一緒に来てたんですけど、やっぱり私  
は彼と一緒にお祭りにいるべきじゃないって思ってたから、リュフ  
アスさんに会えて一緒にお祭りを見て回れてよかったです。本当に  
感謝してます」

セラが軽くおじぎした。リュファスはその言葉に

「……セラ、答えたくないなら答えなくていいから、聞い  
てもいいか？」

ためらいがちにいう。それにセラフィーナは

「はい」

決心がついたかのように笑っていった。

「セラ、そいつのこと好きなのか？」

リュファスが気まずそうに訊ねたその言葉に、セラフィーナは予  
想もしなかったことなので驚く。そして、困ったような笑顔で首を  
横に振った。

．．．．．よかった。ハシントのいつてたことは、あらかた嘘じゃなさそうだ。

俺はひとまず安心した。もし、これでこいつが首を縦にでも振ってたら．．．．．。そう思うと、なぜだか全身に寒気が走る。

なんでだろう？ やっぱ是が非でもセラをそいつから離さなければ行けない気がしてくる。そんな得体の知れない不安が俺を襲った。セラをこのままにしておけば、何か取り返しのつかないことがセラに起きる気がしてならない。

今は深く考えるのはよそう。とにかく、まずはセラの気持ちを確認かめてからだ。ここから、アガパンサスから出て、自由になりたい



か、それを確かめなくちゃいけない。

「それにしても、まさかリユファスさんもあの列車に乗ってたなんて、本当にびっくりしました」

セラが目を細めながらいう。

「俺もまじ驚いた、セラも同じだって知って。まさか、こんな偶然あるなんて思ってもみなかった」

本当は驚いたところじゃない。心臓が止まるかと思ったほどだ。

「そうですね……」

セラファイーナが感慨深そうにいつて、続けて

「もしかしたら、四年前私たち会ってたのかもしれないね」

前を向いていつた。

「そうだな……」

そうだ、セラのいうとおり、もしかしたら四年前会っていたのかも知れない。お互い、記憶にないだけで。でも、この珍しい髪色は見た記憶はなかった。見たらいくらなんでも、覚えていると思うし。

「俺さ、今の自分は全部四年前から始まった気がしてならないよ」  
ぼそりと独り言のようにいつ。

「私も、そう思います。すべては四年前から始まったんじゃないかって……」

セラはそういつて目を閉じた。

そう、すべては四年前から始まった。俺も、間違いなくセラも、四年前のあの事件で運命を大きく変えられた。あの事件からすべて

は変わったのだ。あの事件によって、すべてが始まった。

「なあ、ちょっと昔の話してもいいか？」

そこで俺はようやく肝心なことを切り出した。

「あの、無理していわなくてもいいですよ」

ところがセラからはそんな意外な言葉が返ってくる。

「どうして？」

心配そうな瞳を見つめ返して訊ねた。

「だって……。ユファさん、さっきからずっと辛そうな目をしているから」

セラがいいにくそうに話す。

俺は自分の情けなさに泣きたい思いだった。今から助けようと思っ  
ている奴に、逆に心配されて、ふがないっいたらありやしない。

「心配しすぎだよ」

俺が笑って誤魔化すと

「でも、どうして私なんですか？ どうして私に大切なこと話して  
くださるんですか？」

セラの瞳がじっと俺を見つめた。

「セラに、聞いて欲しいんだ」

俺は答えになっていないような返事をする。加えて

「それに、セラは俺に大切なこと正直に話してくれた。なのに俺は  
セラにまだ肝心なこと話していない、それってフェアじゃないだろ？  
それとも、昨日の話は嘘だった？」

俺が少し意地悪そうに聞くと、セラは首を横に振った。俺はそれ  
を見て

「だから、聞いてよ。な？」

セラにできるかぎりほほえんだ。セラは迷っているようだったが、  
数秒後

「はい」

俺に優しくほほえみかえす。

そして俺は語りだした。

空では、ところどころ小さな星が光り輝いていた。

「俺は、前にもいったけど、ジュレ地方で生まれた」

ジュレ地方、アガパンサスの北西部に位置する。

「国境近くじゃないけど、結構北部のほうに住んでた。寒いところ  
で、ってセラも同じか……」

俺が笑ってというと

「そうですね」

セラがほほえんだ。

「普通に馬鹿やって育ったよ。列車に乗ったときは、四年前だから、  
十四いや三か。<sup>コレジュ</sup>中学三年の夏休みで、親と久しぶりにあの列車で旅  
行に行く途中だった。……俺の親は完全な駆け落ちで、そ  
んなだから二人とも共働きでさ、なかなか旅行なんていけなかった  
から内心結構楽しみにしてた」

少しくすぐったくて、思わず髪をかきあげる。

「そうだったんですか」

セラが目を細めながらいった。

忘れよう、忘れてしまえばいい……。

ずっとそう思っていた。

でも、一つ一つ思い出そうとすればするほど、鮮明に記憶がよみがえり、自然に言葉が出る。

こんなに、自分があの過去に執着していたとは……。。。。  
れだけ、あの過去に縛られていたかしみじみと実感する。

「リュウツ、勝手にどこかにいかないでっ」

周りの人に迷惑にならない声量で、ババアがいった。

「うるせーな」

俺はそういうと、ジジイが助け舟を出す前にさっさと進行方向の車両に向かう。

俺が記憶にある限り、久しぶりの家族旅行だった。俺が物心つくころは、何回かどっか行ったらしいけど、そんなの俺の中で旅行に行っただちに入らない。

小学校低学年まで、みんなどこかしら遠出したら当然のように周りに報告した。首都に行っただとか、有名な観光地に行っただとか・・・。それをきいたやつらは、楽しかったか聞か、または自分もそこに行っただことがあるという。正直うんざりだった。長い休みの前後は特にそう思った。本当に幼いころは、それがなんなのか言葉にできないまま、涙は出なくても感覚的に寂しい気持ちでいっぱいになった。

うんざりしたといえば、授業参観もそうだ。共働きの両親、当然来てくれたのはみんなより少ない。俺は参観日とかの連絡の重要なプリントもそうじゃないのも、帰ったらゴミ箱に入れていた。別にこれには深い意味は特になかったけど、なんか捨ててしまう習性があった。それを読んだのか、親にちゃんとそういう重要な行事とかのプリントが渡されたのか知らないが、母親は参観日が行けない日にはいつも決まって、前々に俺に行けないことを謝った。

当然、寂しくないわけはなかったけど、そういうのは慣れてくるわけで、小学校高学年になると親にこんなん仕事休むなといえるほどになっていた。そしてプリントも学校で捨てるようになった。

でも、そんな俺でも、さすがにこたえたものがあった。それは、

通常の参観日とはまた違った授業参観。小学校高学年、担任がある日、今やっている授業はいいものだから、都合のいい親御だけでも授業に来てもらおうと勝手に授業参観をした日があった。都合がいい、まあ来たくないなら来なくてもいいってわけだったが、それでもやはり馬鹿な息子娘たちのために馬鹿な親は来る。もちろん俺の親は来るわけがない。その授業中、俺は久しぶりに胸にぽっかり穴が開いた気分だった。んなことしやがって、このクソ教師って思ってたもんだ。

その担任、小学校高学年を二連続で俺の担任を勤めたわけだが、俺の通ってた学校は一クラスしかないなんと貧相な小学校で、二年目の家庭訪問でこんなことを言い出しやがった。去年一度会ってることですし、今年やらなくてもいいという親御さんは家庭訪問なしにしましょうという、なんともユニークな手を使ったのだ。俺は親にやらなくてもいいと言いつ張ったのに、なぜか母親はそういうわけには行かないとちゃんと家庭訪問することになった。

しかし、奴は訪問日いつまでたっても来なかった。というのも、奴が作った家庭訪問に行く行かないのリストに、たまたま俺の前の名前の奴が行かなくていいやつで、そいつのところに行かないという印を引いた線が俺のところの枠内まで入り、俺のうちも行かなくていいと担任が勘違いしてしまったのである。

それには、さすがの母も大激怒した。担任は謝罪して後日改めて家庭訪問を提案したが、母は誰がするかといわんばかりに断った。担任は上の奴らにばれるのを恐れて、俺にいろいろ媚を売るようになったのにはうけた。あーあ、今思えば校長にでもばらしゃよかった。

俺は、そんな旅行の報告をすることなく、俺もそこに行ったといえるわけもなく、授業参観も放棄され、すすすくとこんなにひねた性格に育った。いや、普通の少年に育ったというわけである。

中学にあがると、思春期<sup>コレッシュ</sup>というやつか、反抗期<sup>コレッシュ</sup>ってやつか、ほん

の些細なことですぐイライラした。そのイライラの元を断つために、俺は壊すことを選んだ。ストレス解消法には、昇華とかいろいろあるらしいけど、俺はそんないい子ちゃんじゃなかったわけである。ものにあたってなんぼなもんだ。

特に家ではひどかった。父親とはしょっちゅう殴り合い、母親も突き飛ばす始末。学校では、イライラが頂点に達しトイレの壁に足がめり込むくらいの蹴りをいれ、美術で作った作品はすぐこなごなにしてゴミ箱行き。テストの解答用紙も、満点だろうがなんだろうがびりびりと破きただの紙切れと化す。そんな俺の担任は、成績はいいんだからもつと真面目になれと呆れて注意するやる気のないやつ。味気ない日々は瞬く間に過ぎていく。

それが今の俺。

両親は今年の夏はせつかくだから、南部にでも旅行に行こうとすこぶる機嫌がよかった。俺は一人家に残ると言い張ったが、当然親は断固として反対し、半ば強制的に連れてこられた。

今更旅行ねえ……。そう思うと、また嫌なことばかり思いつく。

小さいころ連れてってくれりゃよかったのに……。やはり、そう思わずにはいられなかった。俺は思わず嘆息をもらす。

小さい頃連れてってくれたら、も少しまともに育ってたかもしれないのにさ。



一個前の車両は、俺のいた車両と違い左右の両端に長い毒もった芋虫が直線になったような座席の車両だった。俺は入った瞬間にかがおかしいと思った。その車両は、なぜかしんと静まり返っている。

俺は、何かかといわんばかりにあたりを見渡した。原因はすぐに知れた。車両の真ん中らへんに、兵士であろう者たちと、みすばらしい服のそいつはいた。

「おいっ、ぐずぐずするな。さつさと立てっ！」

一人の兵士が床に倒れこんでいるようなそいつに容赦ない蹴りを食らわす。子供を連れた母親などが、すぐに子供の目を塞ぎ、人という人がそいつから目を反らした。

「なにか、なにか食べ物を……」

床に突っ伏したまま、かすかだがかしはつきりとそいつはいつた。お世辞にも上手とはいえないアガス語。それに兵士はみくだしたような目を向ける。

「あの、何か差し上げたら……」

震える声で、そいつらの近くの人のよさそうな白髪頭のばあさんがおそるおそるいった。それに一人の兵士は首を振って

「この者は捕虜です。飲食など必要ありません」

冷たく言い放つ。

「そんな、でも……」

「あなたは心の優しいかただ。しかし、こいつは捕虜になるまで私たちの国の者を一人でも殺めようとした奴なのです。今、こいつのよう者がわが国の民の命を一人でも奪おうと躍起になっている。あなたのそうした優しさが、もしかしたら多くの命を奪うことにもなるのですよ。今は戦時中なのですっ！」

ばあさんはぴしゃりそういわれ、口を閉ざす。

「Aliment . . . . . que liconque , s' i

l v o u s p l a i t

男はまた弱々しくもはつきりといった。それに周りの人たちはどよめく。

「ママー、あのおじさんなんていー」

純粋な子供の口を母親が手で押さえる。それを尻目に

「なんていったんでしょね？ 先輩」

若い兵士の一人がいつて

「さあな、そんなことはどうでもいい。ぐずぐずしてないでさっさと歩けっ！」

先輩兵士が一喝すると、そいつは今にも倒れそうに立ち上がりよろよろと兵士の監視下のもと進んでいった。その光景に、車両のほとんどの人がそいつを見ないようにしていた。まるでそいつの存在を否定するように……………。

どうでもいい、か。ふんっ。体力馬鹿がつ！ あんなラナ語、俺だっけ聞きとれっただっつーの。

本場のラナ語……………何か食べ物くれ、か……………。

ぼさぼさに肩までのびた顔を覆いつくすような黒髪、ひげ。もう少して本当に骨と皮になりそうな腕や脚。誰もが目を伏せたくなるようなそいつを、俺だけは直視していた。

・  
・  
・  
これが、俺にとって、すべての始まりだったのかもしれない・・・

「なあ、なんか食いもんなかったっけ？」

両親のところに戻ってそうそう俺は訊ねた。

「さっきお昼食べたばかりなのに、もうお腹すいたの？」

母は呆れつつも、大きなバツクの中を探し始めた。俺を産む前はウエストが六センチだったのと自慢する母。ストレスを食事で解消するせい、今はふつうよりぽっちゃりしている。その腹を見ると、六センチが細いのかどうかは知らないが、やはり昔は細かったのだろうと思わせた。

父も俺が小さかった頃より、ビール腹が目立つようになり、髪も薄くなり始めた。もともと、母が俺を産んだとき父は四十手前。仕方のないことなのかも知れないが、俺は将来を思うと暗くなる。俺もああいう禿げ方をするのかなど。

そんな父は俺のほうを見ずに、もくもくと最近妙にはまっているよく分からない分厚い小説を読みふけていた。

「サンドイッチの残りしかないわよ、あとは夕食まで我慢して」

小さなビニール袋を母から荒々しく引き取ると

「友達に会ったから、ちょっと行ってくる」

ためらうことなく嘘をついた。

「そうなの。降りる頃には帰ってくるのよ」

母がそう言うと、

「駅降り間違えたら置いてくからな」

ぼそりと珍しく父が口を開いた。

「わかってるよ。どこで降りるかぐらい、間違わねーよ、子どもじやあるまいし。それに荷物あるし戻ってくるよ」

俺はそう言うと、あることを思い出した。

そうだ、アレ持っていこう。母親がいつもなら断固反対して買っ

てくれない、十二個入りのちょっとお高いチョコレート菓子。昔から、こればかり食べていたいと思えるほど好きだった。今日は、旅行ということもあり、機嫌もよかったせいか、母が仕方ないわねといいつつも買ってくれた。

俺は自分の荷物からそれを取り出すと、

「じゃあ行ってくる」

そそくさとさっきの車両のほうに走っていった。

俺はこのとき、本当に親のところに戻る気でいた。でも、それは叶うことはなかった。これが両親を見た最後だった。

さっきまで暗くどよんでいた車両は平生を取り戻しつつあった。俺は、そんな車両をすたすたと通り過ぎ、あいつが進んでいった次の車両にいった。

次の車両は、俺と両親がいたところと同じだった。両端に二人用の席が向かい合い、四人でわいわいできる席の配置になっている。俺は入ってすぐ席全体を見渡し、あいつがいないのを確認した。そしてまた車両をつつきて次の車両にいくドアを開けようと手をかけて、すぐに手を止めた。

「おい、こいつ気失ってますよ。まったくどうしようもねえな、この捕虜」

さっきの若い兵士の声だ。

「ここは荷物置き場で誰も来ないだろうし、その隅の柱にでもくくりつけて飯でも食いに行くか」

もう一人の兵士がいった。

「いいんですか？ そんなことしたら叱られるんじゃない」

「大丈夫だよ、こいつ連れてくのはいつだって。こいつをあの捕虜どものいる前の車両まで連れてくのは骨が折れるからな。どうせみんな酔っ払ってるし、見回りしてましたとでもいえば一時間くらい遅れても何も怪しまないだろ」

呆れるようにいうと

「それもそうですね」

若い兵士は納得したようにいった。

そして、何かを引きずる音がして、少しするとこつこつと足音が遠ざかっていくのが聞こえた。

俺は完全に足音が聞こえなくなると、やっとその車両に入った。

その車両は、兵士の行っていた通り荷物置き場のようなところだった。薄汚れた大きな段ボール箱が何段にも重ねられ、ところどころ何に使うのか分からないさびた機械のようなものである。もとは客が座る車両だったのか、手すりのような細い柱が規則的に並んでいた。

隅の柱ね。俺は、すぐにそれが俺のすぐ右手にある柱だと分かった。その柱の近くのダンボールや木箱がところどころ動かされているのは、埃などから一目瞭然だった。俺は手は使わず、足で器用に荷物をよけたり、飛び越えたりしてその柱にたどり着く。案の定、見えなかったその柱の下部分にはそいつがぐつたりと下を向きぐるぐると縄で縛られていた。

近づくと、俺はふとおかしいことに気づいた。これだけ汚れているのに、まったく嫌なおいがない。見る限り、やっぱり風呂に入らされているようには思えなかった。それに食事を与えないのに風呂に入らせるとは考えられない。まるで、わざと汚らしく見せているような……。

俺が疑問に思っていると、いきなりそいつは顔を上げた。

「何か用か？」

俺は驚いた。一つは気を失っているかと思っていたのに、すぐに顔を上げたこと。もう一つは、さっきまでとは打って変わった流暢なアガス語だったからだ。

そいつはぼさぼさの髪の下から目が覗いて見えた。その目はきらりと光り、捕虜とは思えない力があつた。

「おっさん、腹減ってんの？」

俺はただ思ったことを口にする。そいつから、返事の代わりに腹のすさまじい轟音のような音が鳴った。

俺は笑えずに

「これやるよ」

そういつて、右手のビニール袋を差し出すつもりが、左手のチョコの箱を差し出して見せた。そいつの表情は何も読み取れない。

あーあ、やつちまった。これじゃ、俺確実に全部こいつにやらなきゃなんねえじゃん……。

俺がそんな後悔を内心していると

「お前、コレ嫌いだからくれんのか？」

そいつがさも平然といった。

「んなわねーだろっ！ 大好物だつてのっ！ もういい、いらねえなら俺が食うっ」

俺はそいつの言葉についてそうかつとなってしまう。いってしまったからなんて子どもなんだろうと情けなく思ったが、もうどうしようもない。

俺はもうそいつからかわれるか何かするかと思っていたが

「いや、ありがたくもらうよ」

そいつからの返事はそんな意外な言葉だった。そういつと、そいつはいつも簡単に縄から抜け出しすつくと立ち上がった。それには俺は驚きとともに、ある種の恐怖がよぎる。

そつだ、こいつはランキュロスの……。

いまさら、自分は何てことをしているんだろうと思わされた。やっつてはいけなかったことには違いない。でも、俺をそうさせる何かがかこいつにはあった。それがなんなのか分からないけど、別に分からなくてもどうだっていい気がした。

今こうやって、さっき簡単に縄から抜け出したように、いとも簡単に殺されるのかもしれない。でも、そんなことしないんじゃないかという確信が俺のどこかであった。



「おっさん、プロの殺し屋かなんか？」

俺は思わず訊ねてしまった。怖くないわけはないけど、やっぱり興味があった。

「いんや、実際に人を手にかけたことはない。でも、人殺しには変わりないな……」

そいつは穏やかにいった。俺は意味が意味が分からず、首を傾げる。それにはおっさんが微笑した。

「まあ、人殺しにはいろんなタイプがいるってこと。それより、おっさんてお前、俺を何歳だと……。まあ、いいか、もう年なんて関係ないか」

いわれて見れば、外見は確実に三十路を超えていそうに思えたが、声はまだ若々しかった。

「それにしても、なんで俺にそんなに親切にしてくれるんだ？」

そいつがからかうようにいって

「だっておっさん、さっきアガス語とラナ語でなにか食べ物欲しいっていつてたじゃん」

俺がぶっきらぼうにいう。

「そうかさっきの場所にいたのか。恥ずかしいところを見られたな、でもラナ語が分かるとは驚きだ。まだ小学生だろうに」

悪びれず笑うようにそいつがいうと

「一応、十三ですけど！ だからまあ、ラナ語は中学で習った知識ぐらいしかないよ。さっきは偶然分かっただけ」

俺はもちろんぶすくれた。

「なるほどな、そうかこっちでは十一から中学生だったな……」

「いや、でもどちらにせよ、中学生か」

そいつは懐かしそうにいうと、首を振った。

「それよりおっさん、はい」

そういって俺は名残惜しくもチョコの箱にビニール袋をおいて差し出した。そいつはおずおずとそれを受け取ると

「懐かしいな、このチョコ、子どもの頃以来だ……」  
しみじみといった。

「これって、ラナンキュロスにもあるの？」  
驚いて聞くと

「いや、多分この国だけだ」

そいつは軽く否定した。

「それってどういうこと？」

俺が考えもなしにいつて

「どうということだと思う？」

そいつはまるで軽めの質問をする口調でいつた。

この国にしかない菓子なのに、懐かしむそいつ。でもそいつはラナンキュロスの者で……。でも、アガス語はすごい流暢……。

「おっさん、この国にいたことがあるんだな」

俺は冷静にいつた。

「そういうことだ、正確にいつと……。この国の出身者ってことになるかな」

「へえ、どつりでそんなアガス語ペラペラなわけだ」

俺はじゅうじゅう納得する。

「ところで、この袋の中はなんだ？」

そういつてはこの上の袋を掴むと

「ああ、サンドイッチだよ。多分、卵かつナ」

多分俺の好みに合わせたのだろう。俺はサンドイッチにレタスとかトマトとかきゅうりが入ったのは嫌いだから。卵オンリー、ツナオンリーの素朴なサンドイッチだった。

「じゃあ、こちらからいただく」

「えっ？」

思わずそう口にしてしまう。いや冷静に考えればその食べ順でおかしくはなかったのだが……。

「お前なら、死ぬ前最後にどつち食べたい？」

そいつが冗談交じりにいうと

「チヨコ」

俺は即答する。「ごめん、お袋。俺は母の味よりチヨコレート。

「だろっ?」

黄色めの瞳が優しく笑った。友達に似たような目のやつがいるから、さほど珍しいとは思わなかったが、茶色の瞳が多い俺の地方ではやっぱり珍しいうちにはいるに違いない。

「おっさん名前は?」

俺がなんとなく訊ねたその一言に、そいつの瞳が一瞬曇るのを見た。そいつは深呼吸すると

「知らなくても、いいことだ。おっさんで十分だよ」

そっいつてにやりと笑った。

あの時点で、俺は多分気づけたはずだと思う。でも、気づかなかった。

どうして、彼は最後にチヨコを食べたのか。どうして、最後まで名前をいわなかったのか。

今なら、痛いくらいに分かる。

彼はもう、あのときから、覚悟していたのだ。これから起こること、そして死を……。

『知らなくても、いいことだ。おっさんで十分だよ』

その言葉にどんな意味があったのか、どんな気持ちを含んでいたのか、今考えると胸がしめつけられる。そのおもい言葉にどれほどの決意と覚悟があったのか、あのときの俺には予想もできなかった。

なんじゃそりゃ。

それが俺がそう聞いたときの率直な反応。

つくづく変な奴だと思った。でも、俺はひねくれてたからその理由は聞かず

「じゃあ俺もお前でいい」

そう返事をしたのであった。

それにはおっさんは苦笑い。

「まあ、それはいいとして、とりあえずちゃんと座って食べる場所を確保しないとな」

そういいながらおっさんはよろよるとした足取りで荷物を避けながら俺が来たほうの通路に向かった。俺もそのあとを着いていく。

周りの荷物に避けられてできたような通路に出ると、おっさんは大きく伸びをする。そして、俺のほうに振り向き

「ちよっと手伝ってくれ、荷物どかしたいんだ」

いきなり通路の左側を指差しそうだった。

「はあ？　なんで？」

「こつちのほう日がさしてあったかいだろうし、万が一さっきのやつら戻ってきたときの足止め作っておきたいからな、食事の邪魔されちゃたまんないし」

たんとおっさんがいって、いつもなら人の手伝いなんぞは進んでしない性質たちなのだが

「わかったよ、仕方ねーな」

頭をかきながら溜め息をついていう。

通路の真ん中らへんが軽そうな荷物ばかりだったので、俺とおっさんはそのあたりの荷物を兵士が行ってしまったほうの車両のドアのほうにどんどん積み上げて、俺とおっさんが向かい合って座れるスペースができたのであった。まるでさっきまでの暗い場所が嘘だったように、通路中おいの右手には窓からあたたかい日が差す。

俺は、来たほうの車両のほうのちょうどいい高さの段ボール箱の上に座った。向かい側にはもちろんおっさんが同じようにして座っていた。おっさんは合掌すると

「いただきます」

そういつてサンドイッチを黙々と食べ始めた。その姿を見ながら、俺はふと疑問に思っていたことを口にした。

「おっさんスパイかなんかなの？」

食事中に話しかけるのはどうかと一瞬ためらったが、それでも気になって訊ねてしまう。

「どうして？」

おっさんは口に入っていたものを飲み込んで、俺のことをしげしげと眺めながら逆に聞き返した。

「だって、服汚れてる割にくさくないし、もしかしてわざとそんな格好してるんじゃないかって」

俺のその言葉におっさんはやりとした気がした。

「なるほどね、……そのおもいつきのよさがこれから吉と出るか凶とでるか不安なところだな」

顎をさすりながらおっさんはいった。

俺は肝心な答えをいまだ聞いていないのも忘れて

「なんでアガス語できない振りしてたの？」

もう一つ気になっていたことを質問する。

「そのほうが都合がよかったからさ、なにかとな。それにまあ問題児ばっかの下っ端とはいえ、いろいろおまえみたいに勘ぐられたら大変だからな」

それにはおっさんはたんたと答えた。俺はおっさんのその言葉を深く考えず、

「ふーん、あいつら問題児の下っ端なんだ」

小さくあくびした。確かにあいつらはあまりまっとうな兵士という印象はなかった。

「ああ、だから今日……、仕事中にもかかわらず貸切の車両で酔っ払ってドンちゃん騒ぎしているんだらうよ」

おっさんが軽蔑するような、呆れたような口調でつぶやく。

「なんかそんなんじやこの国の負けがますます見え透いてくるな……」

俺が何気なく発したその言葉に

「お前、アガスがラナンキュロスに負けると思ってるのか？」

おっさんが食いついた。俺はそれには少し驚きつつも

「ああ、だってあっちの国のほうがかいし、戦力からしても俺ら不利だらうからな、なんてったって魔法がからつきしの国だし。俺の友達とかもみんなそう思ってるよ」

ちゃんと答える。おっさんはそんな俺をまじまじと見ながら

「お前、自分の国が負けてくやしとは思わないのか？」

「えー、そりやくやしくないわけはないけど、仕方ないじゃん。それに、戦争たって首都のほうの国境でドンパチしてるようなもんだ



る？ 正直首都から遠いところに住む俺らには関係ないというか、いまいち実感わかないんだよね」

俺は正直にいった。それをきいたおっさんは何を思ったのか

「……………そうか」

そうぽつりともらし、サンドイッチを口に運んだ。

俺はおっさんの言動がいまいちよくつかめなかったが、とりあえずサンドイッチを食べ終わるまで黙っておくことにした。

サンドイッチが食べ終わると、

「お前、この列車にはなんで乗ってるんだ？」

チョコの箱の包装に手をかけながらおっさんがいった。

「家族旅行でちょっとな、暑いつてのにさらに暑い南に行きたいんだと」

窓の外の風景を眺めながら俺がいうと

「そういえば今はこっちは夏休みか。そうか……………、何人家族だ？ 兄弟はいるのか？」

おっさんさんがついに箱を開けて訊ねる。チョコのひとつを口に入れる様子を横目で見ながら

「三人家族、両親と俺だけ」

チョコのことで内心後悔しながらいった。ああ、ほんとにめっちゃ食べたかったんだけどな……………。

その思いを払拭しようと

「そういうおっさんは家族とかいるの？」  
ぶっきらぼうに訊ねた。

「……………いや、そうだな、いた、というべきかな」

チョコを味わいながらおっさんはいった。

いた、か……………。人にはいろいろな事情がある。それにお

っさんは捕虜とはいえ、おそらくラナンキュロスのもと兵士かなにか………。なにか事情があってもおかしくはない。

それでも、ただ単に話題を変えたり、ごまかしたりせずそういつてくれたのが俺にはうれしかった。

「いやあ、それにしてもやっぱりこのチョコはいつ食べても最高だな」

おっさんはそうチョコの味を堪能しながらいう。

そうだろうとも、俺がただ食いたかったことか………。まあ、今となってはもう遅いが。

俺がそんなことを思っていると

「お前、将来の夢とかあるのか？ なにかしたいとかもう決まってるのか？」

父親、いや教師のようにおっさんがいった。

「とりあえず、なるべく早めに家を出て自立すること、かな？」

俺がさもあっさりというと

「家が嫌いなのか？」

おっさんが核心を突くかのようにいう。

「家が嫌い、まあそういえばそうなのかもな。とにかく、親にいろいろ干渉されるのは嫌だし、一人でなんでも自由にしたいというか。親が駆け落ちだったこともあっていろいろ堅苦しいし………」  
「なんでさっき会ったばかりの赤の他人にこんなこと話してるんだか、いつてしまったから何してるんだろうと思った。」

そんな俺の言葉に

「いまなんていったっ？」

おっさんは驚いた口調で聞き返す。

「えっ？」

「いま、親がなんだって………？」

「ああ、駆け落ちしたんだ、うちの親」

俺がなんてことはないといわんばかりにいうと

「かけ、おち………」

おっさんが脱力したようにいった。

空は太陽がさんさんと輝くばかりの光をおくっていた。

No. 31 四年間ぶんの思い - リュファス編 - quatre (前書き)

少し残酷な描写があるかもしれないので、ご注意ください。

『かけ、おち……』

どうしたのだろう？ 駆け落ちがそんなに珍しいんだらうか？  
それともまさか俺同情されてる？

いろいろなのが頭をよぎる。

俺の親が駆け落ちしたことを知ると、たいていのやつらは話のネタにし、冷やかしたり、同情されたりもしたけど、ちゃんと分かってくれる人もいた。

もういろいろいわれるのは慣れっただけど、おっさんはなにをい

じぢら……。

「おっさん？」

俺がいてもたってもいられなくなり話しかけた。

「え？ あ、そうか、駆け落ち……。」

それでもまだなにかおかしいおっさんに

「そんなに驚くことかあ？ そんなに珍しい？」

俺は微笑する。

「そうだな、びっくりした。お前、両親は馬鹿だと思うか？ 駆け落ちして？」

おっさんは唐突に聞いた。

「いや、そう思う人もいるだろうけど、実際いわれたことなくないけど、お互いなんだかんだいって喧嘩も多いけど仲いいのは知ってるし、なにより後悔してないって二人が思ってるのも知ってるから、馬鹿だとは思わない。それだけ本当に好きだったんだなあって思うよ。まあ、両親も子供もその分いろいろ苦労したけど」

俺は苦笑いしながら答える。そんな俺を真顔で見ながら

「普通に親のもとに生まれたかったって思うか？」

「そりやできることならそうして欲しかったけど、選べないじゃんそんなの、親も子もさ。どんな親のもとに生まれるのか、どんな子どもが生まれるのか、そんなのはなから選べるなら世界中のやつが今頃苦労してないって」

「そりやそうだ」

おっさんが笑った。

「お前、両親嫌いか？」

「そりや、嫌いじゃないっていえばうそになるな。金はないし、おまけに頭も悪くて勉強もろくに教えてもらったこともない。でも、あいつらが俺の両親である事実はどうあがいても変わらないからなあきれたようにいうと

「お前みたいなお前もがいて、二人は幸せだな」

おっさんはしみじみとそういつてチヨコを口に投げ入れた。

「はあ、今までの話聞いてて何を根拠に？ あいつら俺なんか子どもで絶対後悔してるって」

吐き捨てるように言う

「いいや、そんなこと親は思っていないさ。お前はやさしいな。自立したいっていつてたのだから、正直親のことも考えてるからだろ？」

俺は何も返さず、窓の風景を見るふりをする。

「俺がなんでこの国出たと思う？」

もう残り少なくなったチヨコから手を休めおっさんはいつた。

「さあ、向こうのほういろいろいいからじゃないの？」

「確かにお前ぐらいのときは俺もそんな風に思ってたな……俺はな、ずっとこの国で生きて死ぬんだと思ってた。そんなある

日、俺に結婚の話が持ち込まれたんだ。相手は幼馴染で金持ちの家の出の女性だった。でも、俺は彼女を友達にしか思ってた。彼女もそうだったに違いない。」

彼女もそうだったに違いない。」

昔のことを懐かしむようにいうおっさんを俺はじつと見つめた。

「それでどうしたの？」

俺はあまり興味なさそうに訊ねる。

「俺には幼馴染がもう一人いてね、その人は病弱で、身寄りのない女性だった。なにがあつてか、俺たち三人は仲がよくてね、この関係はずっと続くんだと思つてた。でも結婚の話が持ち上がったから、俺とそのもう一人の彼女は気づいてしまったんだ、お互いが友情以上の感情を持つていたことを。俺はすぐ結婚の話は白紙に戻すように両親にいった。相手のほうは、俺たちのことを知つた幼馴染が親を説得してくれて別に何も問題はなかつた。でも、問題は俺のほうだつた。身寄りのない彼女と結婚することを親は絶対賛成しなかつた。今まで彼女に普通に接してたのに、掌返したように冷たい態度になつて。親はどうにか俺たちを別れさせようと躍起になつてさ、途方にくれてたとき救いの手を差し伸べてくれたのはもう一人の幼馴染だつた。ありつたけの大金押し付けて、駆け落ちしろつていうんだ。あとのことは自分がどうにかするから、絶対彼女を幸せにしろつて。俺と彼女はもちろんすぐにイエスなんていわなかつたけど、駆け落ちしなかつたら俺が男だつたことを後悔させてやるぞの笑える脅しもあつてか、彼女の気持ちを汲んで俺たちは駆け落ちしたんだ」

結構すごい内容なのに、おっさんはどこか楽しそうだつた。

そつか、だから駆け落ちであんな様子が変わつたのか。そつか、おっさんもそうだつたのか。

「すごい女」

俺がぼそりつぶやくと

「だろ？ 小さいころなんてまわりの同い年くらいの男の子を泣かせてばかりで、そりゃ強いつてもんじゃなかつた。彼女がトラウマになつている男もいるよ多分。でも、成長するにつれてすごい美人



になって、女って怖いって思ったもんさ」

「どうしてその人じゃだめだったの？」

美人で金持ちなら文句ないじゃん。

「なんでだろうな、ほんと友達にしか思えなかったんだよ。それに、俺の好きになった人だって負けないくらいきれいだったんだ。優しく、しっかりしてるけど、どこか目がはなせなくて。まあ、お前もそのうち分かるさ」

おっさんは笑うようにいって

「誰かがいってたな……、好きになるのに理由なんてないのさ」

俺はぽかんと口をあけ

「ラナンキユロスに行くと、そんな恥ずかしいこともさりりといえるようになるの？」

呆れながらきく。

「そうかもなあ……、この国はいろいろ堅苦しいからな。他の国じゃもつと愛だの恋だのに素直だったのにな。知ってるか？ ユーフォルビアなんか男女関係なく、意中の人が見れたらすぐに愛の言葉を述べるんだ。初対面だろうがなんだろうが、ストレートに愛してるとかもつといくと結婚してくださいとか簡単に口にしまつんだと」

楽しそうにいうおっさん。一気にそういうと残っていた数個のチヨコを全部口に入れた。

ユーフォルビア、確かラナンキユロスの右隣にある国。

「おっさん酔っ払ってるみてえ」

何かやりなげで、どことなくあきらめかけているかのように見えるおっさん。俺は見ていてなんだか悲しい気分になってくる。

最後のチヨコの味をしっかりとかがみ締めて

「酔っ払ってるか、そうかもな」

窓の外を見る。

俺もつられて窓の外を見た。遙か彼方にのどかな田園風景が広が

り、列車は荒れたような黄色い地面の上をひたすら走っている。遠くで鐘か何かが鳴る音がした。

「……………さてと」

おっさんはそういうと窓の長方形のガラスに手を当てた。すると、パリっという音がするや否やガラスが外れ、瞬く間もなく外に落ちていった。

「ええっ！」

思わず俺が驚くと

「ふう、これで風に当たれる」

おっさんは何もなかったようにすましていった。

はめこまれていたような窓ガラスがなくなってぽっかり開いた空間から、びゅんびゅん風が入ってくる。

「おっさんなにをしたの？　つーか弁償もんだよな、コレ」

白い目で俺がいうと

「ああ、こんなのこつ掴めば簡単に外れるぞ。素質もあるが」

おっさんはあくびをしながらいった。

「はあ」

全く答えになっていないような返答に、俺は頭を振って溜め息一つ。

おっさんは気持ちよさそうに風に当たりながら

「駆け落ちしてもな、すごい幸せだった。彼女がいて、子どもが生まれて。でもあるとき、彼女が病にかかった。幸い治せないものじやなかったけど、多額の金が必要で、手術が遅くなれば最悪死に至るといわれた。彼女は別に今十分幸せだから、直らなくてもいいと

言い張った。俺と子どもと暮らせればそれで十分だと。でも俺はそんなわけにはいかない。どうにかお金を確保できないか必死に探し回った。そんなときある話が俺のところに持ち込まれた。そして、妻の反対を押し切って多額の金と引き換えに、今ここにいる。彼女は最後まで俺を責めたよ、行くなと何度も泣いてくれた。でも、俺はまだ何もわかっていない自分の子どもの顔を見て、コレでよかったんだと思った。彼女の手術費を差し引いても、よほどのことがない限りこどもが大きくなるまでの金はゆうにもらえた。二人の幸せを思えば、どんなことだっと思ってやる、そう、思ったんだ」

茶色の目を細めながらいう。

「それで、兵士になっただよ……」

俺がいった言葉に

「まあ、そんなとこだ」

おっさんはそれとなく言葉を濁す。続けて

「別れ際妻にいったよ、俺は人殺しになる。親が人殺しでは子供がかわいそうだ、だから俺のことは忘れてくれて」  
遠くを見るような目でおっさんはいう。

そうか、だから、いたという、過去形だったのか……。

「俺はな、幸せだ。幸せすぎるくらいだ、愛する人と結婚してその人との間に子どもを授かれて。お前の両親も俺と同じ気持ちのはずだ」

優しいほほえみを俺に向けていった。

何てこっぴどくかしいことをいうんだか。でも、本当だと思った。

この人の言葉に嘘偽りはない。それが真実なのだと心のどこかで思えた気がした。

俺はなにかいおうと思った。それがなんなのか分からなかったけど、うまく言葉という形にできそうにもなかったけど、なにか伝えなければと思った、まさにそのときだった。

「うわっ、なんでこんなところに荷物がっ？」

いきなりドアが開き、先ほどの兵士が戻ってきた。

その声がしたあとおっさんはすぐに

「さてと、もう時間だ。食べ物、ありがとな。最高の最後の晩餐だった」

俺ににやりとほほえんだ。兵士がなにやら悪態をつきながら荷物を手早くどかさ音が耳に入る中、

「巻き込んですまなかつたな」

おっさんがそっぴい終わると、俺はいつの間にかおっさん後ろの襟首と腰辺りのズボンを掴まれ両手で持ち上げられていた。あの細腕のどこにそんな力が残っていたか知らないが、俺はいきなりのこと驚きぶら下げられているような状況で少し苦しみながら

「なにすんだよっ！」

大声で叫ぶ。

そして体が一気に後ろに引っ張られたかと思った瞬間、

「お前は生きる」

そんな言葉とともに外に放り出された。

かろうじておっさんのほうを向くと、満面の笑みでこちらを見送っているような二十代ほどの男の顔が目に入る。ひげ面でお世辞にもいい男とはいえなかったが、とても優しい顔をしていた。

その直後すぐに全身に苦痛が走り、目の前が一瞬真っ暗になった。俺はどうすることもできず地面を転げまわり、数秒後やっとうつぶせになっていることに気がついた。渾身の思いで目を開き顔を上げると、まださほど遠くはないところのろのろと列車が走っているの

が見えた。

あちこちに痛みが走ったが、動かないところはなさそうだった。列車は線路が何故かここいらいつたいにカーブを描いているのが多いためか、平常よりものろのろと走っている。全速力で追いかければ追いつけないこともなさそうに思えた。

「つてえな」

あまりの痛さに涙が滲み出る。

それでも歯を食いしばって腕立て伏せをするように上半身を起こし、また列車を見たその時だった。

すさまじい爆音とともに、異常な風が俺を襲った。俺は思わず目をつぶりまた地面に伏せる。

どのくらい気を失っていたのだろうか？

俺は鼻をさすようなにおいで目が覚めた。頭がぼんやりとする中、重たい瞼を開く。土のにおいに混じって、さつきからやけにけむたような異臭がする。

俺は痛みが走る体をゆっくりと無理やり起こした。そしてようやく視点が定まった目の前の風景を見て

「なんだこれ？」

思わずそう口にした。そう、口にせずに入られなかった。

目の前に広がる光景に嫌でも目が見開いた。

少し遠くはまるでうそのように赤く染まっていた。そこだけがまるで赤い絵の具をぶっ掛けられたような絵になっている。立ち上る煙が空高く上っている。

俺は徐々に意識がハッキリしてきた。何が起こったのかだんだんわかってくるにつれて、心が冷えていく気がした。

俺は汗をだらだらとこめかみから流しながら、必死の思いで立ち上がり赤く染まった場所へ向かう。体を動かすたび、尋常ではない痛みが走った。

赤く染まった景色はやけに熱かった。近づくにつれそれは身にしみるほど分かる。俺はなに振り構わず、ようやくその場所の近くにたどり着いた。

明らかに、燃えている所々にさっきまで乗っていた列車であろう痕跡が見受けられた。火の海は横よりも縦に広がっていた。先頭を走っていた遠くのほうの列車の車両は無事だったようで、途中から嘘のようにいつもの風景が広がっている。

一步踏み出したとき、何か足に当たった。俺はあまりはつきりみえないそれを目を凝らしてみる。それは、明らかに人の腕であったものだった。焼け爛れてはいるが、先端の生々しいほどの人の手の形がそれを物語っている。

急に吐き気が遅い、全身が震えだし、思わず後ずさりする。頭の中で想像するより、現実のそれはおぞましくとてつもない力を持っていた。

ゴミを燃やした後の匂いとはまた違う匂いが辺りを覆いつくす。それが人が焼ける匂いであることは明らかだった。

俺は今更ながら両親のことを思い出した。両親と自分たちが乗っていたのは最後尾に近い後部車両だった。赤々と燃える目の前の車両たち。一目瞭然だった。両親が生き残っている可能性はもうどこにもなかった。

そしてさっきまで近くにいた者のことを思い出す。

さっきまでみんな生きていた。みんな確かに生きていた。でも、死んだ。

死はいきなりやってきた。

多くの命が今この瞬間なくなったのだ。

でも、でも俺は？ 俺は、生きています。俺は確かにここに存在し、生きています。

遠くのほうで、赤ん坊か子どもかそれともなにかが泣き叫ぶような声が風に乗って聞こえてくる。

俺の中の何かがかみ上げてきた。とてもちっぽけで、でもとてつもないなにかが俺の心を支配した気がした。むなしくて、かなしい、そんな静かな怒りがぐるぐると渦巻く。そしてその静かな怒りはついに爆発した。

俺はその怒りをあたりにぶちだした。声とは到底思えない咆哮が辺りを響かせる。

火の海はそれでもゆらゆらと炎をちらつかせた。まるで俺をあざ笑うかのように。

空は嘘のように青く青く澄んでいた。まさに夏の空という青さ。



そんな中、雪が一つ一つと零れ落ちるのであった。

「俺はどこかうれしくて舞い上がってたんだろっな……、親と一緒にいればよかったのに他の車両歩き回っててさ、そんなときある人に出会ったんだ。その人は多分ランキユロスの捕虜だった。よほどお腹が空いてたみたいで、なにか食べたいってつぶやいてた。俺はなにを思ったのか、その人に食べ物を持っていったんだ。その人はなんていえばいいか、俺はなんかひきつけられるとこがあったんだ。めっちゃうれしそうに、俺が持っていったチョコとか食べてた……」

懐かしむようにリュファスがいつて

「チョコ、ですか？」

そんなリュファスを右隣にいるセラフィーナが見つめた。

「ああ、一時期流行ったじゃん。箱に十二個ぐらいこった形のチョコが入ったちよつと高級そうなチョコレート菓子」

リュファスのそんな説明に

「ああ、あれですか。あれはおいしいですよ。小さい頃あれを飽きるほど食べたかって思ったほどです」

セラフィーナの顔がほころぶ。それにはリュファスも笑って

「俺もそう思ったなあ、あの事故以来すっかり忘れてたけど……」

遠くの池で魚が水面に飛び上がるのを見る。

「その人はなんでかその事故が起きるのを知ってたんだ。爆発が起きるちよつと前に、お前は生きろって言って、俺を窓から投げ捨て

た」

苦笑いするリュファス。セラフィーナはそんなリュファスを静かに見つめる。

「なんで俺なんかを助けたんだか、今でも分からない。どうして俺を助けて、自分も飛び降りりゃよかったのにそうしなかったのか、ほんと全然わけわかんねえよな。でもさ、その人俺を投げ捨てる前から死ぬのを覚悟してた。名前は教えようとしないうし、幸せで幸せでしようがないって俺に自慢するし、最後のメシはチョコで幸せだったっし、肝心なところははぐらかすわ、もうほんとにわけわかんなかった。でも、確かに覚悟してたんだ」

そういつてリュファスは深く息を吐く。

「さっき、なんで俺を助けたかわかんないっていったけど、もしかしたらって思うのがあるんだ。そりゃただの気まぐれかもしれないし、チョコとかあげた礼かもしれないけど、俺はもしかしたら俺と自分の子どもを重ねてたんじゃないかって思うときがある。その人はもともとアガパンサスの出身で、駆け落ちしてラナンキュロスにいったっつってた。最愛の人と結婚してその人との間に子供が生まれて本当に幸せだったっていった。だから俺の両親もお前がいて幸せだったってしてくれた。そう思うとき、どことなくその人は俺にラナンキュロスに残してきた自分の子どもと俺を重ねてたって思わずにはいられないんだ」

一気にいうと、リュファスはふっと笑った。

セラフィーナは何もいわず、ただリュファスから目を反らさずにいた。

気がつくと、俺は病室のようなベットの上にいる。白い天井、白

い毛布、白い壁、真っ白な空間だった。

「気がついたか？」

視界に入ってきたのは、よぼよぼの白髪頭のじいさんだった。眉毛もひげも全部白、もうちょっと痩せてたら本当に骨と皮みたいなじいさん。ちらと視界に入った服を見る限り、医者か何かのようだ。「なにが起こったか覚えてるかい？」

その言葉に俺は徐々に記憶が戻っていく。

もう悲しむ気持ちも、起こる気力さえもわいてこない。

呆然と天井を眺めていると

「自分の名前は思い出せるか？」

緊張が混じった質問がじいさんの口から出る。俺は一応少しうなづいておいた。それを見てじいさんはほっとして

「よかった、記憶がないわけではないんだな。そうだ、ちょっと待っていなさい」

そういうと部屋から出て行ってしまった。

しんと静まり返った部屋で、俺は急に空しくなった。なにか大事なものがぼつかりと抜け落ちてしまった気がした。

思えば全部突然の事のように感じられる。

夢、じゃないんだよな……。

夢だったらどんなにいいことか。いつそ夢であって欲しかった。

でも、現実は今も俺の目の前に突きつけられ、俺を支配していた。そういえば、あれだけのけがをしていたのに、今は全然体が痛みを感じない。ただ少し疲れを感じるだけ。どうしてだろう？

「入るぞ」

ノックの音がして、先ほどのじいさんが戻ってきた。左手に水か何かに乗った盆を持ち、右脇に新聞を挟んでいた。

「起きれるかね？」

じいさんがそういうと、俺はおそろおそろ起き上がってみた。案の定、何の痛みも感じられない。

「まずは飲みなさい。ほんの少しでもいいから」

そういつて差し出されたコップを俺は無言で受け取り、少し口にした。冷たい水がのどを通り、幾分か気分がすっきりした気がした。俺は、今度はぐびぐびとコップの水を全部飲み干す。

俺が水を飲み干すと

「この分ならあと数日で体力も回復するだろう」

じいさんが満足そうにいい、空になったコップと俺の手から取った。

「俺、どのくらい寝てたんですか？」

ベットの脚を見ながらいつて

「丸一日だ。ここに連れてこられたとき、あんたは打ち身がひどくてね、後遺症が残るかと思ったが、国のほうが呼んだ法術士たちのおかげで外傷は何も残ってないはずだ」

「法術士っ？」

法術士、人の体を魔法で治せるとかいう……？ 実際耳にしたことはあるけど、この目で見たことはなかった。

でも確かに、法術なら納得がいく。あんなだけひどいけがが一日でもうなかったかのようになっている。信じないほうが無理ってもん

だ。

「ああ、あの事件を聞きつけて首都にいた者は勿論、ツルバキアやサンピタリアといった国の法術士たちも何人か駆けつけて一晩中治療しまわってくれたんだ。おかげで、普通なら命を落とした者の命も救われた。お前さんも治療してもらったわけだが、何故かお前さんだけ一晩中熱にうなされてな。法術士たちに見てもらっても一向に治らなくて、仕方ないからワシが見とったんじゃ。もう引退してる身だが、もと医者だからな。今はもう熱も引いてるし、様子を見てからじゃないとなんともいえないが、もうそんなに心配することもないだろう。いや、よかったよかった」

うれしそうにいうじいさんをちらり見て

「……ありがとうございます」

俺は気持ちを込めずにぼそりといった。そんな感謝の言葉に

「感謝するのはお前を治療してくれた法術士に感謝するべきだよ。

ワシはただ見とっただけだ」

じいさんはそれだけいった。

「結局、なにが原因だったんですか？」

俺のその言葉に、じいさんの顔が固まった。

「まだはつきりは分からない。でもその様子じゃ、はっきりと覚えているようだな」

哀れむような目で俺を見る。俺はじいさんから目を反らし、またベットの脚のほうを見つめていた。

俺の呆然としている姿を見ながら

「一人であの列車に乗ってた、のか？」

ためらいがちにじいさんは訊ねる。俺は言葉にするのもおっくうで、ただ首を横に振った。

「ここに、生存者のリストが載ってある。あと、身元が分かった死者の名も……」

そういつてじいさんは新聞に目を落とす。そして深く息を吐くと「見るか？」

まっすぐ俺を見ていった。俺も目を反らさず、こくりうなづく。それをみてじいさんは新聞を手渡してくれた。

見出しには、死者約五 名と書いてあるのがすぐ目に入った。

「次のページにのつとる……」

じいさんがぼそりつぶやくと、俺はすぐに次のページをめくった。そこにはびっしりと人の名という名が刻んであった。

期待なんてしていなかった。でも、わずかなほんのわずかな期待を胸に俺は新聞を見る。

ざっと目を通すと、俺は新聞を閉じ、ベットに軽く投げた。

しかしやはりそこには絶望しかなかった。万が一、誰かが、何かが、何らかの拍子で、俺のように救ったと信じたかった。でも、そんな望みはすぐに絶たれたのであった。

じいさんは気を遣ったのか、新聞を取ると部屋から出て行った。



日が暮れて、夕食が運ばれてきた。体は治っているとはいえ、味がついた雑炊がおかゆのようなものが差し出される。俺は少しだけ口にして、ほとんど残してしまった。

そして、ふいにとりあえずこの中だけでも見て回ろうかという気になり体を起こした。体はだるくて重かったが、痛みはやはりほとんどない。俺は重たい足で、部屋を出た。

やはりここは小さな病院のようだった。ずらりと入院用かなにかの部屋が並んでいた。俺はとりあえず左に向かった。

左のつきあたりはまあまあ広い空間で、待合室かなにかのようになっっていた。座席が所々に並び、観葉植物がおいてある。俺は端のほうの座席に腰を降ろし、真っ黒に染まった世界を眺めていた。

「いったいあの爆発はなんだっただろう？ ただの列車の事故にしちゃ、尋常でない。じいさんはまだはつきりしたことは分からないといったけど、あの言葉にはそれだけの意味じゃなかった気がする。」

そんなことを考えつつ、溜め息をつく

「にしてもやつらひでえことしやがる。何の前触れもなく、列車を爆発させるなんて……」

見舞いに来た男だろうか？ 後ろのほうの通路からそんな声が飛んでくる。

え………？

心臓が大きく脈打つ。

まさか、それって……………。

「ああほんとにな。いくら敵とはいえ、あれだけの民間人を……………」

振り向いて確認しなくても、さっきの男とは違う声だと分かった。哀れみを含んだその言葉がぐさりと胸に刺さる。

「でもどうやらランキユロス国自身は関係してないらしいんだ、なんでも過激派の連中が勝手にしたことらしいぞ」

「らしいな、メディアも国の圧力があつてかいろいろ濁してるがもうそろそろ白状するだろ」

そうか、ランキユロスだったのか……………でも、過激派って……………。

ふいにおっさんのことが頭をよぎる。

もしかしておっさんが？ いや、ありえない、あんな状態でどうやって？

でも、待てよ、おっさん確か見た目は汚くてもしばらく風呂はいつてないって感じじゃなかった。俺がそれを指摘しても、誤魔化すだけで……………。それになによりおっさんはこのことが起きることを知っていたのは確実なんだ。

でもそれならどうして、どうして自分も飛び降りなかったんだよ？

そんな疑問を投げかけていると

「なんでもランキユロスのやつらが民間人装って侵入してたらしいんだ。それでそいつらが中間の車両から後部車両にかけて爆弾を・

.....  
「そんな言葉が耳に入ってくる。」

なるほど。でも、これでおっさんの疑いが完全に晴れたわけじゃない。

人を手にかけてたことはなくとも、人殺しには変わりないといった何らかの形で人の命を奪うようなことを彼はしたのだ。だから家族と別れた。

それにしても、てことはなんだ、俺らは巻き込まれたってことか、こんなくだらないことのために。誰がなんで争ってるのか分からないような、今まで他人事にしか思ってたもの。ただ巻き込まれただけだったのかよ！ あれだけ関係ないって思ってたのに。いつか勝手に終わってんだろぐらいにしか思ってたのに.....、一体どうして？

やるせない思いが込み上げてくる。理不尽ってこういう時使う言葉かな？

自分が、親が関わらなきゃきつとこんな思いしなかったのに。テレビか新聞かなんかでこの事件知って、ただふうんと思うだけだったのに。どうして、どうしてこうなるかな？

つくづく俺ってひどいやつだな。自分が当事者じゃなきゃ、少しの同情かなんかですんだってのに.....。当事者になるだけでこんなに違う。思いが、見えてるものが全部変わってしまう。

苦しみも悲しみも怒りすら、こんなに違うんだな.....。改めて思い知らされる。

失ってからどれがどれほど大事だったか身にしみて分かる。

きつとこの悲しみは誰にも理解されず、自分の中でしかどうすることもできないのだ。こないろいろな思いを一人で背負って、俺は生きていくことになるのか……。

辛いことがあったら、気にするなとかすぐ口にする奴が大半だけど、実際そんなの神経図太い馬鹿にしか効果はないと思う。時間をかけて少しずつ目を背けていくしかないのだ、結局。忘れる、なかったことにしたほうが楽になるのだ。

でも、今回の件はさすがに完全に消失するのは難しいだろう。なんだって、実の親が死んだのだから。

その夜はいうまでもなく、すぐに寝つけなかった。考えることは、これからどうするかということばかり……………。

あんな親いなくてもいいと思っていた。あんな身勝手な甲斐性なしども、どうなったってしつたこつちやなかった。金さえあれば、それでいいと毎日のように思っていた。すぐにでも家を出たくて、あいつらから離れたくて、そればかり考えていたのに。

そうか……………。

改めて思い知らされる。

死んで欲しかったんじゃない、ただ俺の生活からしばらく消えて欲しかっただけなんだ。一人になりたかった、息苦しかったんだ、親のおかげで生きているのが、自由のない生活がただ辛かっただけなんだ。

別に死んで欲しかったわけじゃないんだ。ただどつかで生きて、必要最低限のとき以外会わないそういうのを俺は望んだ。こんな望んじやいなかったんだ、本当は。口でいっても、頭で思っても、それを現実にすることは望んじやいなかった。

両親との思い出が次々に思い出される。

一番古い記憶は、多分に際るときに母と行った産婦人科。いい子にしていなさいといわれ、ベットの上でいい子にしていたのだが、誰かに構って欲しくてついベットの上を駆け回り、ティッシュ箱のティッシュを次々に引き出していたのを覚えている。

ある記憶が思い出しては消え、また違う記憶が思い出された。

よく誰かが死んでも、その人は記憶の中で生きてるってくさい台詞があった気がするけど……。

そっか、記憶の中にいるってのはこういうことだったんだ……  
……。記憶の中にも、こう現実にはいない。今思うとなんて残酷なんだろう。俺の中ではこんなに生き生きとしているのに。

長年一緒にいた人が、ついさつきまで一緒だったのに、もういないなんて。信じたくなかった。信じなければいつか、迎えに来てくれる気がした。

思わず、涙が込み上げてくる。情けなくて、悔しくて、その晩はずっと声を押し殺して泣いていた。ベットの中でうずくまり、久しぶりに思いつきり涙を流した。

外はただ鳥が静かになく音しかなかった。

気がつくのと、時刻は正午手前を回っていた。部屋にある時計がもう少して十二時を示そうとしている。

どうやらいつの間にか眠ってしまったらしい。

俺はだるい体を無理やり起こし、ぼーっとする頭を軽く振る。寝すぎたせいか、逆に体があちこち痛い気がした。

昨日からろくに食事をしなかったせいか、急激な空腹が襲う。

お昼運んでこないかな？

そんな期待をしていると

「待ってください、彼はまだ体調が万全じゃありませんし、精神的ショックも……」

部屋のドアのほうからじいさんの声が聞こえてきた。

「昨日もう目を覚ましたのだろう？ 法術士たちによって外傷はな  
いだろうし、年は十三四じゅうさんしと聞いた。そこまで子どもじゃあるまいし、  
こつちだつて仕事なんだ。他の被害者たちにも聞いて回ってるし、  
例外は認められない。入らせてもらつ  
いかつい男の声。」

話の内容からして、俺はまだ寝てたふりをするか、聞いてなかつ  
たふりをしてたほうがよさそうだな。

そう思つて俺は毛布に包まりドアの反対方向を向いた。

それからなにやら小声で二人が話す声が聞こえ、ドアがノックされ  
「入るぞ」

そういうなり男が入ってきた。後ろからおそらくじいさんも入つ  
てくる。

バレルかと思つたが、男は俺を揺さぶり

「おい、起きろ」

脅すようにいった。

その乱暴さにとつさに手が足が出るのを我慢して俺は、目をこす  
りながらゆっくりと起きるふりをして上半身を起こした。

男はスーツ姿のがつしりとした体系の、顔はいかにも人のよさそ  
うじゃない顔をしていた。こげ茶の短く借り上げられた髪に、細め  
の茶色の瞳が俺を見下ろす。

「お前がああの列車に乗っていたというのは本当か？」

凄みを利かせるように男は単刀直入にいった。

俺はなんだかどうでもよくなつて、おもしろいのでこのまま違つ  
自分を演じてみることにした。どうせここに本当の俺のこと知るや  
つはないんだし。



俺はそう決断すると、さも自分はいそがしいような被害者なんですとばかりに暗い表情を作り、こくりとうなずく。

「たまたまあの現場近くを歩いていただけではないのかな？」

男が鋭い眼で俺を睨むが、俺はそれに怯まず、さも戦意喪失した弱い獣のようにまたこくりとうなずく。

「お前の名前は？」

男のその言葉に、俺はすぐに返事をしなかった。

思わず本名を口にしようかと思ったが、何故かそれは避けたほうがいい気がした。それに今は演技中だ。だったらその訳に没頭するために、何か違う名を使いたい気もした。

そこで俺は

「リュウ……」

体育座りをして、毛布を引き寄せながらいった。これは幼少期や母にいわれていた愛称だ。名前とちょっとちやそこまで嘘でもない。

「リュウ、お前さん、列車は一人で乗ってたわけじゃないらしいが、誰と一緒にだった？」

男のあくまで事務的な質問が俺の胸に重くのしかかる。

無論、その答えは両親だ。芋づる式におっさんのことも思い出してしまふ。

それを払拭するかのよう

「両親……」

俺は目を閉じなるべく辛そうな表情を作る。誰かがうそを通すには多少の真実を含むことが大切だっていつてた。なら、これくらいいつてもいいだろう。

「両親の、名前は？」

どうしてだろう？ 両親の名も避けたほうがいいと心の中の何か  
がいった。自分の名も偽ったのだ、両親の名も偽らなければ筋が通  
らない。そんな屁理屈で自分の考えを貫き通す。

何がいいだろう？ こんな悲劇にふさわしそうな名前とは……  
……。

「トムとアイダ」

ひざの上に顔をうずめて俺はいった。思わずこみ上げてきた笑  
いを隠すためだが、はたから見たらその笑いをこらえる震えは悲しみ  
の震えに見えたらしい。

「すまん、こんな辛いことを思い出させて……」  
男ではなくじいさんが俺に哀れんで謝った。

きっとこのじいさん、いい人なんだろうな……。

そんな思いに浸っていると

「どの車両に乗っていた？」

男がお構いなしに質問してくる。

「後ろの、ほう……」

それを聞いていた男は何故かしばらく考えてから

「爆発前もか？」

「……はい」

なるほどね、そういや中間の車両から後部車両は火の海だった。  
助かってる奴がいるなんて、ちょっと怪しいって思うよな。こりや  
前部車両に乗ってたって嘘ついたほうがよかったかも。

「お前、誰かに助けられたんじゃないか？」

男のその言葉に思わず動揺してしまうところだった。もしかしてこいつ、おっさんと俺のことを知ってる？ いや、そんなはずない、知ってるならこんな回りくどいことしない、はず………。

むやみに何かいって下手に勘ぐられそうだと、俺がすぐに返事をしないでいると

「なんだって、あんたらそんなこと聞きなさる？ 爆風で飛ばされたり、爆発物から離れていたりして、かろうじて命を取り留めた後部車両のものもいる。この子とてそういったものじゃろってっ！」

じいさんが男に吐き捨てるようにいった。

「口を挟まないでもらおうか」

「精神的ショックで辛い被害者たちに遠慮お構いなしにずけずけと無神経な質問を浴びせるあんたらなんぞの仕事に口を挟んでなにが悪いつ！」

じいさんのその言葉に俺は男が何かしらきれるんじゃないかと内心ひやひやしたが、男はただ黙って何も言い返さずにいた。その表情からは何も読み取れない。

俺はじいさんにも悪い気がして

「助けてくれたというなら、両親です。爆発音がして、何か異常だと分かると、母が俺をかばうように覆いかぶさり、そこに父も……」

そういつてまたひざに顔をうずめた。

数秒後男は

「分かった。もう十分だ」

そういうとくるりと俺に背を向けた。俺は顔をあげそれをただじっと見つめる。

「最後に、怪しい奴らを見かけなかったか？ 例えば、アガパンサスの国の人間じゃなさそうな」

俺はその質問の意図に気づき

「いいえ、僕はアガパンサスの人しか見てません。ただ怪しいかどうかは分かりませんが、仕事をせざるにさぼっているらしいアガパンサスの兵の制服を着た兵士らしくない、そんな人間は見かけましたよ」

口調は悲しげに、でもじいさんの目を盗み満面の笑みでいつてやっただ。

「……そうか」

男は振り向きもせず部屋をさっさと出て

「すまないな」

じいさんは俺にそう一言声をかけ出ていった。

危なかった。もう少しで本当のことを馬鹿正直に言ってしまうところだった。いや、本当は言ってしまったかった。

あれでも十分セーブしたほうだ。

本当はこういってしまいたかった。

ええ、見ましたよ。お腹が空いているから何かくれという何の抵抗もできない捕虜に容赦なく蹴りいれ、その捕虜が気絶したら近くの柱に縄で縛り付けて食事に行くような簡単なラナ語も聞き取れない馬鹿なやつらがねっ！ と……。

食事抜きは仕方ないのだと思った。仮にも戦争中だし。でも、人をわざといたぶるのを楽しむあいつらは許せなかった。嫌気がした。あんな奴らが自分の国の兵士だと思つと、情けなくなった。

おっさんのことは、やっぱりいわなくて正解だった。それに、どうしてもおっさんのことは誰にもいうなと心のどこかで警戒する声があった。

男はいった。俺が誰かに助けられたのではないかと。まさにその通りなわけだが、やっぱり何かひっかかる。

男がああいったということは、つまりあの爆発が起きることを知

つていて乗客を助けた可能性がある奴がいるということが前提だ。それはやはり、情報が正しければラナンキュロスの過激派とかいうこの事件を起こしたとかいう奴ら。

でも、本当にそれだけか？ おっさんはラナンキュロスにいた側の人間、あのことを事前に知っていたとしてもおかしくはない。

……待てよ？ 男は俺に本当に後部車両に乗ってたか聞いてきたけど、あれが事故のあとから裏付けたものじゃなく、もともと分かっていたことだとしたら？

不意に背筋が冷たくなる。

誰かに助けられた？ 誰かがあの事件が起きることを知っていて、どこに爆発物が仕掛けられているかも事前に分かっていたんだとしたら？ その可能性は十分ありうる。あれがラナンキュロスの過激派の連中が起こした奴らだけが知っていたものじゃなく、もともと前々からアガパンサスの国なり軍なり兵なりも知っていた計画的なものだった。考えられなくもない。

果たして本当にラナンキュロスの過激派との連中だけの計画なら、その中で敵国の乗客の命を救おうとする奴がいるだろうか？ 答えはノーだ。ラナンキュロスはうちより甘くない。今は違いかもしくないが、少し前までは少しでも裏切ったり、相手が自分の意にそぐわなかったりすれば躊躇なく殺すそういう国だと聞く。

そう考えると、やっぱりあの男が訊ねたかったのは、アガパンサスの者で、あの事件を事前に知っていた者で乗客を助けるようなことをした者がいなかったかということなのではないか？ つまりちよつと言ひ方は違つかもしれないが、裏切り者？

でももし事前に分かっていたんだとすれば、どうして助けてくれなかったんだ？ どうかして防げたはずだ。

そうだ、おっさんだって知ってたくせに……結局俺し

か助けなかった。私怨があっても、あの人がたやすく人を見殺しにするとはいいたくなかった。それに爆発直前に事件が起きると知ったとは到底思えない。この事件は、もしかしてただのランキユロスの過激派が起こしたものじゃない……？ おっさんが、国が自国の民をなくしてもいいと正当化できるような何かがこの事件に隠されている？

まさか、な。でもそのほうがじつまが合う、気がする。肝心なことをはぐらかし、最後まで自分の名をいわなかったおっさん。人は見かけによらないって聞くけど、あの人がやっぱり大勢の人を見殺しにしなきゃなんなかったものがこの事件にある気がしてならない。

冷静になって今思うと、おっさんは死のうとしてた。最後の晩餐、俺は幸せだった説。お前は生きるといったあの言葉。

やめよう、考えたってきりがなし、俺の脳みそはそういう推測推理とかいう思考に向いてない。どのみちいづれどつかでぼろが出て、真相は明らかになるだろ。

俺はそう言い聞かせて、窓を見た。遠くのほうで、セミが鳴くような音がする。そっか、今はもう……。アガパンサスの北部では多くの小学校、中学が六月の初めから八月の中旬までを夏休み期間にする。ちなみに俺の学校は七月末まで。

せっかくの夏休みだったのに、とんだ災難だな。

窓の向こうには青々とした木々の葉が風でさらさらと揺れ、いつそう夏の到来を引き立たせているように思えた。



その日の午後のこと

「明日、ちゃんとした人がまたお前にいろいろ訊ねに来る。また辛い思いをするかもしれんが、ちゃんと話せば無事に家に帰れるだろうから」

お昼後じいさんにそんなことをいわれた。

「わかり、ました」

「そういえば、お前さんどこに住んでたんだ？」

じいさんが思い出すように行って

「えっと、シテーヌです」

「そうかそうか、あっちじゃ今休みだもんな」

このじいさんは本当に人を疑うなんて考えないような人なんだな。まさに医者の要というか、いやいい人の要か…………。

「何かしたいことはないか？ ただこの部屋にいても退屈だろう？ できることがあったら行ってくれ」

じいさんが俺を気遣うように言った。

今、したいこと…………。



そうだ。

「事故現場に行きたい」

その言葉にじいさんは明らかに動揺したが、深く息を吐くと

「分かった」

優しい顔でいった。

そうして、俺はあの場所に行くことになった。

用意してもらった服を着て、用意してもらった車で、三十分ほどでそこについた。

黒い地面が当たり一帯に広がっていた。爆破した列車の周りや中には、兵士など国の関係者などがある。そして、ところどころあたりには花が置かれていた。

遺族なのだろう、泣きながら花を置いて祈っている民間人も何人か見受けられた。

あたりにはまだ異臭が漂っており、風が服とよりそれが身にしみた。

「大丈夫か？」

一緒についてきてくれたじいさんが心配そうに俺に声をかけ

「はい」

俺は精一杯の苦笑いで答える。

俺は、自分が倒れていたであろう付近の場所に向かった。当然そこにあつた腕はなくなっていたが、いまでも近くに転がっているような気がしてならなかった。

俺はそこに突っ立って

「しばらく一人にしてみらっても、いいですか？」

じいさんに訊ねる。断られるかと思つたが

「ああ、分かつたよ」

じいさんはそういつてくれた。

じいさんが俺から散歩はなれたあと、

「先生つ、さつき連絡が入ってリケ村のほうで急患がつ！」

俺たちを乗せてきてくれた運転手が少し遠くから叫ぶ。

「なにっ？　すぐ行くっ。リュウ、お前も……」

「行ってきてください、すいません、俺もつ少しここにいたいんです」

俺は急かすかのように必死に訴える。そんな俺を見てじいさんは

「……分かつた、必ず迎えに来るから待っていないさい」

仕方ないとばかりにいうと、走って行ってしまった。

俺は呆然と焼け野原のような大地を見つめた。

明日、また誰かが俺のここに来て俺を家に返してくれるようなことをじいさんがいつてた。

これからどうしていいか分からない。家に帰る？ でも、帰ってどうするんだ？ 親が残した金で、どうやって生きていけばいい？ 頼れる親族なんていやしない、他人の手を借りたって結局本当に一人で生きてくしかない。

進学もせずただひたすら働く。前までは別にそれでいいと思っていた。

でも今は、もうなにも分からない。それでいいのか、ひたすら不安になる。考えたくもなかった。

逃げたい、どこか遠く、誰も俺を知らない場所に……。

どうしてか分からないけど、家には戻りたくなかった。あそこは、思い出が多すぎる。

風が吹いた。髪を乱すような強い風が、西から東へ抜けていく。

俺は駆け出した。無我夢中で、まっしぐらに。どこに行きたいのかわからない、どこに向かっているのかも分からなかった。

ただ逃げたかった。今の状況から、今の現実から、少しでも目を背けたかった。

どこを通過って、どこを走ってきたのか、覚えていない。

「うわっ!」

俺は何かに躓き思いつきり転んだ。

そしてようやく自分が森のような場所にいることに気づいた。辺りはもうすっかり暗くなっている。

鳥の鳴き声と、夜風で木々のはがすれる音がして、急に不安が俺を襲う。

夜の森は危険だ。何の準備もなしにはいるなんて無謀すぎる。アガパンサスは魔物モンスターが少ない国だ。首都はほとんど皆無とっていい

らしい。

でも、北部や南部は違う。人の踏み入れない地には、人同様に暮らしている。俺たちはその地を侵すことなく、奴らもその考えは同じらしい、めったに人里に下りることはない。ごくたまに、食糧難の冬などに行き詰って人を襲うケースも少くない。

実際俺の暮らしていた地方ではそういった魔物や、間違つて人里に下りてきてしまった魔物を見たこともなくはなかった。危害を加えないようなら、こちらも手を出さないが、向こうが敵意を示せばこっちもどうにかするしかない。

アガパンサスの魔物は夜行性がほとんどだ。だからこそ、山奥や深い森近くでは夜町や村といった場所以外に行くのは硬く禁じられているところも多い。

俺はよろよろと立ち上がると、近くの大木に歩み寄った。そしてそこに寄りかかって座り込む。

今まで走ってきたであろう疲労がどつと体に押し寄せてきた。息は荒いし、足はパンパンに張っていた。正直、自分のどこにこんな体力があったのか不思議でならない。

俺はあまりに疲労に目を閉じた。呼吸が平常に戻ってくると、意識が朦朧としてきた。そして俺は深い眠りに落ちていった。

それからしばらくして、リュファスのもとにくすんだ緑色の兵士のような制服を着たガタイのいい男が歩み寄ってきた。リュファスは寝息を立ててすやすやと寝ており、まったく起きる気配を見せない。

「なんでこんなところに……?」

男がぼそりとつぶやいた。男はふと、静かに回りを確認した。遠くでちらちら灯りが見える。

「追っ手か?」

男は険しい顔で辺りを見回す。その灯りの様子を見ながら、男は考え込み

「あれは違うな、俺たちとは。もしかして、こいつ追われてんのか?」

じつと男はリュファスを見下ろす。そして、頭をかくとめんどくさそうに

「仕方ねえな……」

ぼつりつぶやくのであった。

「窓から放り出されて助かったわけなんだけど、打ち身とかいろいろあっていつの間にか気絶してた。気がついたら病院で、あの事件に駆けつけてくれた法術士たちによって傷はすっかり治ってた」

リュファスのその言葉にセラフィーナは何故か視線を落とす。そんな様子に気づかず

「その病院で俺を世話してくれたのは人のいいじいさんで、ほんといろいろ世話になった。変な男が俺にいろいろ事件についてずけ訊ねてくるのに意見してくれたりしてさ」

リュファスがいった。セラフィーナはリュファスの方を向いて「いい人、ですね。ところで、変な男の人ってスーツ着て、事件のときの車両に乗ってたかとか聞いて回ってた人ですか？」

セラフィーナのその言葉に

「そう、そうだっ、……セラのここにも来たのか？」  
リュファスは目を丸くする。

「はい……でも私は一緒にいただんな様たちが請合ってくれたからほとんど話してませんけど」

「そっか……。結局、あの事件はランキユロスの過激派の連中がしたってことなんだよ、な？」

リュファスが歯切れ悪くいう。

「はい。そう、聞いています。そのことをランキユロスが恥じて、協定を結ぶに至ったなんていわれてますけど、皮肉な話ですよね」

セラフィーナはどこか冷たくいった。



「そうだな、そういや前もセラソウいつてたよな。もつと早く協定結んでれば、あんなことにはならなかったんじゃないかって。俺も同感だよ」

リュファスが目を細めている。

「……………そのあと、どうしたんですか？ ユファさんは？ 家に、帰らなかつたんですか？」

肩を落とし、小さく息を吐いてセラフィーナがリュファスを見る。  
「……………ああ、帰ろうとすりゃ帰れたのに、俺はしなかった。さっきいつてたじいさんに事件現場連れてってもらって、そこで偶然一人になったとき、あてもなく逃げたんだ」

リュファスは微笑して目線を落とした。

気がつけば、俺は森か林のような場所の歩きの根元に寄りかかっていた。頭上から木漏れ日がさんと当たっていた。

体が鉛のように重いつてのはこのことかな？

そんなことを思いつつ首を鳴らしていると

「ようやく目え覚ましたか」

明るい声が飛んでくる。

まぶしい光に手をかざしながら声のしたほうに目を向けると、短い金髪のやたら筋肉質の男が俺を見下ろしていた。白いタンクトップに、緑のつなぎのようなものを腰まではいているといった格好。年は二十歳はゆうにこえているふうに見えた。

「あんた誰？」

寝起きのせいかついぶつきらぼうにいつてしまった。男はそれに気を悪くした様子もなく

「あんた誰、か。俺はカスパルだ、お前は？」

笑っていった。俺はどうしようか少し悩んだあと

「リュファス……」

正直に答えた。

「そうか、リュファスか。お前、あんなとこで何してた？ 夜の森に無防備で居眠りは感心しねえな」

カスパルに鋭い視線を送られ、俺は下を向いて黙り込む。

「ま、いいたくないなら無理にきかねえけど」

そういうと俺のほうに近づき、

「立てるか？」

しげしげと俺を見る。

俺はこくりうなづくと、すつと立ち上がった。

「お前、まさかとは思うが、この森に住んでんのか？」

カスパルとかいう男は苦笑い気味に俺に訊ねる。俺は勿論首を振って

「いいえ」

正直に答える。

カスパルはその答えに息を深く吐きながら

「だよなあ……、奥には魔物モンスターもちらほらしてるこんなとこに住んでるわけねえよな。もしかして遠くの町か村に住んでたのか？」

その問いかけにも俺は首を振る。そして

「ここは、どこですか？」

疑問に思っていたことを口に出す。

男の話からして、どうやら俺が無我夢中で走って寝てしまっただけで一晩しかたつてないらしい。がむしゃらに走り続けたとはいえ、あの場所からそれほど遠くに来ているようには思えなかった。

カスパルはしばらくはやら考えられているように黙っていたが

「ここは、ウォリード樹海の北の端だ……」

はつきりと口にしたその言葉に

「ええっ！」

俺は驚きを隠せなかった。

ウオリード樹海。アガパンサスの東、中央よりやや北からやや南にかけて広がる緑の大海原。ランキユロスとの国境沿いに広がる。それは、アガパンサスに暮らす人で知らない人は少ない。

未開の地、自殺の名所、モンスター魔物の巣窟、冒険者たちの憧れの地。いろいろいわれてはいるが、アガパンサスにとって貴重な自然であるのも確かだ。

でもまさか、そこに自分がくるなんて思いもしなかった。

あの列車が爆発したのは、アガパンサスといういびつな四角形の国のど真ん中よりやや北西部。俺がいたあの病院はもう少し南にあった。といっても地図上ではほんの少しなんだろうけど。

ということはだ……。俺は思いのほかだいが東へ来てしまったらしい。

臍をかんでいると

「驚くのはこつちだ。そんな場所に野宿してる馬鹿がいたんだから」男ががさつに笑っていた。

「なに大声出して笑ってやがるっ！」いきなり、男の声が飛んできた。

カスパルのでかい図体から右へ顔を出すと、カスパルの少し後ろにカスパルと似た格好のスキンヘッドの三十路は越えていそうな男が立っている。

その男が近くに来たことを俺は全然気づかなかった。気配なんて微塵も感じられなかったのである。

男の青い瞳がざらりと光って俺をとらえた。

「やっと目え覚ましたのか」

呆れるように男はいつて

「ああ、ついさっき」

カスパルが即答する。

男は俺をじつと見ていたが、肩を落として溜め息をつく

「やっと車が調達できた。とりあえず行くぞ」

そういうと踵を返してさっさと行ってしまった。

俺が呆然としていると

「リュファス、お前もこい」

カスパルのその言葉に我に返り、俺はよく分からない不安を胸に二人についていった。

ついた先は、樹海の出口だった。俺が足を踏み入れたのは樹海のほんの入り口付近だったらしい。

土気色の荒れた大地と、所々に緑のある光景が樹海を出ると広がっていた。

そして、一台のおんぼろの大型車と数人のまたもやカスパルと同じような格好の男たちがいた。全員どこか鍛えていると思われる体つきで、何故か興味深そうに俺のほうをじろじろ見てくる。

白ひげをはやしたどこか威厳ある男が

「で、カスパル、助けたはいいがこの坊主どうする気だ？」

カスパルに向けて怒鳴る。

「それが隊長、どうするか、俺も悩んでるんですよ。ここらへんに住んでたわけじゃないし、自分が樹海にいたってことすらわかってなかったみたいで」

カスパルのその言葉に周りがどよめく。

「お前、ここの国の人間だな？」  
白ひげが俺を見据えていった。

「はい」  
怖気づきそうになるのを抑えて俺はいう。隊長と呼ばれたこの男はどこか威圧感があった。

「家はどこだ？ 家族は？」  
白ひげの灰色の目を反らすまいと思っていたのに、その質問に俺は目を伏せ

「家はありません、家族は……、家族もいません」  
心が凍る思いでいった。

帰る家がないわけじゃない。でも、どうしてやはりあそこには帰りたくなかった。

俺のこのどこか曖昧な答えに深く追求されるかと思っただが、  
「そうか……、で、お前はあそこでなにしてたんだ？」  
意外にも白ひげは質問を変えただけだった。

「よく、覚えていません。走り続けて気がついたら、ここにいました」

俺が正直にそういうと、周りから  
「いいねー、青春だよ」  
とか

「自分探した、自分探しっ！」  
などという言葉が聞こえてくる。

白ひげはただ俺をじっと見つめていたが、  
「お前はこれからどうする気だ？」  
静かにきいた。

俺は一瞬眉をひそめる。  
「お前は一体どうしたい？」  
白ひげがまたいう。

俺は、どうしたいのだろう？ 何がしたいのだろう？

ここまで、現実から逃げたいという一身でただ走ってきたのは間違いない。

でも、逃げてどうしたいんだ？ 逃げて逃げてただ、それだけか？

違うよな。一生逃げるなんてできないし、馬鹿げてる。

それでも、今は逃げたい。あの現実から少しでも目を反らしたい。遠くへ、誰も俺を知らない、俺もなにも知らない、まだ見たことのない遠くへ……。

「遠くに、行きたいです。できるだけ、遠くに……。」

俺は思い切ってそういつてみた。

場が一瞬にして静まり返る。

「あてはあるのか？」

白ひげの的を得たような言葉に俺はうつむいた。

「途中までなら、連れて行ってやるが来るか？」

白ひげのその言葉に俺は耳を疑った。

「隊長っ！」

カスパルの喜ぶような声が聞こえ、周りがどよめく。

白ひげは俺を厳しい表情で見つめたまま

「あくまで、途中までだ。それでもいいなら俺たちと来いっ！」

力強い口調でいった。

……この人たちが何者か知らない。いいやつらか悪いやつらかも……

でも、信じていい気がする。右も左も分からない今、こうして自

分を見捨てずにいようとしてくれる人たちがいる。

「お願いしますっ」

俺は生まれて始めてくらいにちゃんと頭を下げた。少ししてから恐る恐る顔を上げると、白ひげが俺を見て笑っていた。

でも、その顔は急に厳しくなり

「ただしこちらの条件は飲んでもらうぞ。さっきいったようにあくまで少しの間面倒を見るだけだ。一生俺らについていけるとは思わない。あと自分勝手な発言や行動は控えてもらう、お前もそこまで子どもじゃないから分かっているだろうが。そして最後に、俺たちの詮索はするな。俺たちが何者かとかそういう質問は絶対するなよ。これはお前のためでもある」

一気にいった。

俺は今いったことを頭の中で何度も繰り返して、心を落ち着かせてから

「はいっ、わかりました」

はつきりといった。

白ひげは俺の顔を見てなにやら考えているようだったが

「そっぴいやお前名前は？」

ふと思いつ出したようにいった。

「リュファス、です」

「リュファスか、俺のことは隊長でいい。おめーら、そういうことだっ。とりあえずみちくさくってないで、早く行くぞっ」

白ひげがそういうと周りの男たちは、白ひげに威勢良く返事をし次々に車に乗り込む。

俺がそんな光景を見ていると

「よかつたな」

カスパルを呼びにきた男が俺の横で無表情にいった。続けて

「カスパルに礼いえよ。あいつがお前拾ってきたんだから」

そっぴい残しさっさと車へ行ってしまった。



俺はくるりと後ろを振り向き、そこにいた男に

「助けてくれてありがとうございました」

遅くなった礼をいった。

カスパルは腕組みをしながら満面の笑みで

「どういたしまして」

満足するようにつた。

「また死人の名が増えてるぜ」

俺が偽った両親の名が新聞に刻まれたのはあの男のやり取りがあった二日後のことだった。

313

車の中であるある男が、今朝買った新聞を読みながらぼそりそうつぶやいた。それを耳にして俺は

「その新聞、あとで貸してもらってもいいですか？」  
思わず口からそう言葉にしていた。

新聞を持っていた男は、俺に目を向けると  
「いいぜ、ほらよ」

笑顔で俺にすぐ新聞を渡してくれた。

「ありがとうございます」

いふなり俺は、すぐに記事に目を送る。

記事を所々飛ばしながら読み進めていくと、その中にそれはあった。死亡した者の名の中に、俺があつた男にうそをついていた両親の名が刻まれていた。

一応生存者の名が連なる欄も見てみたが、俺の偽名があつただけだつた。

不思議な男たちと同行することになって、だんだんとあの事故の辛さも和らいでいっていく気がした。

男たちは思いのほか俺を快く受け入れてくれた。男たちが何者かはいまだよくわからなかったが、いい人たちなのだ、そう思わずにはいらなかった。俺の勘がそう告げていた。

彼らは決して俺に関する深い質問はしないが、かといってまるまる俺の存在を無視するわけでもなく、気を使っているとは思えない。気遣いが、今の俺には心地よかつた。

そんな俺はただ何もせず一緒にいさせてもらっていたわけ

はなく、さまざまな雑用をこなしていた。よくわからない部品を磨いたり、食事の支度をしたり、一番多いのはなぜか買出しだった。昨日は、小さすぎず大きすぎずといった町で様々な店をはしごした。それこそ食料品から日用品や使い道がよくわからないものまでとめておいたある車と町を何往復もした。それは一人だったり、男たちの誰か一人が何故か代わる代わるついて来たりしたが、持つ量は半端じゃなくさすがに昨日はへとへとになりぐっすりと眠ることができた。

俺がそんなことをしている一方で、男たちは筋トレをするもの、見たこともないようなあらゆる武器を磨くものや、ひそひそ声で深刻そうに話をするものたちなどがほとんどだった。

ある日のこと、ある宿場町で割のいい仕事が入ったとかで何人かの男たちがどこかへ出かけていった。車は待ちの近くの人がこなそうな森の中にとめ、俺や残った男たちは出かけていった男たちを待つことになった。

今日は特に任される雑用もなく、ひんやりとした車の中で俺はぼうつとしていた。

この車は、前に運転席と助手席に二人乗れる場所があり、後は運転席などの部分に無理やりくつつけたような本来は荷物などを載せるであろう長くてでかい箱がついているといったようなものだ。運転席か助手席のいずれかには必ず隊長と呼び慕われるあの白ひげを生やした男が乗り、あとはほとんどが箱づめにされる。

箱づめといっても、そこまで悪いものではないクーラーが何かがきいているのかこのじめじめとした夏でも快適に思えるし、床にはクッションみたいなものが敷いてあって、座っていても横になってもさほど辛くはなかった。男くさいにおいと隅に積み上げられてい

る荷物からである。金属のにおいが混じり独特なにおいが充満することもあるが、そこまで気にはならなかった。

俺が暇のあまり、口を大きくあけてあくびをすると、外からシュツシュツという奇妙な音が聞こえてきた。

気になって外に出てみると、ある男が研ぎ石で包丁やら剣やらあらゆるものを研いでいた。俺は静かにその男の近くへ行つて、邪魔にならないようにその光景を静かに観察した。

「そんなに夢中になつてあんなの見るものか？」

ふと背後で声がした。

振り向くとカスパルが立っていた。いつものニコニコ顔で

「もしかして見るの初めてとか？」

カスパルが俺に訊ねた。俺は首を振つて

「いや、初めてじゃないけど、なんか懐かしくて」

そう答える。

「そうか……」

カスパルはそれだけいうと、いろいろ研いでいる男の横へ行つて、こいといわんばかりに手招きした。俺がいつてみると、ちょうど男が研ぎ終わったところだった。

「お疲れさん」

カスパルがそういつて男にねぎらいの言葉をかけ

「あー、疲れた」

男ががつくりと肩を落とした。

無理もない。横には半端じゃない量の様々な刃物などが山積みになつていた。

ふと、山積みになされている中のある一本に俺は目がいった。

「まったくいつもこいつも手入れがなつちやいねえんだから」

男がそう文句を言いつつ肩をならす。

カスパルが微笑しつつ、俺はひざ立ちになつてそれをまじまじ

と見た。

そんな俺に気づいたのであるう

「どうした？」

カスパルが俺と同じようにひざ立ちになって武器の山を見る。

「これ……」

俺がそれを指差すと

「ああ、それに目が行くとはお前も意外と見る目あんのかね」

カスパルが意味深に笑う。近くにいた男も

「それだけの値打ちがあつて腕もあるつてのにあいつはしっかりして  
てそうで武器の手入れができねんだから……」

そんなことを口にした。

誰のことをいつているんだろう？

そう気になったが、視線は自然とそれにいった。

俺が目を釘付けにされたのは、武器の山の上にちよこんと乗った、  
二本の似た三〇センチほどの鞘に収まったものだった。鞘や柄には  
細かい装飾がなされ、ところどころに本物かはわからないが宝石ら  
しきものがはめ込まれている。

「これってなんていうんですか？」

俺の質問に

「ダガーだ」

カスパルでも近くにいた男でもない声が飛んでくる。

振り向くと、いつの間にか青い瞳に髪の毛のない頭をしたあの男  
が立っていた。相変わらず、この人だけではないが、みな気配を消  
すのがうますぎる。足音すらなかんか立てない。

ああ、なるほどね……。俺は一人納得した。

確かにこの人物はしつかりしてそうだし、現にしつかりしている。でも、先ほどきいたように手入れはからっきしと……。そうか、この人が持ち主か。

「ダガー」

俺はそう口に出し、またそれに目を送る。

そんな様子を見てか

「何だ坊主？ この武器そんなに珍しいか？」

青い瞳の男がいつて、俺がこくりとうなずくと

「ちよつとばかり、教えてやろうか？ 今後のためにも」

その言葉に俺はうれしくなった。俺は思わず

「はいっ！ お願いします」

即答してしまう。

それにはカスパルたちは目を丸くして驚いていたが、

「そんじゃ俺もいつちよ手伝いますかね、どーせ暇だし」

カスパルがそういつて伸びをし

「ま、無茶はさせんなよ」

そういつて男は武器の山の片付けに取り掛かった。

そうして俺は戦いの手ほどきを初めて受けることになったのである。

「逃げたって……」



セラフィーナの瞳がじつとリュファスをみつめる。

「うん、ただひたむらがむしゃらに走った。とにかく、どこか遠く俺のことなんて誰も知る人のない遠くに行きたかったんだろうな・・・。あんなことのあとだし。正直なところ、そのときのことよく覚えてないんだ。気がついたら、ウォリード樹海の森で眠ってた」

リュファスが苦笑い気味にいつて

「ウォ、ウォリード樹海つて・・・。よく、生きて出られましたね」

セラフィーナが驚愕していった。リュファスがほほえみながら「つつても、樹海の端だったからな。それに、運よく通りかかった人が俺を見つけて保護してくれて、どうにかなった。それでもほんと、馬鹿なことしたなって思ってるよ」

「・・・でも、本当によかったですね。その人が見つけてくださって」

セラフィーナの言葉に

「・・・ああ、ほんと、今でもすごい感謝してるよ。その人が見つけてくれて、俺はその人の仲間と連れて行ってもらうことになった。病院にも、ましてや実家にさえ戻れない俺を、その人たちは理由も詳しく聞かないで面倒見てくれた。ほんつとうにその人たちと過ごした毎日は楽しかった。それこそ、あの事件を忘れさせてくれるくらい。でも、そんな日々は長くは続かなかった。別れはあつという間に来た」

リュファスが上を向きながらいつた。

そう、楽しいことは長くは続かない。別れはあのとときの俺にとっ  
てすぐに訪れたのだ。

カスバルたちに一緒に連れて行ってもらうことになって、あつというまに数日が過ぎた。

毎日ひたすらに車を走らせる毎日。あの樹海からどうやら東、つまりラナンキュロスとの国境沿いに向かい、あとは国境沿いに沿って北へ向かうようだ。町を点々とする中で、自然とそんな考えが俺の頭には浮かんでいた。

ある日のこと、カスバルとある小さな村で買出しに来ていたとき「みんな買い物嫌いなのか？俺ばかり行ってるけど。俺は別に嫌じゃないけどさ」

ふと、そんなことを口にしてしまった。

カスバルは苦笑い気味に

「お前は顔が割れてないからなあ」  
ぼそりとつぶやいた。

それが、妙に俺の頭から離れなかった。

カスバルのいつていたこと。それはつまり、やはりこのものたちはただの民間人ではないことを示唆している気がした。あまり表に顔を出せない。そんなのいくらでも空想で理由がつけられる気もした。

例えば、過去に何かしらやばいことをして追われているか・・・

考えれば考えるほどいろいろなことが思い浮かぶ。やけにみな体格がよく、普通の人では知らないような専門的な知識を持つものもいる。

厄介ごとに首を突っ込んだり、巻き込まれたりする可能性はなくてはならないはずだ。

でも、やはりそこまで悪い人たちには思えなかった。思いたくなかったのかもしれない。

そんな思いを胸にその日は過ぎていった。

その翌日。

薄暗い森の中で、木々から鳥たちがあわただしく空へ舞い上がった。

俺はそんな森の中で小さなため息をつき、

「お前、銃のほうはからつきしだめだな。こりゃ弾の無駄だ」

そういつて横にいたカスパルが、俺の両手に握り締めていたものを俺の手からとる。

「俺もそう思う……」

カスパルの言葉に俺は反論できずに同意した。

俺の視線の先には、俺のまっすぐ前の木にある的から大きく外れ、両隣や近くの木にめり込んだ銃弾が目に入る。

俺がダガーに興味を持ったあの日から、男たちの何人かが俺に稽古といえいいのか、一応戦い方を教えてくれるようになった。

ダガーのほうはいろいろ教えてくれる、あの青い瞳の男の教え方

がうまいのか正直最初よりはましになってきた。ほかに剣やら体術やらいろいろ教えてくれるのだが、男たちはともかく俺の体がついていけない。最近はぐっすりと夢も見ずに眠れるようになっていた。

そして今日、これが初めてではないのだが、何かのときのためにということ、また銃の練習に来ていたのだが、思ったとおり、うまくいかなかったわけである。

初めて銃を持たせてもらい、引き金を打つまでは楽しく思えたが、実際にうってみると自分の腕が悪いせいもありさほど楽しくはなくなってきた。

どちらかといえば、俺は剣などのほうが合っている気がする。

「さてと、そろそろ帰るぞ」

カスパルがそういつて歩き出し、俺も歩き始めた。

車のほうに戻りながら

「……、リュファス、お前これからどうする気だ？」

いきなりカスパルが俺に聞いた。

「えっ？」

俺は思わずそう聞き返してしまう。

それにはカスパルは苦笑い気味に

「これからだよ、これから。一緒に連れて行きたいのは山々だけど、そうはいかないからな」

「あ……」

カスパルのその言葉に俺は動揺を隠せなかった。

そうだ。この人たちとはずっと一緒にいられるわけじゃない。最初にそう約束したじゃないか。

それなのに俺はこの人たちといるのが当たり前になっていて、楽しくて、すっかり忘れていた。これから先も一緒にいられる気にな

っていたのだ。

できることなら、そうしたかった。でも、カスパルの言葉からも伺えるようにそれは無理な話なのだろう。きつと。それを口にすることはきつと、本当のわがままでしかないのだ。この人たちはそれを望んでないし、きつとこの人たちにとってもなにか都合の悪いことなのだと思わされた。

本当にどうしようか？

行く当てはないし、やりたいこともこれといって特に思い浮かびそうにない。

ただ、誰かの手を借りずちゃんと一人で生きていければ今はそれでいい気がする。いつか、そうなるはずだったし、それがきつと早まっただけなのだから……。

「で、何にも考えてなかったのか？」

カスパルが俺の心と呼んだかのようにいつて

「……とりあえず、どこか働かせてくれるところを探そうと思っ」

俺はついそう口走る。

カスパルはそんな俺の言葉に

「そうか……」

それだけしかいわなかった。

そしてその翌日から俺は村や町で住み込みで働かせてもらえるところを探すことになった。いろいろあたってはみたのだが、そんなうまい話は転がっているわけもなく、またあつたとしても男たちからそこはやめとけと釘を刺される始末。

考えてみれば、この国はアルバイトなどでもたいていは十五からなどで、俺の年で雇ってくれるところはそうそうない。おまけに住

むとこもないとくれば、まさにダメの連続である。

そうして行き先がわからないまま、その日はやってきたのである。

その日はただひたすら、森の中の狭い道を何とか走っていた。俺はいつたいたどこへ行くのだろうと思いつながら、車の中でゆれていた。そして、お昼ごろになるころ、車は急に止まった。

「おいお前らっ、降りて来いっ」  
隊長の声が飛んでくる。

俺は何事だろうと思いつながら、男たちの後に続いて車を降りた。  
全員がおり終わると

「リュファスッ」

隊長が俺を呼んだ。

俺は返事をして不安を覚えながら隊長の前に行く。  
隊長はすつくと俺を見下ろしながら

「ぼつず、お前を連れてけるのはここまでだ」  
そういった。

悪い予感が見事に的中した。

こつなることはわかっていたことだが、それにしても何も知らさ  
れずにこんなところに放り出される羽目になるとは思っても見なか  
った。こんなことなら前の村で置いてけぼりにしてくれたほうが数  
十倍ましだった。

そんなことを考えていると、隊長は右手にある細い獣道を指差し  
ながら

「ここからまっすぐいけばランンキュロスに行く。お前ぐらいの年  
の奴にでも仕事をくれる国だ。どこかに行くならランンキュロスに  
しろ」

俺をまっすぐ見ていった。

その言葉に俺は胸が詰まった。

覚えていてくれたのだ。俺がこの人にはじめてあつたとき、どこ  
か遠くに行きたいといったことを。

そして、俺が働けることを探していることも考慮してこの人はこ  
ういつている。

それが痛いくらいにわかり、俺は言葉がすぐには出そうもなかっ  
た。

「それからほら、これもってけ」

そういつてカスパルが俺になにやら重そうなかばんを突き出した。  
「数日分の食料と、少しばかりだが金を入れといた、無駄遣いすん  
なよ」

カスパルが笑顔でそういつて

「あと、お前が気に入るようなものも入れておいてやった」  
ぼそりと俺の背後でいつたのは、あの青い瞳の男だった。

「俺は絶対銃のほうがいいと思うんだけどなあ……」  
誰かがそんなことをいつて



「でもあの腕前じゃな」  
また誰かがそんなことを口にする。

俺はいつたい何のことだろうと思いつながら、首を傾げていると

「まあ、みてみりゃわかる」

青い瞳の男が無表情でいった。

そして

「話はそのくらいにしといて、さっさと行くぞ。リユファス、お前もいうこといつて早く行け。お互い、別れが惜しくなる」

隊長がそんなことをいつて俺はとうとう

「本当に今までありがとうがとうございました」  
頭を下げた。

数秒後頭を上げると、今まで見たこともない笑顔の隊長の顔があった。

「ああ、達者でな。お前のやりたいと思うようにやって、くいのない生き方をしろ。……日が暮れるまでに、早く行け」

「短い間だったけど楽しかったよ、元気でな」

カスパルがいつて

「俺のこと助けてくれてありがとうございました」

俺はまたカスパルにお礼をいう。

そして

「じゃあな」

「立派な大人になるんだぞ」

そんな掛け声をかけられながら、

「みなさんもお元気です！」

そういつてまた、深々と頭を下げると、俺は一目散に走り出した。

少しして背後で車が発進する音が聞こえ、俺はふと立ち止まりおそれるおそれる後ろを振り返る。

もう、車は見えないしきつとすでに走り出していることだろう。

俺は引き返すことなく細い土肌の道を進んだ。

これでよかったかはわからない。言葉もよくわからない国へ何の準備もなく突っ込んでいくなんて、前の俺には絶対にできないことだった。

でも、今は違う。

どうにか、なる気がした。

ついこの前、両親が死んで、右も左もわからなくなった。そんな俺に親切にも手を差し伸べてくれたのは紛れもない彼らだった。

できることなら、もっと一緒にいたかった。本当に毎日が楽しかった。今まで知らなかったようなことをいろいろ教えてくれて、事件のことを忘れさせてくれるくらい充実した日々をすごせた。

感謝してもしきれない。

ふと、俺はかばんの中を空けてみた。中には日持ちしそうな、食料がぎっしり詰め込まれあとは生活に必要なものもあらかた入っていた。そして、底のほうに手を伸ばすと、それはあった。

二本の対になった、装飾はそれほど施されていないシンプルな三十センチくらいの細長いもの。

俺が練習用に使わせてもらったダガーである。

このダガーは鞘と柄に細工が施されていて、ただでは鞘が取れないようになっていて。あの人が俺に丁寧に教えてくれたことだ。

思わず涙がこみ上げてきそうになる。

彼らとの日々が次々と思い出された。

本当に楽しかった。それ以外の言葉が見つからないくらい。

俺はダガーをかばんに戻すと、一心不乱に走り始めた。

ラナンキュロスまでどのくらいかかるのかわからない。この道をただひたすら行けばいいかも確かじゃない。

でも、向かわなくちゃいけない。

きっともう、この国に俺の居場所はない。そんな気がする。

だったら、この国にもうようはない。未練がないといったらうそになるけど。

とりあえず今は、この決心が揺らがないように走ろう。前へ、と  
にかくどこか、そうだ、どこか遠くへ……。

「もともと、少しの間つれてってくれるって約束だったし、仕方のないことだったんだけど。その人たちといた日々が楽しすぎて、ついそんなこと忘れてずっと一緒にいられる気になってた。だから、別れるのはちと辛かったかな。それで、まあ結局その人たちとは別れて、俺はとりあえずその人たちのおすすめもあってランンキユロスに向かったんだ。住むとこと働き口を求めて、この国じゃもう見込みはなさそうだったから」

「そう、だったんですか……」

セラフィーナがいつて

「ああ、まあ、正直そんなときは本当にどうしようか迷ったしたためらったけどな、言葉もろくにわからない国へ行くなんて  
リユファスが苦笑いする。

「そう、ですよ。ユファさんは、すごいです。私なら多分できな  
かった」

セラフィーナが目を閉じながらいうと

「どうだろうな、俺だつてもしかしたらこの国に出戻つてたかもしんねーし。結局なるようになったって感じだよ」

リュファスが目を細めながら言い返す。続けて

「それに、やっぱいいことばっかりじゃなかったし……」  
ぼそりとそんなことを口にする。

セラフィーナはただ黙つてリュファスを見た。

「世の中プラマイゼロとはいったもんだよな、悪いことがあつていいことのアトには、やっぱりそういいことは続かない。俺の場合もそうだった。無事にラナンキュロスへ着いたはいいものの、最初に会うべき人が悪かつたんだ……」

公園では、ぼちぼち帰る人が見受けられる。

そんな中、リュファスはまた語り始めた。

カスバルたちと別れてから、だいぶ時間がたった。日は傾き、鳥たちの鳴く声が聞こえ、空はオレンジ色に染まっていた。

隊長に勧められた獣道を進んでいたものの、途中でその道は案の定とぎれており、俺はとにかくまっすぐ突き進むことにした。藪をかき分け、小川をこえ、とにかく前へ前へ進んだ。

途中、魔物が出て気やしないかとひやひやすることもあったが、そのときはそのときだと腹をくくり、一応少しは警戒して歩みを運ぶ。

それからどのくらいたっただろうか？

途中お腹がすいて、歩き続けながら軽い食事を取り、少しは歩力力が戻ったが、それでも夏とはいえまだそこまで真つ暗ではない夜を一人で過ごすことになると思うと恐怖を感じた。

とにかくどこか人のいる場所に着けば………。

そう思いながら、月夜の中をただひたすら進む。

モンスター 魔物は、冬食糧不足になったり、迷子になったりしなければめつたに人里に下りてこない。たいていパンなどの食糧を魔物が住んでいたであろう森の中に放つてやれば、自然と森に帰っていく。

モンスター 魔物は確かに知能の低いものもいるが、たいていはそこまで馬鹿じゃない。やつらは森や山奥で暮らし、やつらのなかで自分たちのテリトリーはここまで、ここは人間たちの住んでいるところと、認識しているものがほとんどだとある学者がいつていた。

人間を襲つたり、食べたりする好戦的なものも少なくはないが、アガパンサスではそういった魔物はそこまで多くない。むしろ魔物モンスター自体、見ることのほうが珍しいほどだ。

俺は実際目にした事がないわけじゃないが、ほとんどが何か食べ物を入れてやるなどすれば危害を加えないやつらばかりだった。ごくたまに凶暴なやつが現れたこともあったが、そういうのを対処する仕事のやつらが追っ払ってくれて、実際に襲われたり、戦ったことはない。過去に小さなまだ子どもであろう魔物モンスターに小石を投げつけるなどしたくらいだ。

途中近くでガサガサツとする音が聞こえたが、特に何もなかった。一応すぐにダガーを抜ける状態にしているが、やはり気は抜けない。

やがて、目の前のほうにちらほら明かりが見えてきた。

俺は期待を胸にその方向へ駆け出した。すると、やがて森は終わりを向かえ、広い草原のような場所に出た。

少し遠くには教会の様な建物が見える。

俺はその教会のような場所に向かい歩き出した。草のにおいがむっと広がり、じめじめとした空気が漂う中を俺は進む。

そして、教会の囲いである丸太で作られた柵に寄りかかると、俺は安心したのかそこに座り込んでしまう。今までの疲れが急にどつと遅い、眠気も襲ってきた。

ここ、なら、多分大丈夫、だよな？

そんなことをうとうと考えながら、俺は深い眠りに落ちていった。



その日の翌朝、村では鶏や鳥のさえずりとともに朝がやってきた。教会らしき建物から、一人の女性が出てくる。妙齡の女性で、シンブルなワンピースに花柄のエプロン姿。ミディアムほどの長さの明るい茶色の髪は、細かくウェーブがかかっている。

女性が出てくるなり、大型のふさふさした薄茶色の毛をした犬が吠えながらやってきた。

「あらあら、どうしたの？」

女性がにつこりと犬に訊ねる。犬は二三回女性に軽く吠えようと、女性のワンピースのすそを軽く噛んで引っ張ってから、着いてこいといわんばかりにゆっくりと歩き出した。

女性は、おもしろそうに犬についていく。

犬が向かった先は教会の真裏だった。そしてそこには、少年がぐったりと柵の横で横たわっていた。犬は少年の近くで座り、くーんと女性を見た。女性は少年の目の前に来て、膝を落とすと少年の前髪をあげてみた。少年はまったく起きる気配を見せず、静かに寝息を立てている。

そしてほほえみながら

「あらあら、なかなかきれいな顔」

そういって、少年の顔を手のひらでなでていた。

気がつくと、俺はベッドの上にいる。かすかに子どもの声やピアノの音が聞こえる。

少しくすんだ白い天井や壁紙、左右を向くと俺の寝ているもの以外のベッドが並び、どうやらここは寝室のようらしい。俺はだるい体を起こし、伸びをした。

そして、記憶をたどってみる。

確か、無事に森から出られて建物の近くまで行ったことまでは覚えていてる……。ということとは、そこからどうやら俺は気を失う、というよりは安心して寝てしまったらしい。

でも、それなら俺は外で寝てるはず……。誰かが俺に気づき親切にもこうして赤の他人を寝させてくれたのは間違いない。ほんっと、俺ってついてるんだかついてないんだか……。とりあえず、感謝してまじいということはないだろう。

そんなことを思っていたときだった。

ノックなしでいきなりドアがバンツと開く。  
俺はびっくりしてドアのほうを見た。

「あー、起きてるーっ!」

まだ五歳にも満たないような男の子が俺を指差し、男の子の隣にいる同い年くらいの少女が猫のようなぬいぐるみを抱えたままじつと俺を見ていた。

そして部屋に入ってきたのはもう一人、

「誰かの部屋にはいるときはノックをしなきゃだめでしょう？ それに人に指をさしてはいけません」

若い女が男の子に優しい口調でいった。

男の子はそれに対し

「はい」

一応元気よく返事をする。

女はそれを確認すると俺のほうに顔を向け

「ごめんなさい、ノックもなしに」

申し訳なさそうにいった。

「いえ……」

俺はとりあえずそれだけいう。

三人はベットの近くまで来て、子どもたちは俺を興味津々な目で見つめ、女の人は困ったように

「気分はどう？」

そう訊ねた。

「大丈夫です」

「そう、ならよかった。ところで……こんなこといきなり聞きたくはないのだけれど、あなたこの国のものじゃないわね？」

女はやんわりとした口調で、しかし俺をまっすぐと見ていった。

その質問に俺は思わずどきりとする。

そつだ、もうここは俺のいた国ではないのだ……。

そんな俺の動揺が態度に出てしまったのだろう、

「どうやら凶星、みたいね」

女が困ったように笑った。続けて

「安心して、別にどうこうするつもりはないから。戦争中っていつでもこの国の人はみながみなあなたの国の人間を敵視してるわけじゃないし……。まあ、あなたたちのほうはどうかかわからないけど」

はきはきといった。

そんなものなのだろうか？

確かにアガパンサスのものはいまやほとんどがラナンキュロスの人間をそういつた目で見てるのは間違いないのに、こっちはこうも違うのだろうか？

そう考えていると

「それに気づいてないかもしれないけど、私たちさっきからアガス語しゃべってるのよ」

女が面白そうに笑う。

「あっ！」

そうだ、ここは確実にラナンキュロスであることに違いはない。

ということとは、言葉も確実にラナ語……。

でも、どうしてこんなきれいにアガス語こいつらしゃべってるんだ？

「ここはわかってるかもしれないけど、アガパンサスとラナンキュラスの国境だね。戦争前からもとアガパンサスとは交流があった場所なの。だからこの村ではアガス語をしゃべれる人も多いわ」  
質問する前に女はてきぱきと解説してくれた。

「そう、なんですか……」

「ええ、戦争になつてから交流はほとんど途絶えてしまつたけどね」  
女は苦笑い気味にいう。

確かに考えてみればそういうことはありえなくもない。それに俺がここに来るまでにたどつた道の途中、以前は使われていたような道のようなものも多く見かけたじゃないか。

俺が大きく息を吐くと、女の子が近づいてきて俺に板チョコのようなものを差し出した。俺は急なことにどうしたらいいかためらっている

「ふふふ、あげるそうよ。もらつてあげて」  
女の人がそう助け舟を出してくれた。  
俺はとりあえず

「Merci beaucoup」  
板チョコを受け取つた。

女の子は大きな瞳で俺をじつと見つめたまま

「Derrien」  
無表情でそういつた。

「さ、二人ともみんなと一緒に外で遊んでいらっしやい」  
女の人にそういわれ、

「はい、じゃあね、おにいちゃんっ！」

男の子が元気よくいつて、女の子もまた俺を一度見てから部屋を出て行つた。

少しして

「それにしてもびっくりしたわー、教会の裏で寝てるなんてね」  
女の人がしげしげと俺を見る。

「はい、あの、いろいろとありがとうございます」  
俺がいまさらながらにそういつと

「困つたときはお互い様。それに一番感謝すべきなのはジャンね、

あ、ジャンっていうのはここで飼ってる犬でね。捨て犬を子どもたちがどうしても飼いたいってせがんで。とても利口なのよ、あなたを最初に見つけて私に知らせてくれたの」

女の人は楽しそうにいった。

「そう、なんですか……。あの、ここっていったいどういった場所なんですか？」

「ここはさつきもいったけど、国境の小さな村よ。それでもって私たちのいる場所は確かに教会んだけど孤児院でもあってね。さっきの男の子はアガパンサスの戦争孤児なの。女の子はランキユラスのほう……。ほかにもいろんな事情でここにいる子どもたちがほとんどよ」

女の人は伏し目がちにいう。

そうか、だから男の子はアガス語を……。

「ところで、私も質問いいかしら？ いいたくないことはいわなくていいから。あなたはどのようにしてここへ？ これからどうするつもり？」

気遣わしげに女の人がいった

「……、ここへはもうアガパンサスにはいることができないくて、来ました。これから、どこか働ける場所や住む場所を探そうと思っています」

「……そう。ねえ、あなたラナ語はしゃべれるの？」

「正直まったくといっていいほどしゃべれません」

俺が首を振ると

「……もし、あなたがよかつたらここに住まない？ もちろんただでというわけにはいかないから、今人手も足りない子どもたちの世話を手伝ってもらえたらすごく助かるのだけれど。それに、ここにいればアガス語でもあまり不自由しないし、だんだんラナ語も身につくと思うの、ね？ どうかしら？」

女の人が実に優しい笑顔でいって、俺は思いがけない誘いに黙り込む。

こんなにとんとん拍子にうまくいっていいものだろうか？  
でも、断る理由もないし………。

いいんじゃないか………。この女の人のいうようにラナ語は覚えなきゃいけないし、住み込みで雇ってくれるというのだから。

それに、俺も孤児といえはそうなるのかもしれないし………。

「あの、俺でよかったらお願いします」  
俺は深く頭を下げる。

少したつて顔を上げると女の方は満面の笑みで

「こちらこそよろしくね、あ、自己紹介が遅れたけど、私はこの経営者のバルプロよ」

右手を差し出す。

「リュファスです」

そういつて握手した。

「リュファス、いい名ね。あなたにぴったりの名だわ」  
バルプロはそういつてまたほほえんだ。

この選択が過ちになることをこのときの俺はまだ予想もできなかった。



「じゃあ、とりあえず今日はこの子たちの相手をお願いね。そのあいだに私は掃除とかしてるから。何か困ったことがあったらすぐ呼んでね」

そういつてバルブロは行ってしまった。

俺がいるのは教会裏に広がる草原のような場所。俺がここにきたときに歩いたであろう場所だ。草原では子どもたちが思い思いに遊んでいた。

軽く身支度を済ませたあと、早速仕事を任されたわけだが、小さい子どもの相手なんて正直何をしてもいいかわからない。三歳くらいの子から、上は十歳くらいのもまでいる。

とりあえず、年近いやつらは思い思い好きなことしてるみたいだし勝手にしてもらおうとして……、問題はもっと小さい子たちだよなあ。

そんなことを考えながら頭をかく。そして目を閉じてため息ひとつはいていると

「おにいちゃんだあれー？」

いきなりアガス語で話しかけられた。

「えっ？」

俺は目を大きく開けると、さっきまで少し遠くで遊んでいた三才から八才くらいの年齢の子たちが俺の周りに集まっていた。

うわっ、まじかよ………。

心の中で苦笑いしていると

「今日からここに住むんだよね？」

さっきバルブロと一緒に部屋に来た少年がニコニコ顔で俺に話しかける。

「ああ、うん。そうなんだ、えっと、リュファスです。これからよろしくな」

俺は何とかみんなに言い聞かせるようにそういうと

「D'ou venez-vous？」

「Quelle age avez-vous？」

「Why were you necessitated to do that？」

いつせいに質問の嵐を浴びせられた。ところどころのラナ語はわかるが、早すぎて聞き取れないし、ラナ語ではない言語は果てしなくちんぷんかんぷんで意味わからん。

俺がいうまでもなく困惑していると、あの部屋を訪れてくれた少年がみんなに何かいった。

すると、たちまち質問がやんだ。

「リュファス兄ちゃん、俺が通訳するよ。俺こっ見えてもクオーターでアガス語とラナ語はほとんどわかるし、ピア語もなんとなくわかるからさー！」

少年はなんともすがすがしい笑顔で俺に顔を向け、俺は俺でこいつすげえなと内心驚きつつ

「あ、ありがと……頼む、えーと……」

そういえば俺はこの少年の名すら知らないことを今更ながら思い知る。そんな俺の様子を見て

「俺はアノだよ、で、こっちはエイヤツ！」

アノは一気にいった。

元気だねえ……。俺もこうだったんだらうか？

内心そんなことを思いながら

「よろしくな、アノ、エイヤ」

俺は二人の目線に合わせていった。

するとエイヤがアノの服のすそを引っ張りぼそぼそとアノに早口でいった。アノはエイヤにっこりうなづき

「チヨコおしかった？ だってさ」

俺に顔を向ける。

その質問に俺はほほえみながら

「ああ、とつてもおいしかったよ、ありがとな、エイヤ。……」

・つて、訳してくれ、アノ」

「りょーかーいっ！」

アノが元気よくいって右こぶしを天高く振り上げた。

そんなこんなでアノの通訳もあり、子どもたちの面倒を見るといふよりはむしろ子どもたちの話し相手をしてその日の午後は瞬く間に過ぎていった。

空は赤く染まり、夜の帳が下りようとしているころ、教会に二人

の俺と同じ年かそれ以上の年の少年が二人やって来た。

一人は背が高く真っ黒で長い髪を後ろで一つに縛り、もう一人は俺と同じ背くらいに淡い茶色の短髪をした少年だった。子どもたちは二人を見るなり

「おかえりなさいっ！」

だいたいが一目散に二人の元にかけていった。それぞれがそれぞれの言葉で二人に声をかける。

「おー、今帰ったぞー」

黒髪の少年もうれしそうにいつて子どもたちを出迎える。

俺がその光景を見てみると、茶色の髪の少年と目が合った。少年は俺を見るなり目を見開く。そして、少年は黒髪の少年に肘打ちし、二人の視線が俺に来る。

当然ながらあまりいい思いはしない。子どもたちは二人が俺を見ているとわかると

「リュファスにいちやんだよっ！ 今日から俺たちとここに住むんだってっ！」

誰かがいった。続けてまた一言。

「アガパンサスからきたらしいよー」

それを聞いた二人は顔を見合わせ、なんだかまずそうな顔をした。そして、茶色の髪の少年が黒髪の少年に何か早口でいったかと思うと、

「みんな、もう遅いし中に入るぞー」

黒髪の少年がみんなを誘導し始めた。

そんな中茶色の髪の少年は俺の下にすばやく駆け寄り切羽詰った様子で

「時間がないっ！ ついて来いっ！」

あわただしくいった。

俺は急なことに何がなんだかわからず動揺する。

そんな中少年は俺の近くにいたアノとエイヤに

「二人とも早く中に入るんだ、俺はこのお兄ちゃんと話があるから

っ！」

そう言い聞かせる。

「はい」

アノは元気よく返事をし、エイヤはうなづき、二人は仲良く教会の中にかけていった。

その後姿を見て、みなが教会へ向かっていくのを確認すると

「とりあえずあいつが時間稼いでくれるだろうから、人気がない場所に行くぞっ！」

「えっ？」

「お前のためなんだよっ！　お願いだから何も言わずについてきてくれっ！」

少年のその必死さに俺は何かあると思い、とりあえずうなづいてこの少年についていくことにした。

教会から一目散に走り連れて行かれたのは、村の家々の中にあるほんとに人気のない暗くてじめじめしたようなところだった。ほとんどが木で作られている村の家々はどこも明かりが付き、外を歩いているものはほとんど見受けられない。誰かの家裏のこの場所で、俺と少年は息を整えていた。

俺は少年を見ながら

「いったい、……なん、でこんなこと、しなきゃ、いけなかつたんだ？」

単刀直入に聞いた。

少年は俺をじつと真剣なまなざしで見つめたまま

「おまえ、悪いことはいわない、早くこっから逃げろ」  
「え・・・・・・・・？」

逃げろ？ 一体なんだって逃げるんだ？

「自分のみがかわいければ迷わず逃げろ、じゃないと・・・・・・・・」

まさにそのときだった。

「二人ともなに話してるの？」

彼女がタイミングよくやってきたのは・・・・・・・・。

『二人ともなに話してるの』

そうにつこり笑って現れたのは、バルブロだった。優しく笑うその顔は、俺にはどこか不自然で、どこか怒っているような気がした。一方少年が軽く舌打ちし、顔色が変わったのはいうまでもない。

さて、この状況、どうしたもんだか……。

息を整えつつ、そんなことを思っていると

「この子が勝手にどこか走ってくと思ったたら、あなたたちを追ったのね」

バルブロは右隣で舌を出しながら立っているジャンの頭を優しくなでた。

なるほど、とんだ伏兵がいたわけである。犬の追跡とあつては逃げられないってことか。確かに迷惑なほど利口な犬といえば利口な犬かもしれなかった。

バルブロは犬から視線を戻し

「それで、こんなところで何をしていたの？」

そう主に隣の少年に向けていったのは明らかだった。

少年は少しの間黙っていたが、観念したかのように息を吐き、肩を落とすと

「何も。会話をしようとするときにちょうどあなたが来ましたから落ち着いた口調でいった。」

バルブロは品定めをするかのようにじっと少年を見ていた。そして、小さく息を吐き

「そう……。それは邪魔をしてしまったわね。話したいことも多いでしょうけれど、まずはうちに戻りましょう。夕食はみんなで食べるものよ。」

子供を叱りつけるようにいった。

俺がちらりと横目で少年を見た、まさにそのとき

「俺は反対です、こいつを住まわせるなんて」

いきなり少年が険しい表情でそう口にした。

「あらあら、一体それはどうして？」

微笑しながらバルブロが訊ねると

「こいつぐらいの年なら地方へ出て何かしら仕事がもらえます。院もそこまで余裕はないはずです。今後のことを思えば、こいつは院に必要ありませんっ！」

少年はバルブロから目をそらさずに言い放った。

うわー、はつきりいつてくれるな。

思わず俺は苦笑い。



「本当にあなたは院のことを思ってくれてるのね……。別にこの子をただでうちにいさせるわけじゃないし、しっかり働いてもらうつもりよ。それに、院の経営もあなたが思ってるほど悪くはないわ」

バルブロは視線を落としながらいった。

少年は何かいおうとしたが口をつぐんだのを、俺は見落とさなかった。

「もう日が暮れてすっかり暗くなったことだし、今日はとりあえず帰りましょう。あなたとは夕食後この続きはちゃんとするから……

……。お願いだから二人とも院に戻ってちょうだい」

バルブロは嘆息をもらし、俺たちを見る。

ちらりと少年に目を向けると、少年は目を伏せがちに

「分かりました……」

力なくつぶやいた。

孤児院をかけている教会へ帰るまで、誰も一言も発しなかった。ただ、ジャンの息づかいだけがやけに大きく響いていた。

教会に戻り、俺たちは食堂らしき大広間に来た。長方形のテーブルがきれいに規則的に並べられ、子供たちが各々好きな席に座って食事をしていた。テーブルの上には、質素とまではいかないがとも家庭的そうな料理ばかりが載っている。

電気の淡い光の中、子どもたちの楽しそうな笑い声と、虫の泣く音が混ざっていた。

何人かの子どもたちは食事を終え、自分が使った食器を片付けるところかへ去っていく。おそらく、自分たちにあてがわれた寝室などの部屋に向かったのだろう。

バルブロは子どもたちの様子をざっと眺めるように見て

「二人ともちゃんと食事を取ってね。サウリ、食事が終わったら、部屋に来てちょうだい、ゆっくり話しましょう。N e d i s p a s u n s e c r e t .」

最後のほうは早口のおそらくラナ語でいうと、さっさとどこかへ行ってしまった。

なんだか変なところで矛盾してる女やっだなあ……………。

俺は、そう思わずにはいられなかった。

夕食後、俺は軽くシャワーを済ませ、あてがわれた部屋のベッドで横になっていた。

今でもすごい後悔している。何故、あのとき逃げなかったのかと。あのときに逃げてさえいれば、誰も悲しまずにすんだかもしれないのに……。

でも俺は、あの後起こることなんて創造だにしていなかった。そう、あんなことが自分の身に起きるなんて、あのときの俺にはこれ

っぼちも予想できなかつたんだ。

リユファスが部屋で休んでいた頃、

「サウリ、今日はよくもやってくれたわね。ベンノ、あなたもよ。おかげで獲物をまんまと逃がすところだったわ」

教会内のある一室で、バルプロが椅子に座りながら、昼間とも打って変わった冷ややかな顔でいった。バルプロの目の前には、リ

ユファスを連れ出した少年とそれを手助けした少年が無表情で立っていた。

「二人とも黙っちゃって、何かいうことはないの？」

バルブロが訊ねるが、二人は一向に黙ったままだった。バルブロは二人を見ながらため息をこぼすと、二人から視線を外し

「そういえば、またあの子をもらいたいってお客さんが来てねえ」

バルブロが独り言のようにいったその言葉に、真っ先に反応したのは黒髪の少年、ベンノだった。その様子を面白がるように

「もちろん、断ったわよ！。あの子がいなくなると、エイヤもさぞ悲しむでしょうし。愛しの君がいなくなるのは、ベンノ、あなたも身が裂ける思いでしょう？」

バルブロが微笑した。ベンノの拳がわなわなと震える。そんなベンノをサウリは横目でちらと見ただけで、何もいわなかった。

「……、本気でそんなことしたら、ぜってえお前殺すからな」

ベンノがバルブロを睨みつけ

「じゃあ、あなたたちこそ今後気をつけることね。あなたたちの働きには感謝しているし、私だってできればあの子を手放したくはないわ。でも、今日のようなことをまたしてみなさい。私だって黙っちゃいけない。エイヤや他の子たちが悲しむのはみたくないでしょう？」

バルブロはにっこりとほほえみかえす。ベンノは舌打ちして、サウリを見た。

「二人とも、約束してちょうだい。二度とこんなことはしないって、バルブロが釘をさすように冷やかな目でそういうと

「わかりました」

サウリが事務的にいって、少ししてから

「わかったよ」

ベンノもぶつきらぼうにいった。

「いい子ね、じゃあもう話はここまで。ベンノ、私はサウリとまた

少し話があるから先に出てちょうだい」

「いわれなくてもそうするよ」

ベンノは投げ捨てるようにいって、すぐに部屋を出て行った。

「サウリ、そんなにリユファスが気に入らない？」

バルブロがサウリを見つめたままいうと

「そう、ですね」

サウリがぼそりとつぶやく。

「それとも、なにかしら、妬いてるの？」

バルブロがからかうようにいって

「あなたは本当にひどい人だ」

サウリが荒げていった。

「ふふっ、それはお互い様。悪いけど、今夜は邪魔しないでね。若い芽は早めに摘んどかなきゃ、気がすまないたちだから」

バルブロは、椅子から立ち上がり、サウリの額に軽くキスをした。

サウリは悲しげな表情でバルブロを見つめるだけだった。

夜もだいぶふけた頃、部屋をノックする音がして

「リュファス君、ちよつといいかしら？」

バルプロの声が聞こえた。

内心なんだろうと思いつながら、

「どうぞ」

ベットから出て立ち上がるとそういった。

「おじゃまします」

ガチャリとドアを開けると同時に、バルプロが静かに部屋に入ってきた。白と薄い水色のゆったりとしたワンピース風の服を着て、髪はおろしている。

「もうお風呂には入ったの？」

出し抜けにバルプロがいつて

「はい」

俺は即答した。

「どう？ もうここには慣れた？」

「どう、ですかね・・・」

「そうね、そんなにすぐは無理ね。・・・ところで、時間あるかしら？ あなたをぜひ案内したいところがあるの」「バルプロがにっこり笑いかける。

「ひま、ですけど、案内したい、ところですか？」

歯切れ悪く俺がいうと

「ええ、あなたには特に見せておきたいところなのよ」

バルブロはそういつと着いて来いといわんばかりに歩き出した。  
俺は肩を落とすと、しぶしぶ着いて行った。



「その人たちと別れて、無事国境越えしたはいいんだけど、人里に着いたとたん安心しちゃってさ、教会みたいな建物の裏で寝ちゃったんだ。俺を助けてくれた人は、その教会で孤児院を経営している女の人だった。いつもにこにこしてて、ひとあたりのよさそうな人っていえばいいのかな。その女の人の勧めで俺はそこにしばらく居候させてもらうことになったんだ。でも、その孤児院は何かおかしかった。同じ年くらいの少年には逃げろっていわれたり……」

リュファスはそこでいったん話を止め、大きく息を吐いた。

「逃げろ、ですか……」

セラフィーナが独り言のようにいつて

「ああ、来て早々自分のみがかわいけりゃ逃げろってわざわざ自分を危険にさらしてまで忠告してくれたやつがいたんだ。でも、俺はあのとき全く理解できていなかった。何一つ、分かつちゃいなかった。だから、逃げればよかったのにそうしなかった。結果、たくさんの人が傷ついたし、俺自身傷つけた。今思えば、逃げる機会なんていくらでもあったのに。まあ、結局逃げられなかったかも、知れないけどさ。とにかく、そこにきてすぐ女の人から居候の話が来て俺は簡単にオツケーしちゃって、夕方そこから俺を連れ出してくれようとかつとの逃亡は失敗に終わり、その夜、俺はその孤児院の闇に触れたんだ」

リュファスな静かな声でいった。

「孤児院の闇、ですか？」

セラフィーナがいいにくそうにいつて

「ああ、ちよつと気分悪くなるような話だけど、聞いてくれるか？」  
リュファスが微笑して顔を向けると、セラフィーナはこくりとうなづいた。

『たくさんの人が傷ついたら、俺自身傷つけた』

私も同じ。被害者ぶってるだけで、本当は加害者なのだ。たくさんの人を傷つけてしまった。

今思えば、もし、なんて、考えてもきりが無い。どうあがいても過去は変えられない。

きっと、リュファさんも同じような気持ちなんだ。割り切ってるつもりでも、やっぱり認めたくはないんだ。

私だって、逃げればよかったのに、そうしなかったのだから。

「さあ、どうぞ」

そういつて差し出されたのは、ホットミルクだった。

「どうも」

俺は一応お礼をいう。

連れてこられたのはバルプロの自室。きれいに片付けられたその部屋の、丸いテーブルの前に俺は座っていた。

バルプロは俺の正面に座って、ニコニコこちらを見ている。

「案内したかったところって、ここ、ですか？」

俺の質問に

「そう、ね。一応ここも入っているかしらね。でも、あなたに見せたいのはもっと違う場所なのよ。とりあえず、少しでもいいからそれを飲んでちょうだい。その後案内するわ」

バルプロはやや早口でそう言い返した。

のども渴いていなかったし、今夜はいつもより冷えるとはいえず、ホットミルクなどあまり気が進まなかったが、少しだけ俺はそれを飲んだ。砂糖か蜂蜜でも入れたのだらう、とても甘かったが、どこか変な味がした気がした。

バルブロは俺がそれを飲んだ様子を見てさも満足げに  
「じゃあ、早速案内するわ。ところで、あなたは口堅いほうかしら  
？」

椅子から立ち上がった俺を見下ろした。

「まあ、多分、人並みに」

俺のテキトーな返事に

「そう、ならいいわ」

バルブロは納得したようにいって、服のポケットから鍵を取り出した。そして、俺たちが入って来たドアとは違う、この部屋の奥にあるドアの鍵を開けた。

「さあ、行きましようか？」

「この先はなにがあるんですか？」

俺が興味本位で訊ねると

「見てからのお楽しみよ」

バルブロはただ笑ってそういっただけだった。

ドアの中は、レンガのような石壁で覆われており、とてもひんやりとしていた。少し歩くと、下に続く階段になっていた。ところどころ壁にある明かりのようなものが、部屋をぼうつと照らしている。  
「足元に気をつけてね」

「はい」

慣れた足取りで先を進むバルブロの背を見ながら、俺はついて行った。

どのくらい歩いただろうか？ もう結構歩いた気がする。一体こ

の先になにがあるというのだろうか？

そんな思いを胸に抱いたまま、俺はバルブロの後ろを歩いていた。さすがに疲れ始めた頃、

「さあ着いたわ」

バルブロが歩みを緩めて止まった。

階段が終わったそこは、左右に道が分かれていた。今までの土のような誇りっぽいにおいではなく、何かの花のような匂いが漂っている気がした。

「とりあえず、左から案内しましょうか」

そういつて、バルブロは左折して歩き始める。

少し歩くとそこにあっただのは、

「ろう、や？」

どこからどう見ても鉄格子で張られた牢屋みたいなところだった。それが何個も何個も先へ続いている。

「ええ、ここはかつて罪人たちを入れておく牢屋として使われていたの。大昔の戦争では、傷を負った負傷者たちの看護の場としても用いられていた。変な話でしょう？」

「そう、ですね」

「初めてここに来たとき、ぞっとしたわ。まさか、教会の地下にこんな場所があるなんてって」

バルブロが目を細めるようにいつて

「でも、どうして教会の下に？」

「そこまでは分からないの。まあ、今も昔も知られてはいけない一面というのはあるからね」

「.....」

「さあ、じゃあ、戻って右に行つて見ましようか」

落ち着いた口調でバルブロがいつて

「はい」

俺はそう返すしかなかった。

さっき来た場所に戻り、俺たちは右に進んだ。こちらは、先ほどの牢屋とは違い壁のところどころにドアが設けられていた。おそらく中が部屋になっているのだろう。

「そんないくつかを通り過ぎ、

「さっきの牢屋も見せたかったうちの一つだけど、一番見せたかった場所はここね」

ある真紅のドアの前で止まった。バルブロはノックすると

「私よ。今入っても平気？」

少し声を大きくしていった。

少ししてから

「どうぞ」

かほそい声が返ってくる。声からして女の子のような気がした。

「じゃあ、入るわね。紹介したい子がいるの」

バルブロはそう言うと俺に顔を向けて

「きつといるんな意味で驚くと思うわよ」

「にっこりそうだった。」

俺はその言葉の真意が分からず、あまりいい感じがしないままその部屋に入ることになった。

No. 42 四年間ぶんの思い - リュファス編 - quinze (前書き)

悲劇の夜

真紅のドアが、ゆっくりと開いていく。

「さあ、どうぞ」

バルプロがほほえんで先に中に入るよう促した。

「あ、りがとうございます」

軽くお辞儀をして、俺は何者かがいるであろうドアの向こうに足を一歩踏み入れる。

そして確かにいろいろな意味で驚いた。

ドアの中は、さきほどまで見てきたこの地下の部屋などの中でいちばん広いのではないと思う広さがあった。おまけに、目が眩しいほどの乳白色の光が部屋を照らしている。花かお菓子から発せられるような甘い匂いが少しと、爽やかな柑橘系の香りもほのかに部屋を漂っている気がした。

外装もできる限りきれいにしていて、この地下で一番清潔感があると主張できるものがここにはあった。さきほどまで見てきた道や牢屋とは別世界に思える。斜め少し右手には、三・四人が食事できそうな木の丸テーブル。その周りにはやはり旗の丸椅子が所狭しとテーブルを囲んでいた。テーブルのさらに右の壁には、簡単な台所のようなものがあり、小さな冷蔵庫らしきものも設置してある。そして、部屋の奥の方には一人暮らしには欠かせない最低限のタンスやベットなどがあるのも分かった。

それでも、やはり、最も目を惹いたのは、丸テーブルの左、五・六メートル先の俺の真正面に立つ一人の人物だった。俺と同じくら



いか少し低いくらいの背丈、透き通るような白い肌、金髪よりは白みがかってレモン色のような珍しい髪色に、きれいな碧い眼、血色のいい唇。白いシンプルなワンピースが、なぜかとても上品に思えた。

彼女は俺にほほえむ。その少しの動きにさらさらと長い髪がわずかに揺れた。

目がくぎづけにされた。かわいいとかきれいとかそんな言葉にいけないような、魅力が彼女にはある気がした。人間離れしているというか………。

でもなんだろう？ 何かにおびえているように見える。

後ろでバルプロがドアを閉め、俺の真後ろにつくと、

「彼女すごいでしょう？」

「………、はい」

「ほとんどの人が、あなたのような反応をするわ。いいえ、こういつたほうがいいかしら。彼女の美貌に目を見張らなかった人はそういない」

バルプロが微苦笑しながら、俺の右手に来た。

「でも、なんでこんなところに？」

「彼女を守るためでもあるの。人を惹きつけすぎるのは危険なこともあるのよ」

無表情ながらしみじみというバルプロを横でちらりと見てから、また彼女を見た。

人形みたいだ。

そう思わずにはいられなかった。きれいにきれいにされて、それ

以外のものを排除していつているような、そんな雰囲気彼女を覆っている気がした。

「アイヤ、もうベンノたちから聞いているかもしれないけれど、こちらリュファス君よ。彼アガス語しか今はまだ話せないけれど、これからこの院で働くから仲良くね」

バルブロが柔らかい口調でいうと

「はい、わかりました。リュファスさん、アイヤです。よろしくおねがいます」

案の定、高くて澄んだきれいな声が返ってきた。微笑んだ顔には、美しさだけでなくかわいらしさも伺える。

「よろしく願います……」

呆けたように俺がいうと

「アイヤ、少し疲れているんじゃない？」

バルブロが右手を右頬に当てながら少し首を傾げて、

「いいえ、でも、さきほどまでお菓子を作っていたので……」

……

「あらそう、頑張りすぎてしまったのかしらね。心配だから、今日はベンノについてもらいなさい」

バルブロがにっこり笑ってそういつた瞬間、アイヤの顔が驚きと不安の入り混じった表情になったのを俺は見逃さなかった。

「ベンノには伝えておくから、いいわね？」

「……でも」

アイヤが遠慮しがちにいうと

「お菓子エイヤに渡すために作ったんでしょう？ ちょうどいいからそれもベンノに頼みなさい。今夜はゆっくり休むこと」

有無を言わさない口調でバルブロがいった。

アイヤはじつとバルブロを見つめたまま

「わかりました、ありがとうございます」

軽く一礼した。

ふと、アイヤのうつむき加減の目が誰かに似ている気がした。最近あつた誰かに似ている。大きな瞳、長いまつげ、あまり感情をうつさないそれは、誰のものだったろうか？

記憶の糸をたどっていると、思い出したのは、チヨコをくれた少女の瞳だった。

「目が、エイヤに似てる……」

突拍子もなく俺がいうと、二人が驚いて俺に視線を向けた。

「なかなか気づく人はいないけれど、あなた意外に鋭いのね」

バルプロが感心していうと

「ありがとう、そういつてもらえるとすごくうれしい。エイヤは私の大切な妹なの」

アイヤが花が開いたようにぱつと笑った。

「ああ、だから」

さっきお菓子がどうのこうのっていつてたのか……。ただ仲がいいとか面倒見るとかあるのかなって思ってたけど、そういうことが。

確かにいわねなければ気づく人は少ないと思う。二人は髪も目の色も違う。

「エイヤに、エイヤと仲良くしてあげてください。あの子、あまり感情を表に出さないけれど、優しい子だから」

アイヤが本当に嬉しそうな顔をしながらそういったので

「はい、初対面でチヨコもらいました」

俺は素直にそれだけ口にした。

「あの子らしい……」

アイヤが目を細めた。

「さあ、じゃあまたこれからいつでも話せる機会あるから、そろそろお暇するわね。ベンノにすぐ来るよう伝言しておくから」

バルブロがやや早口でそういつて

「……………ありがとうございます。おやすみなさい。リュファスさん、今度遊びに来てくださいいな」

アイヤが柔らかな口調で返した。

「おやすみ、アイヤ」

「じゃあ、また」

そして俺とバルブロはその部屋をあとにした。

部屋を出ると、

「ここらへんはね、このアイヤのいた部屋みたいな部屋が多いのよ。なんでも以前使われていたときに、高い身分などを招いたり、牢屋で働く人の中でも上の位の人が使ったりしていた部屋らしいわ」

バルブロが淡々とした口調で説明した。

「だからですか、全く他と違っていたのは……………。別、世界かと思いました」

そう返事をした瞬間、世界がぐらりと揺れた気がした。急に眠気のような、意識が途切れていく感覚が襲う。なんだか、足元もおぼつかなくなってくる気がした。

バルブロが鍵をかけた音がして、

「あなたも相当疲れたでしょう、もう少し先に休める部屋があるから、少しそこで休みましょう」

バルブロに体を支えられた。

正直ここまで疲労が溜まっているものかと、バルブロに支えられながら意識が薄らくなか歩き続け、そしていつしか記憶がいったん閉じていった。

頭の中に最後に入り込んできたのは、

「そう、ここは別世界なのよ」

誰かの言葉だった。

それから、どれくらいたっただろうか？  
全身の違和感に目が覚めた。

ぼやけた視界にほの暗いレンガか何かの天井が映る。何とか首を横に傾けると、ベットの上に倒れているらしいことが分かった。だるさと、体をやむことなく走る痺れから手足を動かそうとする気さえ起きない。いや、動かせない。

「やっとお目覚めかしら？」

こつこつと足音を立て、視界にバルブロが入ってきた。俺はバルブロの格好になんとか目を背ける。

一体何を考えているのだろうか？ 今までのイメージと一転して、下着姿といっても過言ではない格好をして俺の近くに立っているこ

の女に、疑問を感じるしかなかった。透けて意味をなさない黒いワンピースのようなものを着て、その下には最低限の場所を隠すための下着しか身につけていないようだった。

「気分はどう？ 多少加減はしたつもりなんだけど」

面白そうに笑う彼女に

「なにが、ですか？」

苛立つしかなかった。頭もすつきりしない。

「さっきのホットミルクに、ちょっとばかり薬を混ぜておいたの。だってあなたなかなか往生際が悪そうだったから」

俺の頭を撫でながら傍らでバルブロがいった。その手を振り払う力さえ出ない。

「な、んで、んなこと」

睨み付けることしかできない俺に

「あなたと今から、したいから」

俺の頬に両手を添えてバルブロがいう。続けて

「あなた本当にとことん運が悪いわね、訳ありでこの国に逃げてきたっていうのに、まさか私に捕まるんなんてね」

バルブロは軽やかにベットの上に来ると、俺に馬乗りする形になった。そして、ワンピースのようなものを脱いでいく。

さすがに彼女の行動の意味が分かってきた俺に

「サウリたちがどうにか逃がそうとしたみたいだけど、こうみえて私狙った獲物は仕留めないとすまないたちなの。だからおとなしくあきらめて」

そういつて、俺の額、頬、そして唇に口づけた。

「なんで？」

かろうじて発した俺の言葉に

「だってあなた私の好みなんですもの。悪いようにはしないわ、他の子みたいに使い捨てせず、側においてあげる」

ああ、こついうことだったのか……。どうして、もっと早くに気づかなかったんだろっ？ あいつらがせっかく逃がそうとしてくれたのに……。

服を脱がされながら、後悔と怒りが俺の中を満たしていく。

執拗にバルブプロが俺の体に触れる。その度に、

「やめろよ」

そう訴えるしかできなかった。ただでさえ飲まされた薬で気分が悪いの、余計に気持ち悪い。

そんな俺をバルブプロは見下ろして微笑むだけだった。

「どんなに叫んでも、誰も助けなんか来ないわよ。誰もあなたを助けてくれる人なんていない」

うそだろ、こんなのって。

ついさっきまで、自分にこんなことが起こるなんて思っても見なかった。いや、疑いようがなかった。でも、実際に今自分に起こっている状況は現実以外の何者でもない。夢じゃない。

いやだ。

いやだいやだいやだ。

なんでだよ？ 何で俺だけ？ 急に両親に死なれて、なんでこんな目に遭わなきゃなんねえんだよっ！ 理不尽だろっ。ふざけんなよっ！

心とは反対に体は自分勝手に動いていた。俺の知らない、コントロールできないところで、勝手にことは進んでいく。俺の意思なんて完全に無視して……。

「こんなに怯えて、かわいい……」

目の前の人物が満足げにいう声がした。

「やめるよ………。なんで、んなことすんだよ?」

俺がそういうと、なぜか急に態度を変え

「………。なんで、か。そんなの、やっぱりしたいからしかないじゃないかしら?」

バルプロは吐き捨てるようにいった。

そしてどんどん俺に対する仕打ちがエスカレートしていく。俺はどうか抵抗しようと体を動かそうと試みるが、思うように動いてはくれなかった。空しい俺の行動をあざ笑うかのようにバルプロの行動は止まらない。

やめるよ。いくらなんでも、これはねえよ。まじめにふざけんなよ。やってられねーよ。なんで俺だけ……。……。なんで俺なんだよっ!

思わず泣きそうになる。

「大丈夫、どうせあなたたちは痛みなんて感じないんでしょうからバルプロのその言葉に、彼女が最後の行動に移そうとしている」とに気がついた。

「やめるよ………。」

動けよ、動けよっ、俺の体っ! なんでこんなときに、肝心なときに動かねえんだよっ!

「やめるっ!」

苛立ちと焦りが俺を襲う。バルプロが笑う声がした。

「やめるーっ!」



そして世界が真っ黒に染まっていった。

夢を見た。

真っ白な、真っ白な世界だった。

ふと、誰かがほほえみかけた、気がした。

振り向くと、俺と同じ年か、少し上の少女がいた。

「大丈夫、こっちだよ」

優しくて柔らかい落ち着いた声だった。

顔はおぼろげではつきり分らない。

「君は………?」

夢の中の俺が訊ねた。

その質問に少女は笑って俺を見つめ返すだけだった。

「ほら、こっちだよ、もう少し。頑張つて、リュファス」

握られたては思ったよりも冷たくて、しつとりとしていた。

なんで、俺の名前………?

「また、会えるよ。いつか、絶対、だから、忘れないで」

君は、誰？

彼女の声で満ちた瞬間、まばゆいばかりの光が差した。

体がだるい。頭も痛いし、歯も痛い、どこもかしこも痛い。目は目やにか何かでくっつき、上手く開けられない。

どうにかひつついた重たいまぶたを開こうとしていると

「ようやくお目覚めか……」  
冷ややかな声が飛んできた。

目を開き視界がくつきりしてくると、俺は強い光の方向に顔を向

けた。そこにいたのは昨日俺をここから救い出そうとしてくれた、サウリだった。

開け放たれたカーテンから漏れる光が、やけにまぶしく感じた。「だからいったろ、逃げろって」

サウリが俺に背を向けたまま、カーテンをきれいに端によせ、窓を開け放っていった。

振り向くと、俺に同情のような、なんともいえない苦痛そうな表情を向ける。

口が渴き、嫌な味が広がっていたが、

「本当にその通りだった……。昨日は助けようとしてくれてありがとう、逃げられなくてごめん……。」「

何とかそう口にした。その言葉にサウリは嘆息をもらすと

「どういたしまして。まだ完全に薬抜け切れてないだろ？ 無理すんな。昨日の今日だし、ゆっくり休め」

諭すように俺にいう。

「……。どうして？」

独り言のように俺はつぶやいた。サウリは何も言い返さず、じつと俺を見ていた。

そんなサウリから、視線を外し、天井を見つめながら

「どうして、あんなこと？ いや、一体どうなってるんだ？ この教会。あの女一体何者なんだよ？」

まだ昨日のことが信じられなかった。夢だと思いたい。でも、これは夢じゃない。あくまで現実だ。

「……。ちゃんと、説明する。もうお前もここからしばらく逃げられないと思うから」

サウリの諦めを通り越したような、はっきりとした声が耳に響く。「ちゃんと説明するから、まずは体調を元に戻すのが先決だ。少しでもいいから何か口にしろ。食べるもの持ってくるから」

そういつてサウリはさっさと部屋を後にしていつてしまった。

しん、と静まり返った部屋に俺は一人になった。ベッドの上で、右手を天井に向け突き出す。

ほんと、なにしてんのかな？ 俺……………。

苦笑いするしかない。今はもうどうしようもない。

よくよく自分の無力さを痛感する。今まで、どれだけ人に頼り、守られてきたのか思い知る。普通が一番なんていうけれど、今となつてはそれが本当だと思う。普通の、ありふれた生活にこそ、何気ない幸せがあつて、それ以上なんて望みすぎてもこうして逆に身を滅ぼすこともある。

もし……………、もし、あの列車に乗って旅行なんて行こうとしなかつたら……………。

こんなことにはならなかつたのに。

結果論でしかないけれど、そう思わずにはいられない。

もし、なんてきりがない。

。あのまま、逃げていれば、バルブロに出会わなければ……………。  
。アガパンサスに残っていたら……………。

それでも、きっと正解なんて分からない。結局、先のことなんてどうしようもないのだ。

左腕で目をこすつた。悲観的になつたて、過去なんか変えられない。分かつてる、分かつてるけど。やっぱり納得なんていくわけがない。どうして、俺がこんな目に……………？

開け放たれた窓のほうから、鳥のさえずりと子どもたちの声がすかに聞こえてくる。

子どもたちは知っているのだろうか？ いや、知らない。理由は分からないけど、そんな気がする。

大きく深呼吸すると、ドアをノックする音がして  
「入るぞ」

声と同時にサウリが入ってきた。

どうにか、上半身を起こす。今まで味わったことのない痛みが、体を走った。そんな俺の苦痛の表情を見てか

「あんまり無理すんな。あんな毒盛られて普通半日じゃまともな体がいふこと利かないさ。でも………、もしかしたらお前少しは耐性あるのかもな。たいていのやつは吐くか熱出すかするのに………、まあ、そんな耐性あってもうれしくないか」

お盆に食事を載せながら、サウリが俺の隣にきた。お盆の上には、おかゆのようなものが載っている。湯気を立てているそれを見ると、気分は優れないものの垂涎する思いがこみ上げてくる。

「………、アイヤが作ってくれたんだ。もしかしたらこうなるんじゃないかって。あとで礼いえよ。解毒作用のある薬草とか入ってるし、味もお墨付きだ」

小さな土鍋には、緑と白のコントラストが広がっていた。どうやら、麦か何かの雑穀も混じっているらしい。お盆を受け取ると、俺は土鍋の横においてあった匙を手を取った。そして、匙をかゆの中に突っ込み一すくいして、息を吹きかけて熱を冷ました。ゆっくりとそれを口に運ぶと、

「うまい………」

思わず声がもれた。俺のその様子を見てサウリが満足げに

「だろ？ 体調が悪いときは、だいたいアイヤのこれ食べれば治っちまう」

「薬草が入っているとかい니까、あんまりおいしそうな気はしてなかったけど、すげーうまい」

俺の正直な感想にサウリはほほえむ。

そこまで味は濃くなくちょうどいい塩気。また、何でだしをとっているのかさっぱりとした味が口に広がる。薬草は苦味も何も感じず、米や雑穀と一緒にすると口に入れられる味になっていた。もくもくと食べる俺にサウリは何もいわず、食べ終わるのを待っていてくれた。

食べ終わると

「ごちそうさまでした」

満足以外の何もなかった。

「……………、ほんとお前が丈夫過ぎんのか、アウリの料理がすごいのか」

サウリが呆れていった。

「病み上がりとは思えねえな」

「俺も正直驚いてる……………」

窓の景色を見ながらぼつりともらず。

「……………、なんでこんなとこにきちまったんだよ」

俺の心を代弁するかのように、サウリがつぶやいた。

「俺だつて、俺が、聞きたいさ。……………、でも、ただ、アガパンサスにはいられなかつたんだ。どこか遠くに、誰も知らない遠くに逃げたかった。そして気づけばここに來てしまっていた」

気づけば勝手に口が動いていた気がする。

「そっか……………。お前も同じか……………」

聞こえるか聞こえないかの声でサウリがいった言葉に

「え？」

思わず聞き返してしまう。

「いや、なんでもない。そういや、目が覚める前、なんかようやく

落ち着いてたみたいだけど、いい夢でも見たのか？」

はぐらかすようにサウリが話題を変えた。

「ああ、なんかすごい安らぐ夢だった」

真っ白な空間、おぼろげな記憶の彼女……。

「無意識と意識って知ってるか？ 夢では現実と反対のことがよく起きるらしいぞ。なんでも、夢の中で彼女とデートしていて彼女から『今日すっごく楽しいっ！』とかいわれると、現実の実際のデートでは彼女が何かしら楽しくないと思ってることがあるからだとか……。」

「なんかやだな、そういうの」

「ほんと、皮肉なもんだよな」

微笑するサウリに

「……確かに、そうかも、な。あんなことがあったから、あんなちよつと不思議だったけど、いい夢見たのかも」

ため息混じりにそう返すしかなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4888i/>

---

籠の鳥、雲を慕う

2012年1月14日10時47分発行